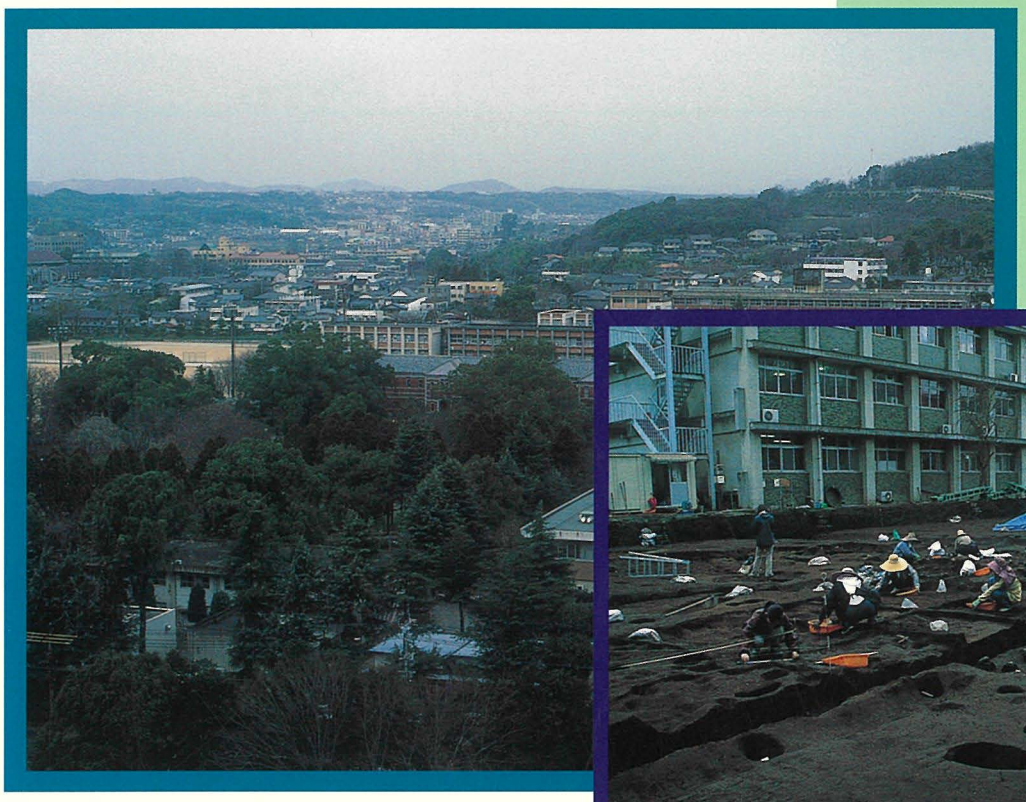
THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESERCHERS IN THE KUMAMOTO UNIVERSITY/1998

5

熊本大学埋蔵文化財調査室年報　1998年度



1999　熊本大学埋蔵文化財調査室

THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESERCHERS IN THE KUMAMOTO UNIVERSITY/1998

5

熊本大学埋蔵文化財調査室年報　1998年度

1999　熊本大学埋蔵文化財調査室

序　文

熊本の地は太古から人々が社会を形成して生活を営み長い歴史を積み重ね今日に至りました。したがって地下に埋もれた文化遺産も豊であり、熊本大学のキャンパスは、その殆どが「埋蔵文化財包蔵地」に指定されています。本学の現地再開発計画が実施されるに当たり、埋蔵文化財を調査記録し大切に保存する目的で、平成６年度に設置された埋蔵文化財調査室及び埋蔵文化財調査委員会は、年々極めて精力的に調査活動を展開し、数多くの貴重な成果を蓄積しつつあります。

本平成10年度では、全学の理解と協力によって８月にスタッフ１名を新たに補強し、22箇所に及ぶ調査を行うことができました。中でも黒髪北地区の文化サークル室移築に伴う発掘調査により、縄文期・弥生期・そして近世に至る人々の生活の跡が確認されましたこと、また、理学部自然科学研究所総合実験棟の新営工事に伴う発掘調査から縄文後期及び古代の土器・石器・古代竪穴住居跡など、それに近世溝の存在が明らかにされましたことは、本学キャンパスの歴史を知る上で特筆すべき成果であろうと思慮いたします。

これらの成果は、財政的にも亦人的にも不充分な条件下での調査研究を通じて得られたものであり、過去５年間、調査を主宰してこられた調査室長甲元眞之教授、調査委員長北野隆教授はじめ関係各位の熱意と努力の賜物であります。熊本大学を代表して深く感謝いたしますと共に、熊本大学埋蔵文化財調査室年報が広く活用されることを強く願うのであります。

1999年３月19日
熊本大学
学　長　江口吾朗

例　言

1．本書は熊本大学構内において，1998年4月1日から1999年3月31日まで行われた埋蔵文化財の調査および熊本大学埋蔵文化財調査室の活動内容に関する年次報告書である．

2．構内遺跡の調査は，昨年度に引き続き，年次と調査順を表す調査番号で表すこととし，出土遺物や記録類もこの番号で整理・管理している．

3．遺跡略号は，地区ごとにローマ数字3文字で以下のように表記した．黒髪町遺跡黒髪南地区（KKS），同北地区（KKN），本庄遺跡医学部構内（HJM），同病院構内（HJH）．

4．遺物への注記は，遺跡略号＋調査番号＋出土遺構（位置）の順で行った．

5．本書に掲載した遺物やその他の出土遺物および調査にかかわる記録類はすべて熊本大学埋蔵文化財調査室にて保管している．

6．本書で使用した遺構実測図は，小畑弘己・大坪志子をはじめとする調査参加者が，遺物実測・製図は小畑・大坪・辻村美代子・藤木聡・小倉卓他が行い，その一部は業者委託を行った．

7．なお，遺構実測に遺跡調査汎用システム（カタタVer.3ーアーケオテクノ社）を使用した．

8．本書の執筆は，II－2章を大坪が，付篇および抄録を松嶋木綿子が，跋文を甲元室長が，英文サマリーを大坪・小畑が、ハングル文については小畑が行い朴美子氏（文学部文学科）に校閲していただいた。その他の章は小畑が執筆した．

9．本書の編集は，甲元室長の指導のもと小畑が行った．

目　次

〈本文目次〉

第Ⅰ章　本年度の調査概要 ―― 1
第Ⅱ章　発掘調査 ―― 5
Ⅱ-1　９８０１調査地点 ―― 5
1．遺跡の立地と周辺遺跡 ―― 5
2．調査の概要 ―― 5
3．調査の結果 ―― 5
a　基本層序 ―― 5
b　検出遺構と遺物 ―― 6
4．成果と問題点 ―― 13
Ⅱ-2　９８０２調査地点 ―― 15
1．遺跡の立地と周辺の遺跡 ―― 15
2．調査の概要 ―― 15
3．調査の結果 ―― 18
a　基本層序 ―― 18
b　検出遺構 ―― 20
c　出土遺物 ―― 22
4．成果と問題点 ―― 26
Ⅱ-3　９８０７調査地点 ―― 27
1．遺跡の立地と周辺遺跡 ―― 27
2．調査の概要 ―― 27
3．調査の結果 ―― 27
a　基本層序 ―― 27
b　検出遺構と遺物 ―― 29
4．成果と問題点 ―― 35
Ⅱ-4　９８１０調査地点 ―― 37
1．遺跡の立地と周辺遺跡 ―― 37
2．調査の概要 ―― 37
3．調査の結果 ―― 40
a　基本層序 ―― 40
b　検出遺構と遺物 ―― 42
4．成果と問題点 ―― 42
第Ⅲ章　立会・試掘調査 ―― 45
Ⅲ-1　黒髪北地区 ―― 45
1．黒髪北地区環境整備事業に伴う立会調査（9802） ―― 45
Ⅲ-2　黒髪南地区 ―― 45
1．工学部校舎新営排水管撤去工事に伴う立会調査（9804） ―― 45
2．工学部３号館電設工事に伴う立会調査（9809） ―― 45
3．工学部９・１号館屋外埋設管工事に伴う立会調査（9808） ―― 46
4．文化部室取設工事に伴う樹木移植立会調査（9802） ―― 46
5．理学部自然科学等総合実験棟新営支障配管替工事に伴う立会調査（9810） ―― 47
6．工学部実験室新営工事に伴う試掘調査（9811） ―― 47
Ⅲ-3　本荘北地区 ―― 47
1．大学病院病棟新営工事試掘調査（9805） ―― 47
2．中央診療棟新営工事に伴う試掘調査（9806） ―― 48
3．薬剤部注射患者毎セット支給室取設工事に係る試掘調査（9807） ―― 48
4．大学病院病棟新営工事支障配管替工事に伴う立会調査（9805） ―― 49
Ⅲ-4　本荘南地区 ―― 49
1．医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営に係る支障配管替工事立会調査（9801） ―― 49
2．医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営に係る樹木伐採工事立会調査（9801） ―― 49
3．医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営に係る配管切替工事立会調査（9801） ―― 50
Ⅲ-5　大江地区
1．渡鹿団地東側ブロック塀改修工事に係る立会調査（9812） ―― 50

跋　文 ―― 51
Summary ―― 52
付篇（1998年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織） ―― 53
報告書抄録 ―― 56

〈図版目次〉

図１　黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図（1/25000）―― 2
図２　本荘南地区における調査地点位置図(1/2000) - 6
図３　9801調査地点遺構配置実測図（1/200）―― 7
図４　調査区壁・各遺構土層断面実測図（1/100・1/40）―― 8
図５　28号竪穴住居址・５号掘立柱建物跡実測図（1/50）―― 10
図６　9801調査地点出土遺物実測図１（2/3）―― 11
図７　9801調査地点出土遺物実測図２（2/3）―― 12
図８　15号土壙および出土遺物実測図（1/40・2/3）―― 14
図９　黒髪北地区における調査地点位置図（1/2000）―― 16
図10　9802調査地点遺構配置実測図（1/200）―― 17
図11　9802調査区壁土層断面実測図（1/100）―― 19
図12　9802調査地点検出遺構および出土遺物実測図（1/20・1/40・1/3）―― 21
図13　9802調査地点出土遺物２（1/3）―― 23
図14　9802調査地点出土遺物３（1/3）―― 24
図15　9802調査地点出土遺物４（1/3）―― 25
図16　9802調査地点出土遺物５（2/3）―― 26
図17　本荘北地区における調査地点位置図（1/2000）―― 28
図18　9807地点遺構配置・壁土層実測図（1/200・1/100）―― 29
図19　竪穴住居址実測図（1/50）―― 31
図20　9807調査地点出土遺物実測図１（1/3）―― 32
図21　掘立柱建物跡・道路跡実測図（1/100）―― 34
図22　9807調査地点出土遺物実測図２（1/3）―― 36
図23　黒髪南地区における調査地点位置図（1/2000）―― 38
図24　9810地点遺構配置実測図（1/200）―― 39
図25　調査区西壁土層断面実測図―― 40
図26　６号竪穴住居址実測図（1/50）―― 41
図27　２号竪穴住居址実測図（1/50）―― 43
図28　9810調査区出土遺物実測図（1/3）―― 44
図29　各地区の土層断面柱状図（1/20）―― 50

〈写真目次〉

写真１　Ⅰ区全景（北西から）―― 5
写真２　Ⅰ区全景（東から）―― 9
写真３　Ⅱ区全景（北東から）―― 9
写真４　４号溝遺物出土状況（南から）―― 9
写真５　25号溝および27号竪穴住居址（北西から）― 9
写真６　28号竪穴住居址（東から）―― 13
写真７　５号掘立柱建物（南から）―― 13
写真８　15号土壙（南東から）―― 13
写真９　西区北壁（南東から）―― 15
写真10　西区全景（東から）―― 18
写真11　東区全景（西から）―― 18
写真12　181号土壙（西から）―― 20
写真13　３号溝（西区）（西から）―― 20
写真14　５号溝（南から）―― 22
写真15　縄文・弥生土器出土状況（北から）―― 22
写真16　押型文土器出土状況（北から）―― 22
写真17　調査委員会現地説明会の一コマ―― 26
写真18　調査区全景（南西から）―― 27
写真19　道路面２（東から）―― 30
写真20　道路面土層断面（東から）―― 30
写真21　３号竪穴住居址（南から）―― 30
写真22　３号竪穴住居址竈（西から）―― 30
写真23　４号竪穴住居址（南西から）―― 33
写真24　４号竪穴住居址遺物出土状況（南西から）― 33
写真25　100号掘立柱建物跡（西から）―― 33
写真26　200号掘立柱建物跡（南から）―― 33
写真27　300号掘立柱建物跡（南東から）―― 35
写真28　400号掘立柱建物跡（南東から）―― 35
写真29　405号ピット須恵器蓋出土状況（北西から）- 35
写真30　調査区全景（南から）―― 37
写真31　２竪穴号住居址（西から）―― 40
写真32　６・７号竪穴住居址（南から）―― 40
写真33　10号溝（西から）―― 42
写真34　138号遺構（東から）―― 42
写真35　紡錘車出土状況（南から）―― 42
写真36　9809調査地点立会調査風景（南西から）―― 46
写真37　同掘削状況（西から）―― 46
写真38　9808－ａ地点立会調査風景（南東から）―― 46
写真39　同掘削状況（南西から）―― 46
写真40　9811調査地点試掘トレンチ土層堆積（西から）―― 47
写真41　同トレンチ２遺物出土状況（南西から）―― 47
写真42　9806調査地点試掘調査風景（西から）―― 48
写真43　同試掘トレンチ土層堆積（南から）―― 48

〈表目次〉

表１　熊本大学敷地埋蔵文化財包蔵地指定一覧―― 1
表２　1998年度調査一覧―― 3

第Ⅰ章　本年度の調査概要

本年度の調査は，表２にあるように，発掘調査４件，立会調査16件，試掘調査４件であった．

小規模な立会調査を除くと，大規模な発掘調査は７月より開始した．建築事業の計画が重なり，発掘調査を並行して実施せざるを得ない状況のため，委員会決議により，８月より助手１名を増員して事に対処した．

７月より実施した医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営工事に伴う発掘調査（9801）では，古代を中心とする溝・竪穴住居址・掘立柱建物址などが検出され，1995年度に実施した医学部研究実験棟の調査に続き，医学部構内で実施された２回目の大きな発掘調査であった．また，この医学部における調査終了後間もなく実施した黒髪北地区における文化部室取設工事に伴う発掘調査（9802）では，本遺跡群では初めて縄文時代早期の遺物包含層および弥生時代中期後半を中心とした遺物包含層を確認し，昨年度実施した工学部校舎新営工事に伴う調査で発見された弥生中期後半の甕棺墓地との関連で当該期の集落が近辺に存在することをさらに裏付ける結果となった．

大学病院構内では，表２にみるように３回の試掘調査が実施され，その結果，薬剤部注射患者毎セット支給室等取設工事に伴う調査が実施された(9807)．本調査では中庭という条件が幸いしてほとんど撹乱がなく，遺構の保存状態が良好であった．古代を中心とする竪穴住居址・掘立柱建物や近世以降のものと思われる道路跡などを検出した．

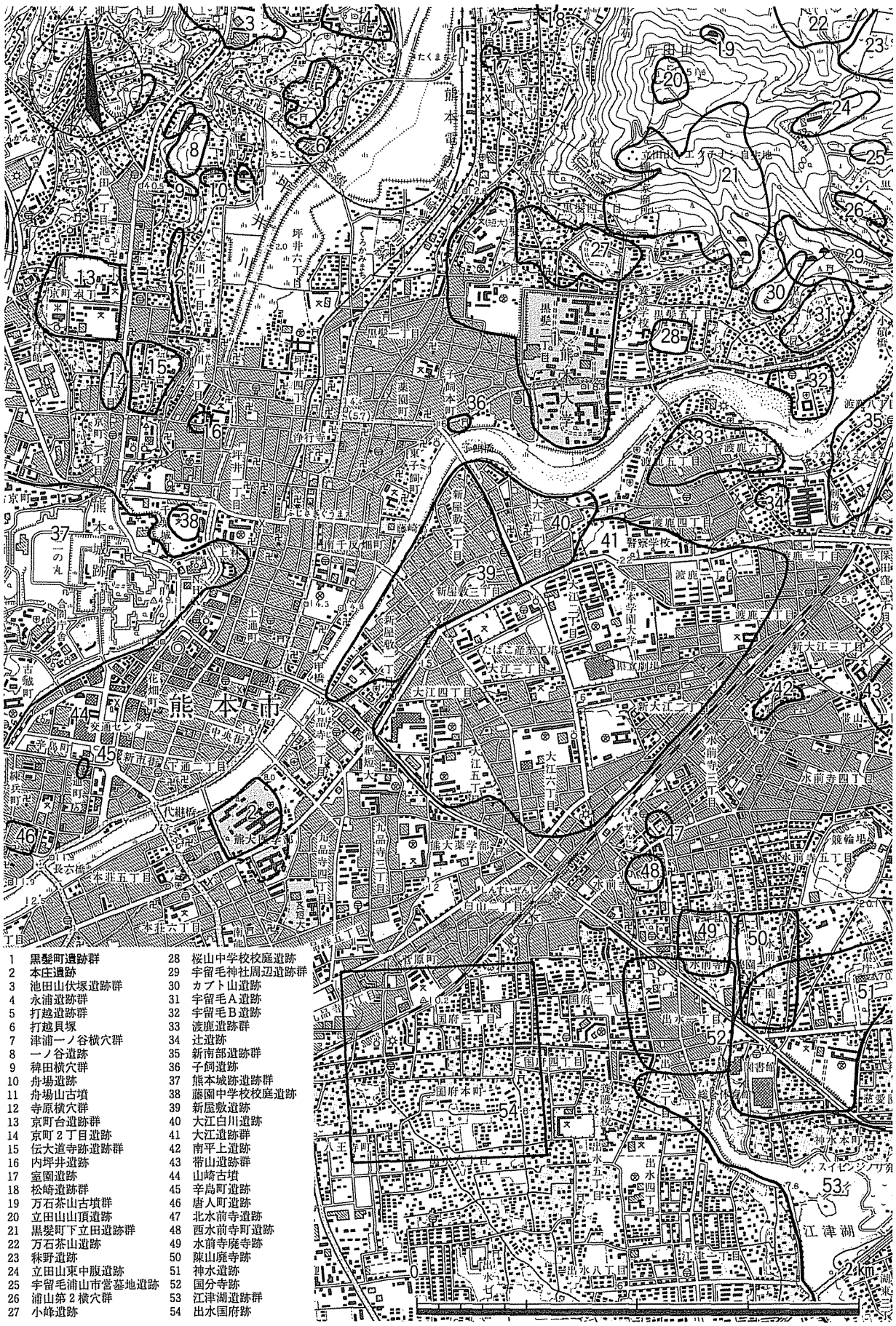
また，大学病院病棟建設工事予定地においても，古墳時代後期から古代にかけての遺物包含層が確認できたため，発掘調査が必要とされ，本工事の事前整備工事に伴う立会調査を実施した(9805)．その結果，古代の竪穴住居址や遺物包含層を確認している．

本年度は上記の調査で終了予定であったが，年末において補正予算の令達があり，急遽理学部校舎の新営が決定した．周辺の状況からみて遺構の残りは良好であると予想されたことから，１月より調査を開始した．配水管切り替えに伴う調査の実施後，１月末より本調査に突入した．年報執筆段階ではまだ調査中であり，全体を把握できていないが，古墳時代後期～古代を中心とする集落の遺構が検出され，竪穴住居址は20基余りが確認された．遺構の切り合いも密であり，集落の中心部の観がある．また，その下部からは縄文時代後期の遺物包含層が検出され，縄文時代遺物も出土している．

表１　熊本大学敷地埋蔵文化財包蔵地指定一覧（アミ部分は本年度調査した地区をさす）

No.	地区名（学部名）	所在地	遺跡名称	遺跡の種類	遺跡の時代	備考
1	黒髪北地区（法・文・大教センター） 黒髪北地区（教育）	熊本市黒髪２丁目40-1 熊本市黒髪５丁目17-1	黒髪町遺跡	集落址	縄文・弥生・奈良・平安	
2	黒髪南地区（工・理）	熊本市黒髪２丁目39-1	黒髪町遺跡	集落址	縄文・弥生・奈良・平安	
3	京町地区（教育学部附属小・中学校）	熊本市京町本町5-12	京町台遺跡	集落址	弥生・近世	
4	城東地区（附属幼稚園）	熊本市城東5-9	熊本城址	城館址・熊本城関連遺構	近世	
5	教育学部新南部農場	熊本市新南部居屋敷240-1	新南部遺跡	散布地	縄文・弥生	
6	理学部臨海実験所	天草郡松島町大字会津6061	前島貝塚	集落址	縄文・弥生	1995年度の調査によって貝塚でないことが判明
7	本荘南地区（医）	熊本市本荘２丁目2-1	本庄遺跡	散布地・集落址	縄文・弥生・奈良・平安・中世	
8	本荘北地区（医学部附属病院）	熊本市本荘１丁目1-1	本庄遺跡（熊大病院敷地遺跡）	散布地・集落址・墓地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近代	
9	九品寺地区（医・薬）	熊本市九品寺４丁目24-1	本庄遺跡	散布地・集落址	縄文・弥生・奈良・平安・中世	周辺遺跡
10	薬学部	熊本市大江本町5-1	出水国府跡	官衙跡	奈良・平安	周辺遺跡
11	大江地区	熊本市渡鹿４丁目1-1	大江遺跡	集落址	奈良・平安	

図１　黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図（1/25000）



1　黒髪町遺跡群
2　本庄遺跡
3　池田山伏塚遺跡群
4　永浦遺跡群
5　打越遺跡群
6　打越貝塚
7　津浦一ノ谷横穴群
8　一ノ谷遺跡
9　稗田横穴群
10　舟場遺跡
11　舟場山古墳
12　寺原横穴群
13　京町台遺跡群
14　京町２丁目遺跡
15　伝大道寺跡遺跡群
16　内坪井遺跡
17　室園遺跡
18　松崎遺跡群
19　万石茶山古墳群
20　立田山山頂遺跡
21　黒髪町下立田遺跡群
22　万石茶山遺跡
23　秣野遺跡
24　立田山東中腹遺跡
25　宇留毛浦山市営墓地遺跡
26　浦山第２横穴群
27　小峰遺跡
28　桜山中学校校庭遺跡
29　宇留毛神社周辺遺跡群
30　カブト山遺跡
31　宇留毛Ａ遺跡
32　宇留毛Ｂ遺跡
33　渡鹿遺跡群
34　辻遺跡
35　新南部遺跡群
36　子飼遺跡
37　熊本城跡遺跡群
38　藤園中学校校庭遺跡
39　新屋敷遺跡
40　大江白川遺跡
41　大江遺跡群
42　南平上遺跡
43　帯山遺跡群
44　山崎古墳
45　辛島町遺跡
46　唐人町遺跡
47　北水前寺遺跡
48　西水前寺町遺跡
49　水前寺廃寺跡
50　陳山廃寺跡
51　神水遺跡
52　国分寺跡
53　江津湖遺跡群
54　出水国府跡

表２　1998年度調査一覧

調査期日	調査番号	地点名	調査の種類	調査面積	時代	遺構・遺物
98・4・14	９８０４	工学部校舎新営排水管撤去工事	立会	10m²		掘削により遺構なし.
98・6・26～7・2	９８０１	医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営支障配管替工事	立会	2.4m²	古代	遺構・遺物認められず.
98・7・6	９８０１	同樹木伐採工事	立会		古代	遺構・遺物なし.
98・7・13	９８０９	工学部３号館電気設営工事	立会	3 m²	古代	遺物包含層を確認.
98・7・28～9・10	９８０１	同新営工事	発掘調査	972m²	縄文・古代・近世	溝10条・竪穴住居址３基・掘立柱建物１棟・土壙１基.
98・9・21～22	９８０３	黒髪地区文化部室取設工事に伴う樹木移植工事	立会	9 m²		遺物・遺構なし.
98・9・25～11・6	９８０２	黒髪地区文化部室取設その他の工事	発掘調査	575m²	縄文・弥生・近世	縄文土器・弥生土器・石器等・土壙・溝・縄文弥生遺物包含層確認.
98・9・28	９８０５	大学病院病棟新営工事	試掘調査	10m²	古墳・古代	古墳・古代土器.
98・9・29	９８０６	大学病院中央診療棟新営工事	試掘調査	5 m²		河成砂礫層を検出. 遺構・遺物なし.
98・9・30	９８０７	大学病院薬剤部注射患者毎セット支給室等取設工事	試掘調査	2 m²	古代	遺物包含層・柱穴検出. 古代土器片.
98・10・6	９８０９	工学部９・１号館屋外埋設管工事	立会	30m²		遺構面に達せず. 遺物なし.
98・10・28～11・20	９８０７	大学病院薬剤部注射患者毎セット支給室等取設工事	発掘調査	175m²	古代	縄文土器・石鏃等 古代竪穴住居址６基, 掘立柱建物５棟, 近世溝２条, 道路１.
98・11・2	９８０１	医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター関連図書館解体工事	発掘調査	139m²		削平のため存在せず.
98・12・14～12・18	９８１０	理学部自然科学等総合実験棟新営支障配管替工事	立会	35m²	古代	遺物包含層・柱穴検出. 古代土器片.
98・12・16	９８０２	黒髪地区文化部室新営排水管敷設工事	立会	35m²	古代	遺構面に達するが遺構・遺物はなし.
98・12・17～1・10	９８０５	大学病院病棟新営に伴う支障配管替工事	立会	333m²	古代	竪穴住居址・古代土器片.
99・1・12	９８１１	工学部実験室新設工事	試掘調査	14m²	縄文後期	土器片.
99・1・21～3・25	９８１０	理学部自然科学等総合実験棟新営工事	発掘調査	1,098m²	縄文後期・古代・近世	縄文土器・石鏃等 古代竪穴住居址24基, 柱穴多数, 溝３条, 近世溝１条.
99・2・2	９８０２	黒髪北地区環境整備事業に伴う文化部室解体	立会	260m²		遺構面には達せず. 遺物なし.
99・2・10	９８０２	黒髪北地区環境整備事業に伴う建築工事	立会	40m²		遺構面には達せず. 遺物なし.
99・2・18	９８０２	黒髪北地区環境整備事業に伴う植樹工事	立会	12.3m²		地表下２ｍで弥生時代遺物包含層・遺構面を確認. 遺構・遺物なし.
99・2・9～	９８０２	黒髪北地区環境整備事業に伴う電気配線工事	立会	4 m²		地表下90cmで水田土を検出. 遺構・遺物なし.

99・3・10～3・31	9801	医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営に係る配管切り替工事	立会	57.5㎡	現在調査中.
99・3・11～12	9812	大江地区渡鹿団地東側ブロック塀改修工事	立会	90㎡	遺構・遺物なし.

以上みたように本年度の調査は、黒髪北地区・南地区および本荘北地区・南地区と4件の広い面積の発掘調査が実施され、いずれの調査においても多大な成果を挙げることができた。しかし、あらためて感じざるを得なかった点は、これら遺跡群が縄文時代早期から近世までのとくに古代を中心とした複合的な遺跡であり、その重要性が発掘調査の進展によってさらに強まってきたことである。つまり構内のどの地点を掘っても、遺構・遺物が出るという濃密な分布状況を示しており、調査体制の充実なくしては調査の精度を維持することが困難となってきた。さらに土器や石器などの人工的な遺物のみを取り上げて良しとする旧来の発掘法のみでなく、地質学・生物学を始めとする関連諸科学の諸分析法を応用した遺跡から得られるさまざまな情報を総合的に収集する調査法の適応が急務であり、微弱ながら学内において協力を頂ける教官各位と実験的な試みを開始しているところである。これも今後の大きな課題の一つである。

第II章　発掘調査

II－1　9801調査地点

1．遺跡の立地と周辺遺跡

本地区に所在する本庄遺跡は，熊本市遺跡地図№8－95の熊大病院敷地遺跡として周知されている遺跡である．医学部構内においては1995年度に実施したアイソトープ実験棟建設に伴う発掘調査（9511）の結果，8世紀代を中心とする竪穴住居址群と縄文時代後期の遺物包含層が確認され，本医学部構内も遺跡包蔵地に含まれることが明らかになった（熊本大学埋蔵文化財調査室年報2 1995）．

また1996年度に実施した大学病院内の医学部校舎建設に伴う発掘調査では，「杉本寺」，「田井」などの箆書土器や墨書土器をはじめとする多量の古代遺物群を包蔵する8世紀～9世紀前半代の集落（寺）址が発見され，古代を中心とする遺跡群が広く存在することが明らかにされている．また，この調査では古墳時代前期の竪穴住居址や縄文時代後期の遺物群も検出されており，複合的な遺跡の性格が明らかになりつつある．（熊本大学埋蔵文化財調査室年報3）．

遺跡一帯は白川左岸の低位の河岸段丘上（標高12～13m）に位置し，白川の蛇行にともなって，平坦な突出した岬状を呈する地形である．この白川左岸上流には奈良～平安時代の大集落址である大江遺跡群や新屋敷遺跡群などがある．

2．調査の概要

今回の調査は平成8年度4月10日に開催された埋蔵文化財委員会において発掘調査が了承された事業の一つにあたり，周辺の状況から遺構の残りが良好であると判断されたため，試掘調査を行わず，即発掘調査を実施することとした．配水管切り替え・樹木伐採に伴う立会い調査を，6月26日～7月6日まで実施し，7月28日より本調査を開始した．調査は廃土処理の都合から，東側（I区）と西側（II区）に2分割して，I区から調査を開始した．8月20日にI区の調査を終了し，廃土を移動して8月26日からII区の調査を開始した．II区の調査は9月10日をもって無事終了したが，I区において既設建物（図書館）下へ延びる溝を確認していたので，建物の取り壊し後，その下部を調査する予定であった．大学病院構内の発掘調査（9807）調査開始後間もない11月2日に建物が撤去された現地を重機によって遺構確認作業を行ったが，基礎コンクリート撤去の際かなりの深さまで破壊しており，遺構はまったく残っていなかった．このため，この日をもって調査を終了した．なお，調査委員会による現地説明会は9月14日に実施した．

〈調査面積〉

833m²（建物本体部I・II区）
139m²（III区）

〈調査期間〉

1998年6月26日～7月6日（事前立会調査）
1998年7月28日～11月2日（本調査）

〈調査員・参加者〉

小畑弘己，大坪志子．
江島賢一，岡崎光子，押方富江，緒方智子，甲斐田末男，黒木タケ子，古賀敬子，小細工洋子，坂本礼子，白石美智子，新里亮人，高橋久美子，高松北子，土田ちえみ，橋口剛，林田恵子，番山明子，福田久美子，藤江望，藤木聡，堀川貞子，松井昭子，丸山京子，水上順子，宮村邦子，森川征子，森川護，森田ミドリ．

3．調査の結果

a　基本層序

調査地の基本層序は，同構内の旧調査地点（9511）とほぼ同じである．上からI層－現代埋土層（厚さ60～80cm），II層－黒褐色土層（10YR2/3）（厚さ40cm），III層－黒褐色土層（10YR2/2）（厚さ10～20cm），IV層－黒褐色

写真1　I区全景（北西から）

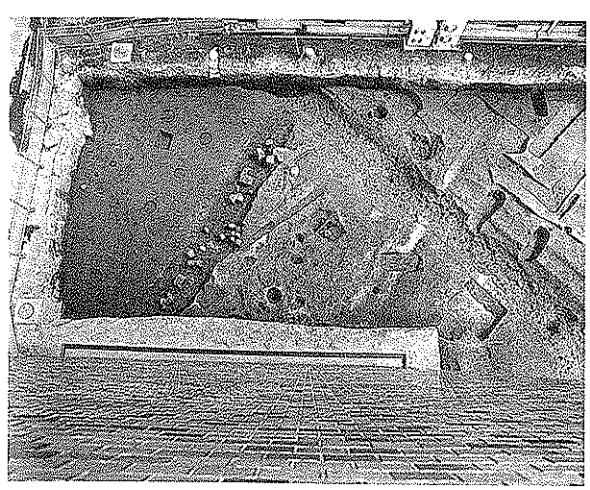
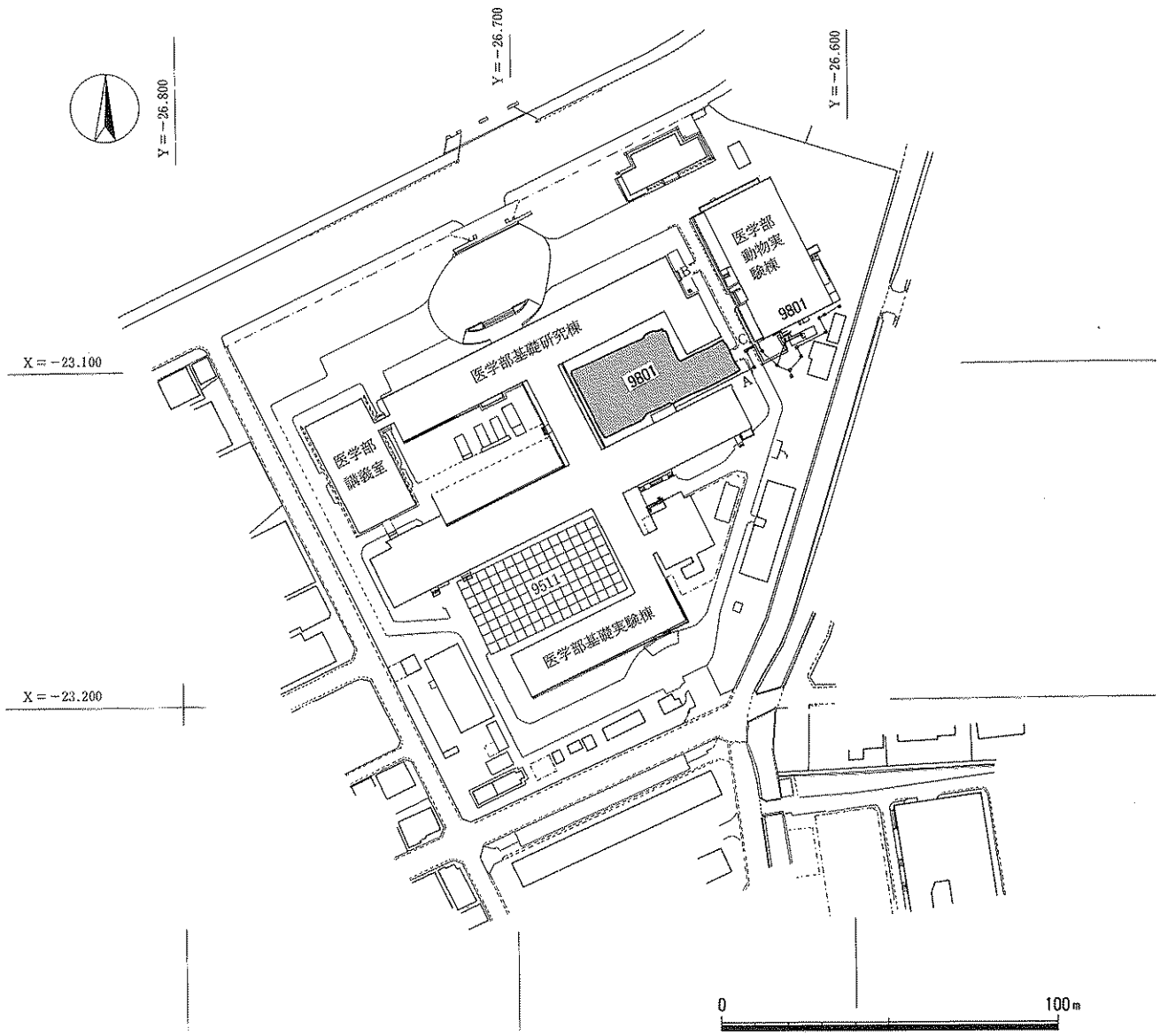


図２　本荘南地区における調査地点位置図（1/2000）



土層(10YR2/2)，Ⅴ層－黒褐色土層(7.5YR3/2)，Ⅵ層－暗褐色土層（10YR3/3）となり，その性格はⅠ・Ⅱ層が現代埋土，Ⅲ層が近世・近代耕作土，Ⅳ・Ⅴ層が古代遺物包含層，Ⅴ層下部が縄文時代遺物包含層，Ⅵ層が地山となる．

本調査地点ではⅣ層とⅤ層の間に赤黒色の薄いマンガン沈殿層(2.5YR1/2)が認められ，これまで一括していた黒褐色土層が分離された．よって，今後本層は古代の時期区分の鍵層となる可能性もある．

土色帳の表記によると，Ⅱ層～Ⅴ層まではすべて「黒褐色」という表現となるが，実感としては，Ⅲ層－「茶褐色」土層，Ⅳ・Ⅴ層－「黒褐色」土層，Ⅵ層－「黄褐色」土層であり，こちらの方が感覚に訴えやすく，通常の呼称としてはこちら方を使用している（試掘・立会時の表記）．

b　検出遺構と遺物

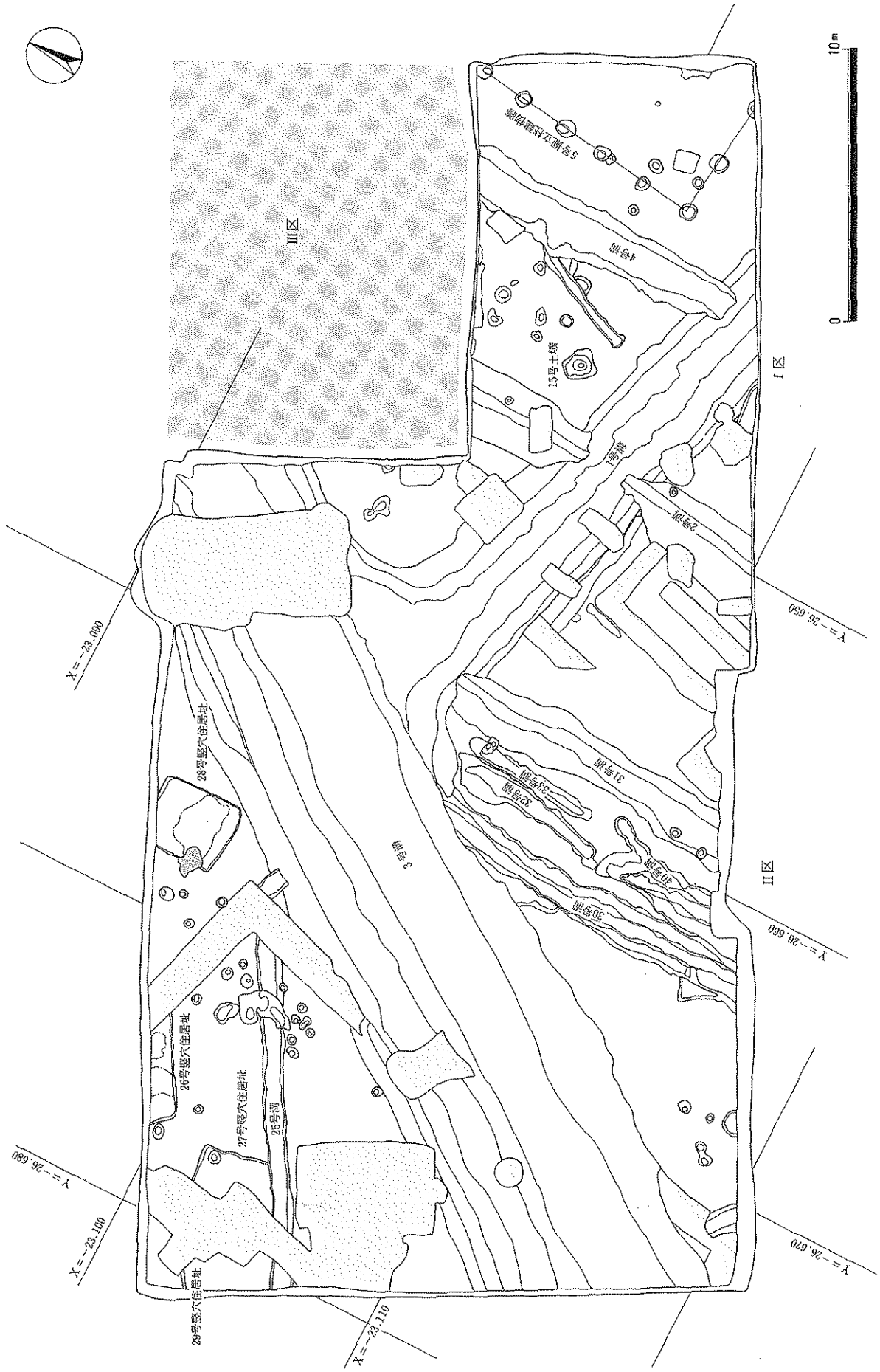
今回の調査で検出した主な遺構は，７世紀～９世紀前半の溝８条，竪穴住居址３基，掘立柱建物１棟，，土壙１基などである．この他，近世の濠２条がある．

〈溝〉

３号溝

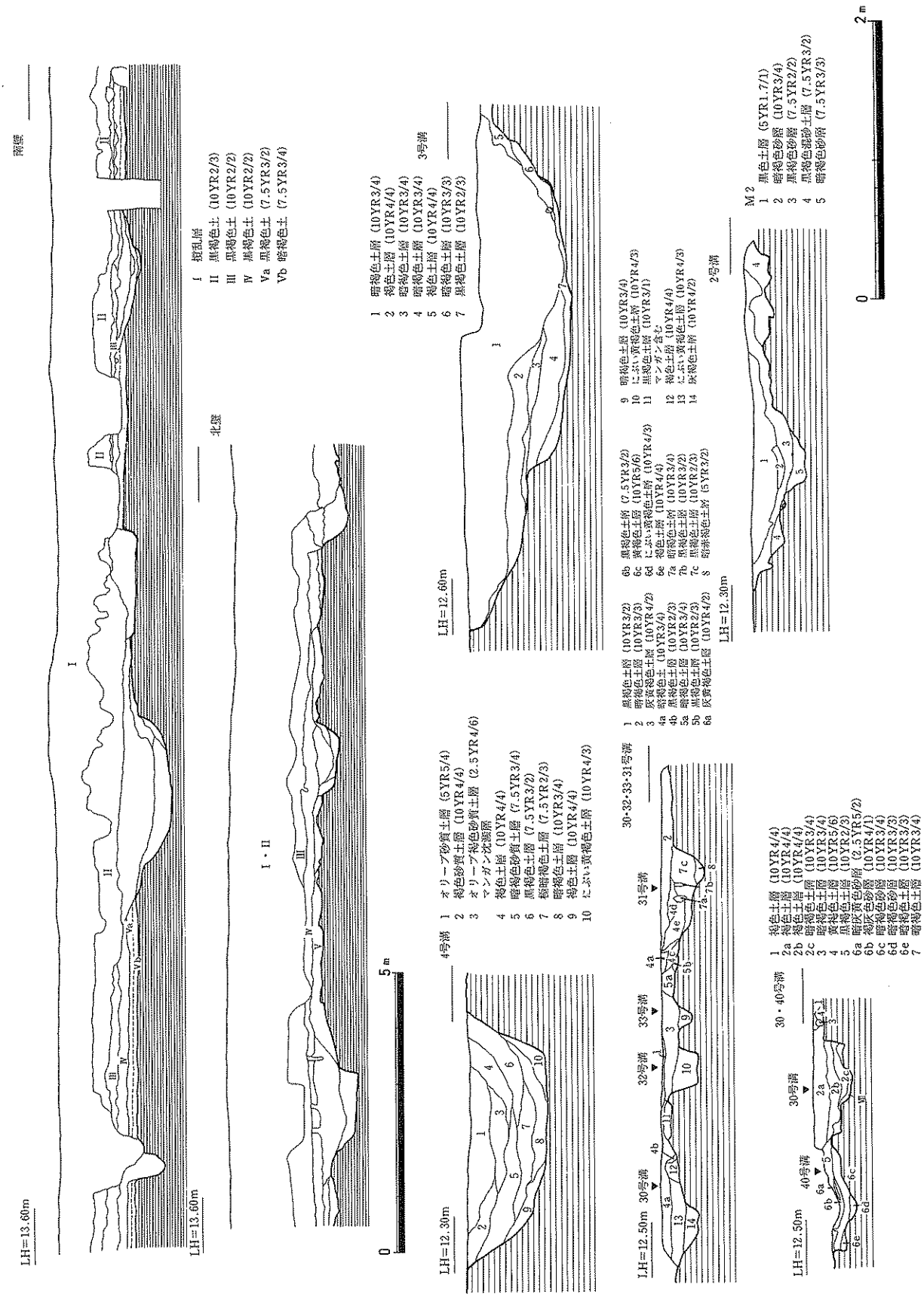
調査区を斜めに貫く，幅７ｍあまりの濠状の遺構であり，調査区の中央を北東から南西に斜めに走っている．東から延びる１号溝がこれに合流する．時期は本調査区検出遺構の中でも最も時期的に新しい19世紀後半以降のものと考えられる．溝の方向はＮ－35°－Ｅで，水は南へ流下していたと考えられる．溝の断面形は逆台形を呈し，

図３　9801調査地点遺構配置実測図（1/200）



II－１　９８０１調査地点

図4　調査区壁・各遺構土層断面実測図（1/100・1/40）



II－1　9801調査地点

幅８ｍ，底辺幅４ｍ，深さ1.6mほどである．土層の堆積状況から一度に埋められた可能性もある．溝底からは部位や形状が不明な脆弱な骨の集積が２ヶ所ほど認められた．

１号溝

３号溝と合流するE－25°－Sの溝である．検出面からの深さは１ｍ，幅は４ｍで，断面形はほぼ逆台形である．３号溝と同時期と考えられる．

30～33・40号溝

調査区のほぼ中央部を南北方向に走る一連の溝群である．30号溝と31号溝は幅や深さともに明確な溝状を呈するが，他の溝は不整形で形状が一定しない．堆積層は砂層やマンガンの沈着した堅い層が互層となっており，水の影響を強く受けたことがわかる．出土遺物としては，８世紀後半～９世紀の須恵器・土師器の蓋・坏類（図６－４～12）の他に，布目瓦（同13・15），鞴羽口（同16），転用硯（同７），二段透かしの円面硯と思われる須恵器片（同14）がある．この二段透かしの硯は，小片３点からなり，上下の破片の接点もないため全体形が正確に復元できない．他に類例がないため硯の確証はない．

２号溝

Ｉ区で検出した南北方向の溝である．幅2.5m，深さ0.4mで，中央部分にさらに幅40cm，深さ20cmの溝が付く２段掘りの構造をとる．この面は水によるマンガン沈殿層で覆われ，非常に堅い．この層の下にさらに皿状の掘り込みがあり，これが頭初の溝の形状と思われ，マンガンの層を基準に上下２枚の層に区分した．この下層から図６－３の青銅製銙具の蛇尾が出土した．裏面に２個の鋲孔がある．長さ2.63cm，幅2.52cm，厚さ0.71cm，重さ14ｇである．

上層の遺物には８世紀後半代まで下る遺物が含まれるが，下層は７世紀後半～８世紀初頭の遺物を含み，設営時期はここまで遡るものと考えられる．よって蛇尾もこの時期に属する資料である．

４号溝

同じく１区で検出した幅1.8m，深さ0.6mの断面形が

写真２　Ｉ区全景（東から）

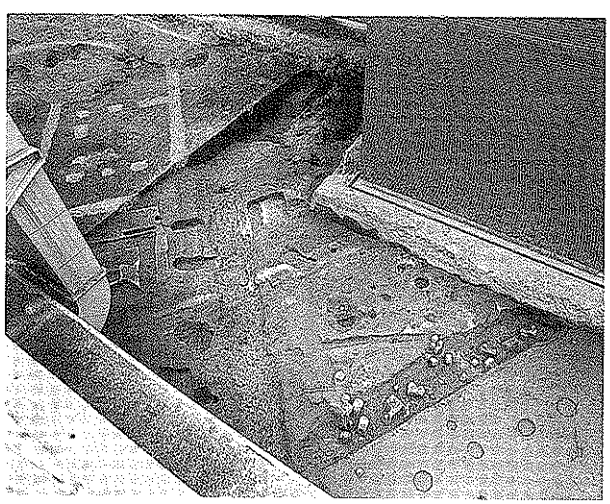


写真３　II区全景（北東から）

写真４　４号溝遺物出土状況（南から）

写真５　25号溝および27号竪穴住居址（北西から）

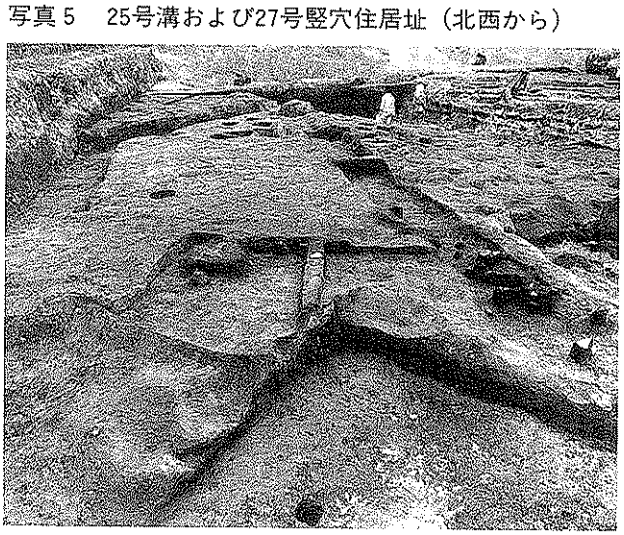
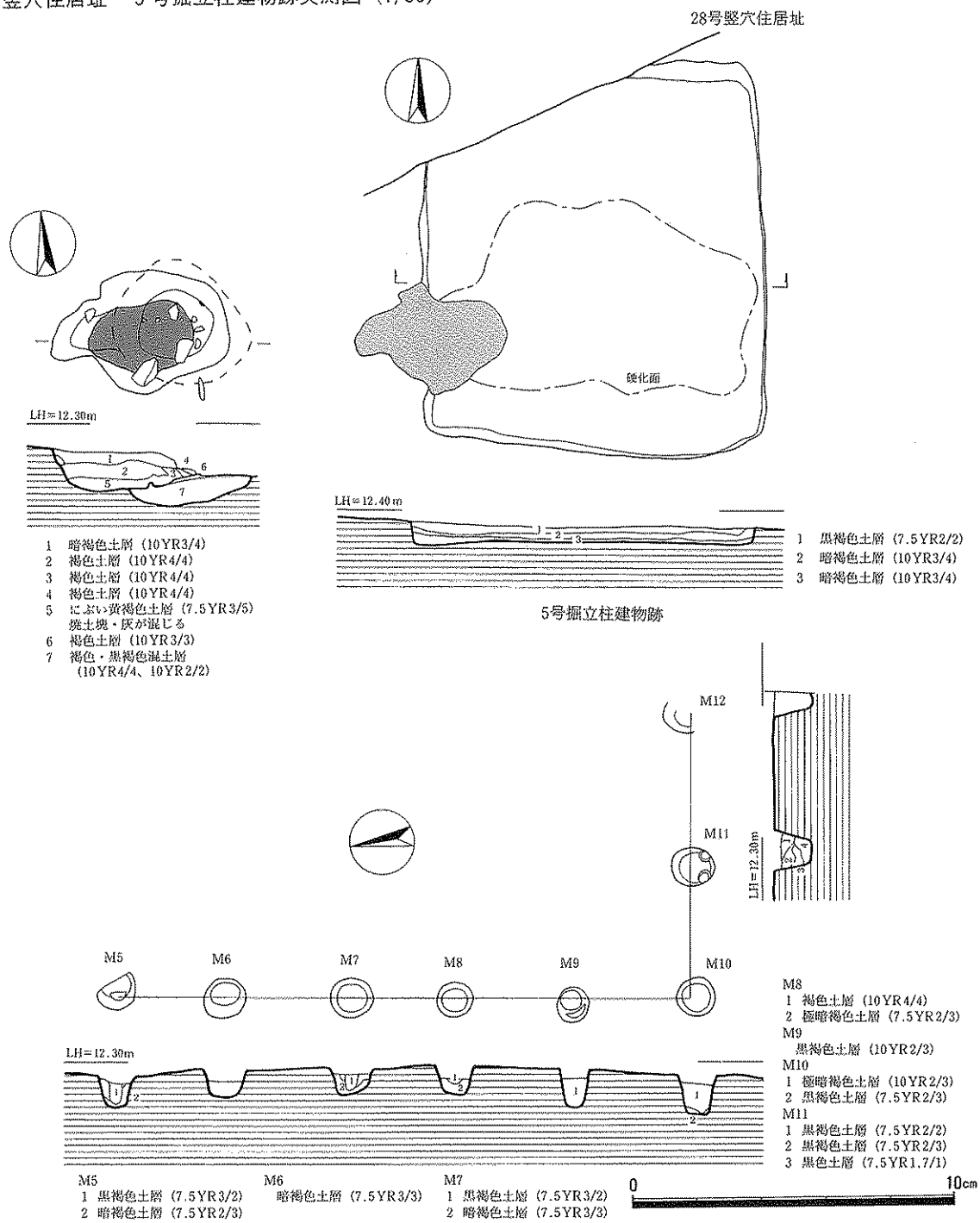


図５　28号竪穴住居址・５号掘立柱建物跡実測図（1/50）



逆台形の南北方向の溝である．溝中および基底にマンガン沈殿層が存在し，層中に３枚ほど確認できたが，遺物は５層下部のマンガン沈殿層を基準に上下層に分けている．その遺物構成は，上層に８世紀後半までのものを含むが，下層には７世紀代の遺物を含むなど（図６－18～22），２号溝とよく似ている．よって，溝の設営時期は２号溝とほぼ同じ時期と思われる．

なお，この溝は２号溝と平行するため道路の側溝とも考えたられる．しかし，両者の形状が異なることやこの溝に流れ込む細い溝が道路面にあたる部分から検出されたため，今のところその可能性は保留しておきたい．

25号溝

II区北西部で検出した幅70cm，深さ10～20cmの浅い溝である．方向は他の溝と異なり調査区に平行するN－55°－Eである．遺物は須恵器・土師器片（図６－１・２）であり，６世紀末～７世紀初の遺構と考えられる．

〈竪穴住居址〉

28号竪穴住居址（図５）

II調査区北端で検出した竪穴住居である．竈を西壁にもち，縦2.5m，幅３ｍを測る．南寄りに硬化した床面が

図6　9801調査地点出土遺物実測図Ⅰ（2/3）

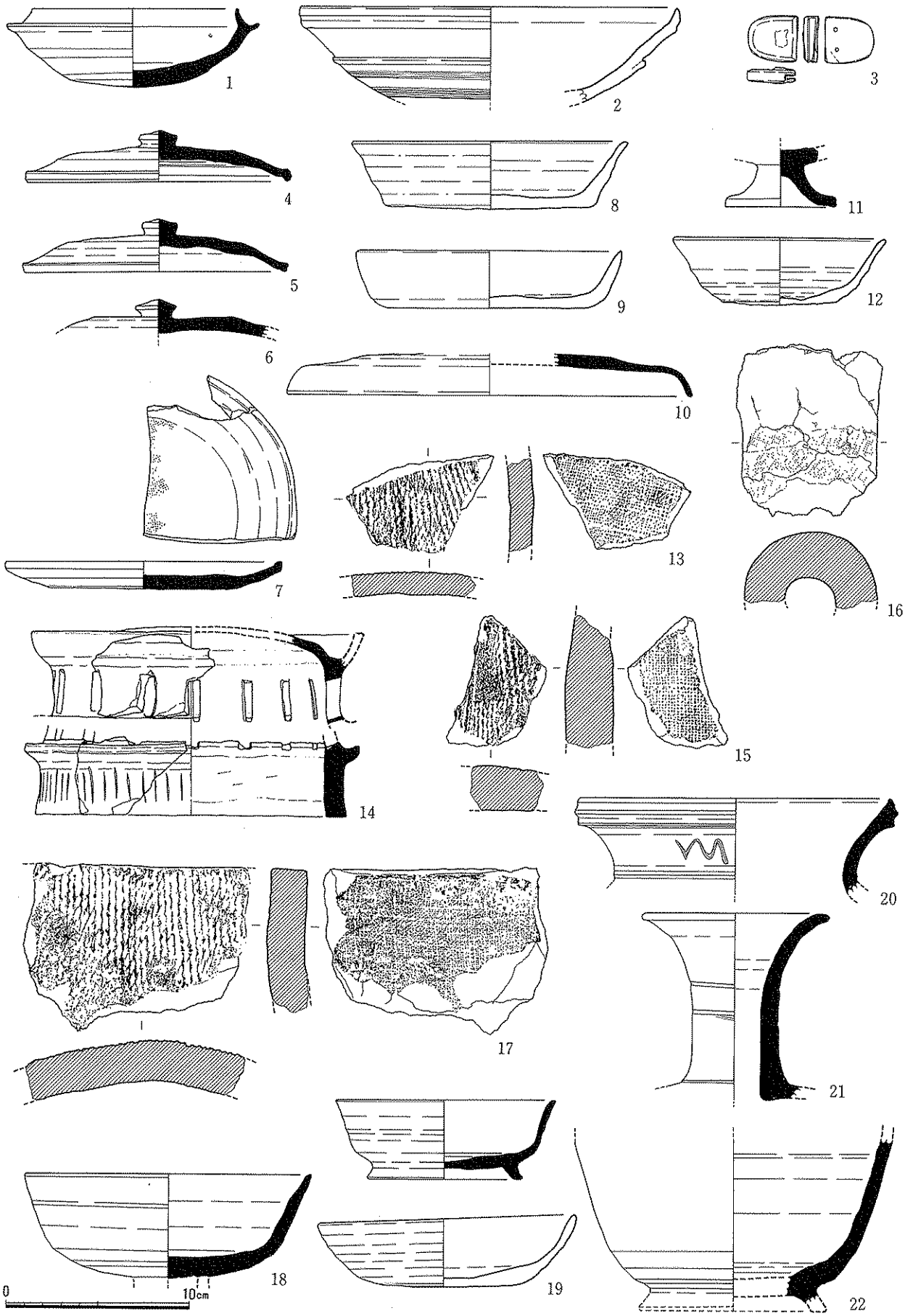
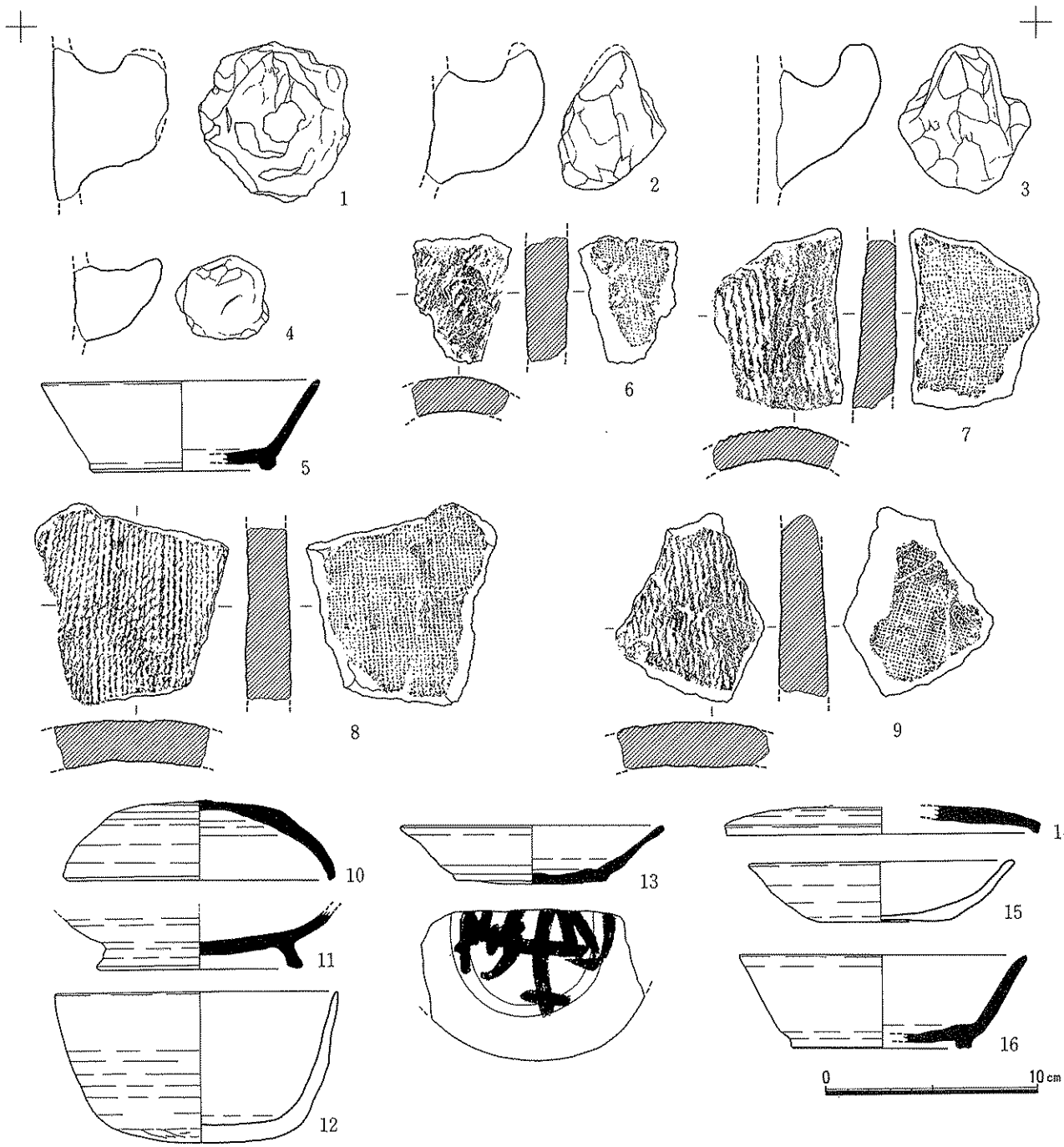


図７　9801調査地点出土遺物実測図２（2/3）



確認できた．柱穴は床内には検出できなかった．竈はすでに破壊されており，砂岩ブロックや土器片，粘土が散在していた．焚口の焼けた面が30×50cmの範囲に残っていた．竈設営のための掘り穴が竈前面に直径70cm，深さ20cmで設けられている．竈からは土師器の甕形土器の破片が出土した．

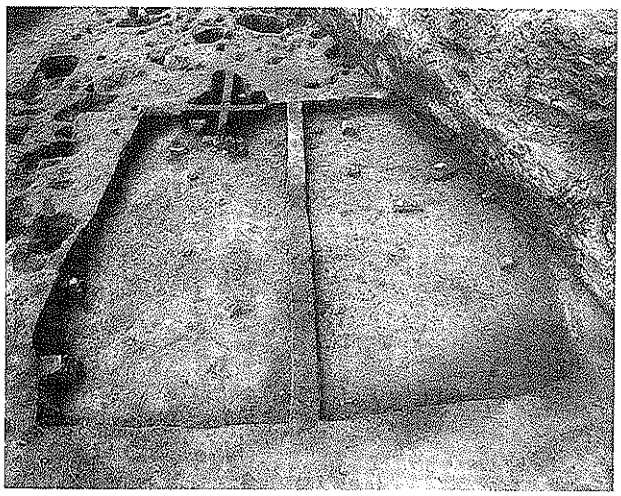
26号竪穴住居址

調査区北壁に接して検出したもので，大半は調査区外へ延びる．検出面から深さ30cmほど残っており，硬化した床面を確認した．１辺は５ｍほどである．出土遺物は土師器坏（図７－12）と甕形土器の胴部の砕片がある．坏は底部篦削りで厚みのあるものである．時期の詳細はこれだけでは不明である．しかし，設営方向が25号溝と平行することから，25号溝と同じ時期の可能性がある．

27・29号竪穴住居址

調査区北西部で検出した方形の浅い遺構である．形状から竪穴住居としたが，その性格は明確でない．25号溝との切り合い関係も明らかではなかった．

写真６　28号竪穴住居址（東から）



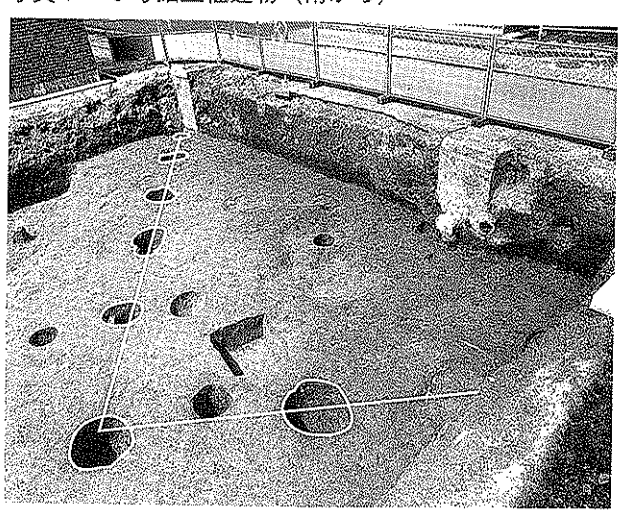
〈掘立柱建物址〉

５号掘立柱建物址（図５）

Ⅰ区東端で確認した桁行５間，梁行２（以上）間の掘立柱建物である．柱間は90cmほどである．柱穴は直径20～30cm，検出面からの深さ30cmほどのものである．方位は他の古代遺構と平行する南北方向である．約半分が調査区外に延びるため全体の規模は不明である．

出土遺物は小片が多く，時期を決定しがたいが，方位などからみて８世紀後半以降のものであろう．

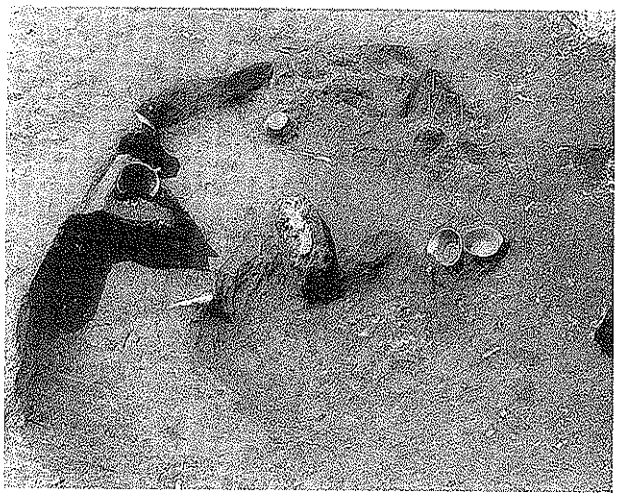
写真７　５号掘立柱建物（南から）



15号土壙（図８）

Ⅰ区の２号溝と４号溝に挟まれた部分で検出した隅丸台形の土壙である．覆土は暗褐色土である．中央部に角礫９個があり，その下部より鉄鎌（図８－１）が出土した．礫には砂岩も含まれている．その下は一段深い直径70cm余りの穴となり，土師器坏が土壙の周縁から４個，穴の底に近い部分から１個出土した．北東隅に灰や骨混じりの層が堆積しており，掘り下げると一段深い穴を成していた．石や砂岩も焼けており，火葬墓とも考えられるが，副葬品としての土器がすべて欠損品であることから，ここではその可能性は保留しておく．

写真８　15号土壙（南東から）



鉄鎌は長さ14cm，幅3.4cm，厚さ3.4mmの完形品である．土師器坏は高台付坏（同６・７）と坏（同２～５）からなり，５の小片を除き，すべて煤が付着しており，灯明皿として使用された可能性が高い．５は無高台坏の口縁部破片と思われるが，外面に墨で「五（丑）」の字が書かれている．

出土遺物から９世紀後半期の遺構と考えられる．

この他少量ではあるが，縄文時代後期の土器片と黒曜石製石鏃，石片などが出土している．

４．成果と問題点

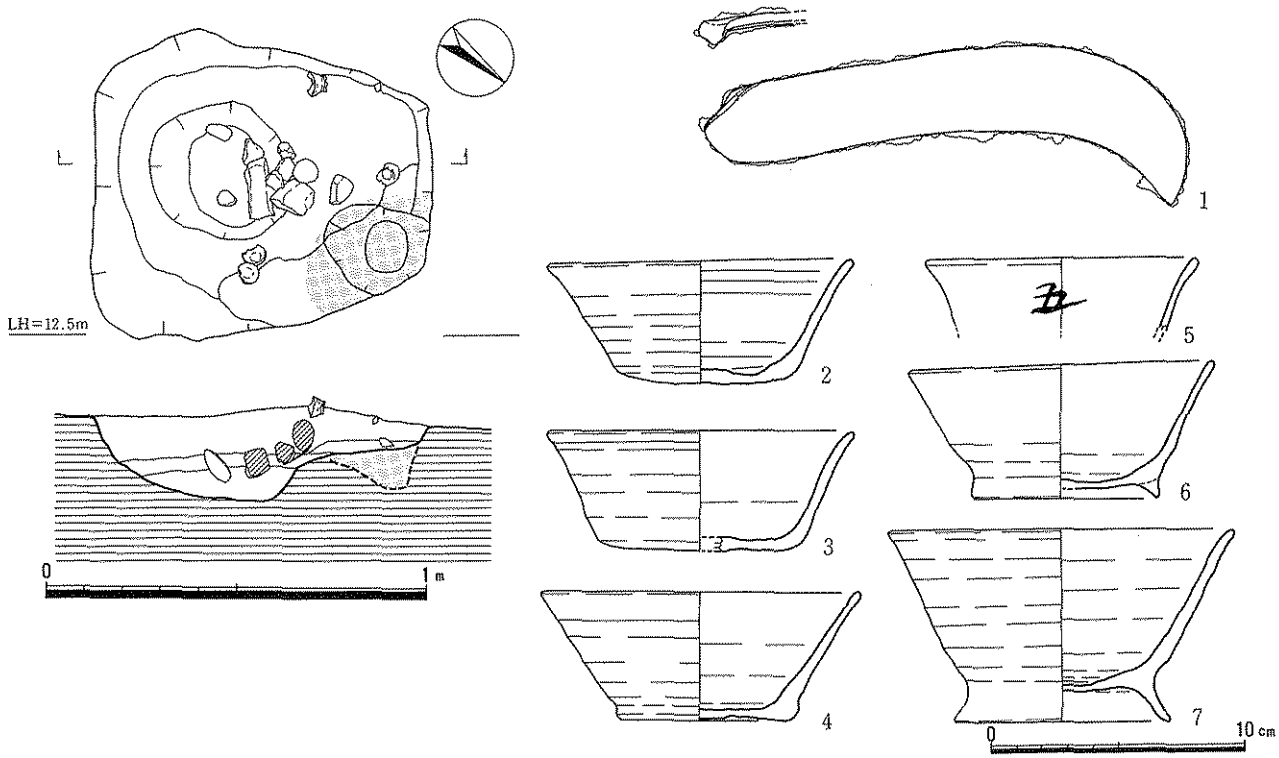
今回の調査は，溝を中心とした遺構を検出したが，それら遺構群に３つの方向性が確認できた．

まず，７世紀代初の溝と考えられる小溝（25号溝）や26号竪穴住居址は，それ以降の時期のより東にふれた方位を示しており，７世紀後半期～９世紀前半の遺構がほぼ南北方向を基軸として設営されているのと対照的である．

南北方向（条里方向）を基軸とした古代の遺構で最も古いものは２号・４号溝であろう．設営時期は７世紀後半まで遡るものと思われる．この両者の性格は道路側溝の可能性もあるが，今後の整理によってさらに検討を加えたい．

次の８世紀後半代～９世紀初には30・31号溝，それに挟まれた不整形の32・33・40号溝が属する．また，５号掘立柱建物および28号竪穴住居址がこれに属する可能性がある．30～33号溝の溝内および周囲から土器片とともに硯片，平瓦片，鞴羽口片が出土しており，工房址および瓦葺建物の存在が予想される．

図８　15号土壙および出土遺物実測図（1/40・2/3）



３つめの方向性は，１号溝および３号溝に代表されるように，近世以降，濠がやや方位を東に振って掘られている．

このような遺構にみられる方向性は大きな時期的まとまりと把握でき，今後，周辺遺跡の調査の際，遺構の時期把握に有効であろうと思われる．

また，２号溝下層から発見された青銅製蛇尾は，希少なこの時期の帯金具例を新たに追加することとなり，成果の一つとして挙げられよう．

ただし，問題点としては，この２号・４号溝が条里のほぼ坪境に相当し，道路であれば坪境の道路として把握できるか否かが今後の検討課題として残ることである．

また，調査区東端で検出した５号掘立柱建物の発見は，それまで現在の川（クリーク）の状況から判断して，集落（生活遺構群）はあまり東に広がらないとの予想を覆すこととなった．これによって遺構の広がりはさらに東へ延びることが明らかになり，また，掘立柱建物のみで構成される区域が存在する可能性もあることから，今後の周辺の調査は注意を要する．

また，この一帯は遺構中に水成作用によるマンガン沈殿層が認められ，２号・４号溝のように時期区分の鍵になるものも存在する．今後はその成因および時期について地質学的に検討を重ねなければならない．

II－2　９８０２調査地点

１．遺跡の立地と周辺の遺跡

本学の法学部・文学部・教育学部・大学教育センター（旧教養部）・工学部・理学部の所在する黒髪地区は，周知の黒髪町遺跡群（熊本市遺跡地図№８－88）内にある．遺跡は熊本平野北西部に聳える立田山（標高151.6m）の南山麓部，白川右岸に展開する河岸低位段丘（標高18～25m）上に位置する．熊本平野南部は，阿蘇南郷谷に水源をもつ白川の運搬した土砂が扇状地形に堆積した砂礫層を基盤としており，本遺跡は位置的にその扇状地の要の部分に相当する．

周辺遺跡としては，背後の立田山裾に小峰遺跡，黒髪町下立田遺跡群，カブト山遺跡，龍田陳内遺跡などが，白川を挟んだ対岸に，渡鹿貝塚・北原甕棺遺跡を擁する渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡，大江遺跡群などがある（図１）．本遺跡の遺物・遺構は古代が主体であるが，今回の調査区では縄文時代・弥生時代の遺物が主であった．特に縄文時代の遺物が多く，早期の押型文土器をはじめ後晩期の土器があり，カブト山遺跡・龍田陳内遺跡で同様の遺物が出土している．

２．調査の概要

本調査は年度内の計画には含まれない調査であった．６月に施設部から相談を受け，両者協議の結果９月上旬に調査を開始することになった．黒髪北地区の環境整備事業として生協・学生会館周囲の文化系サークル部室の新設移転，構内道路敷設替え，樹木の移植・植樹，及び排水管敷設工事，電気設備工事が計画され，まず文化系サークル部室建設予定地の調査を行い，旧建物を解体・撤去の後に排水管敷設・電気設備・樹木の移・植樹に伴う立会を行った．調査は当初９月上旬に開始する予定であったが，調査区内及び周囲にあって調査の支障となる樹木の移転作業が遅れたため，同月22日より１次掘削を開始し，25日から調査を行った．これまでの調査結果では古代の遺物包含層及びその下の暗褐色土の下が遺構検出面（地山）であったが，本調査区では地表下約１mで古代の遺物包含層に達し，この下に２層を挟んで，地表下1.2m・1.4mでそれぞれ弥生・縄文時代の遺物包含層を検出した．

写真９　西区北壁（南東から）

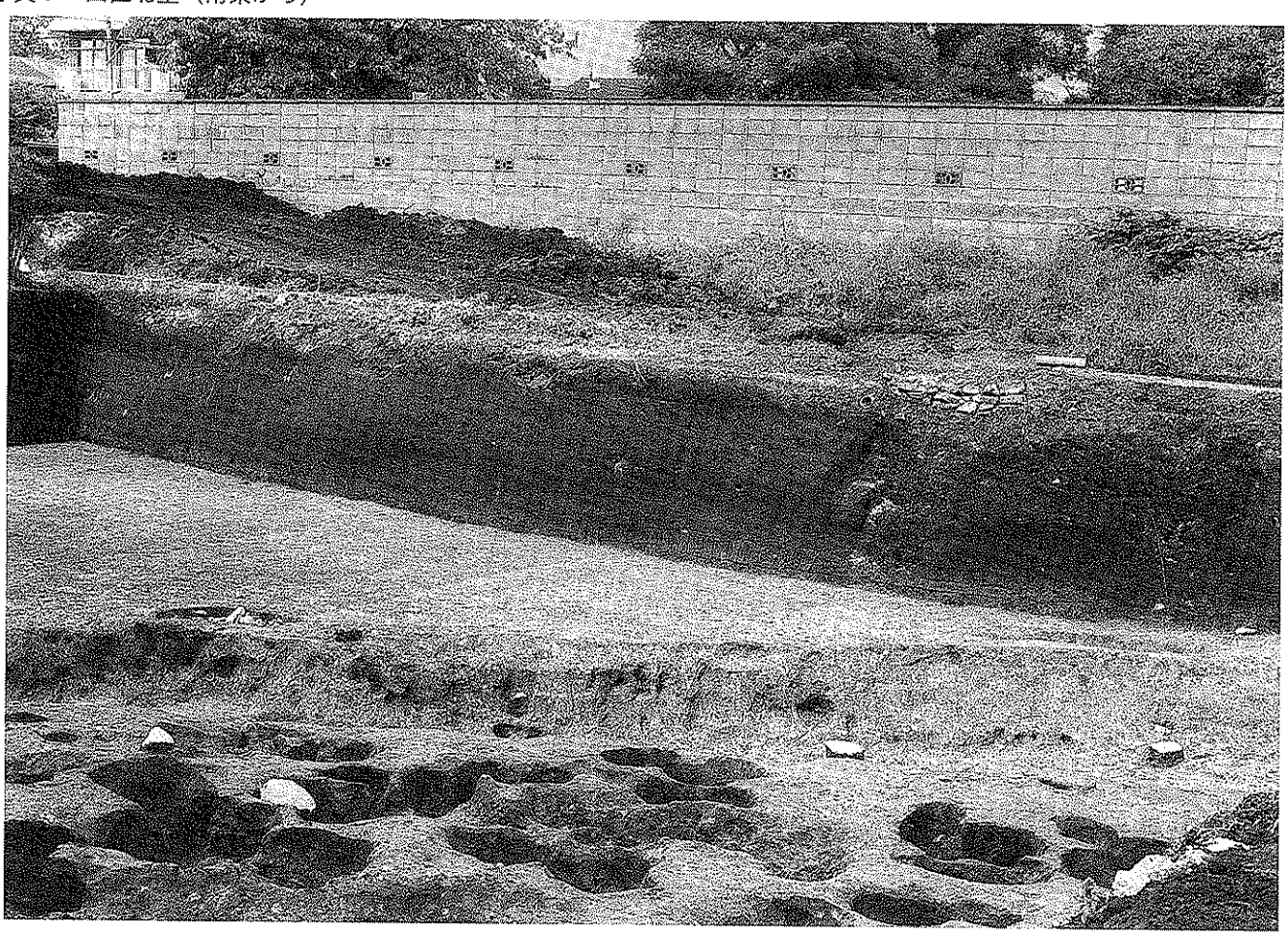
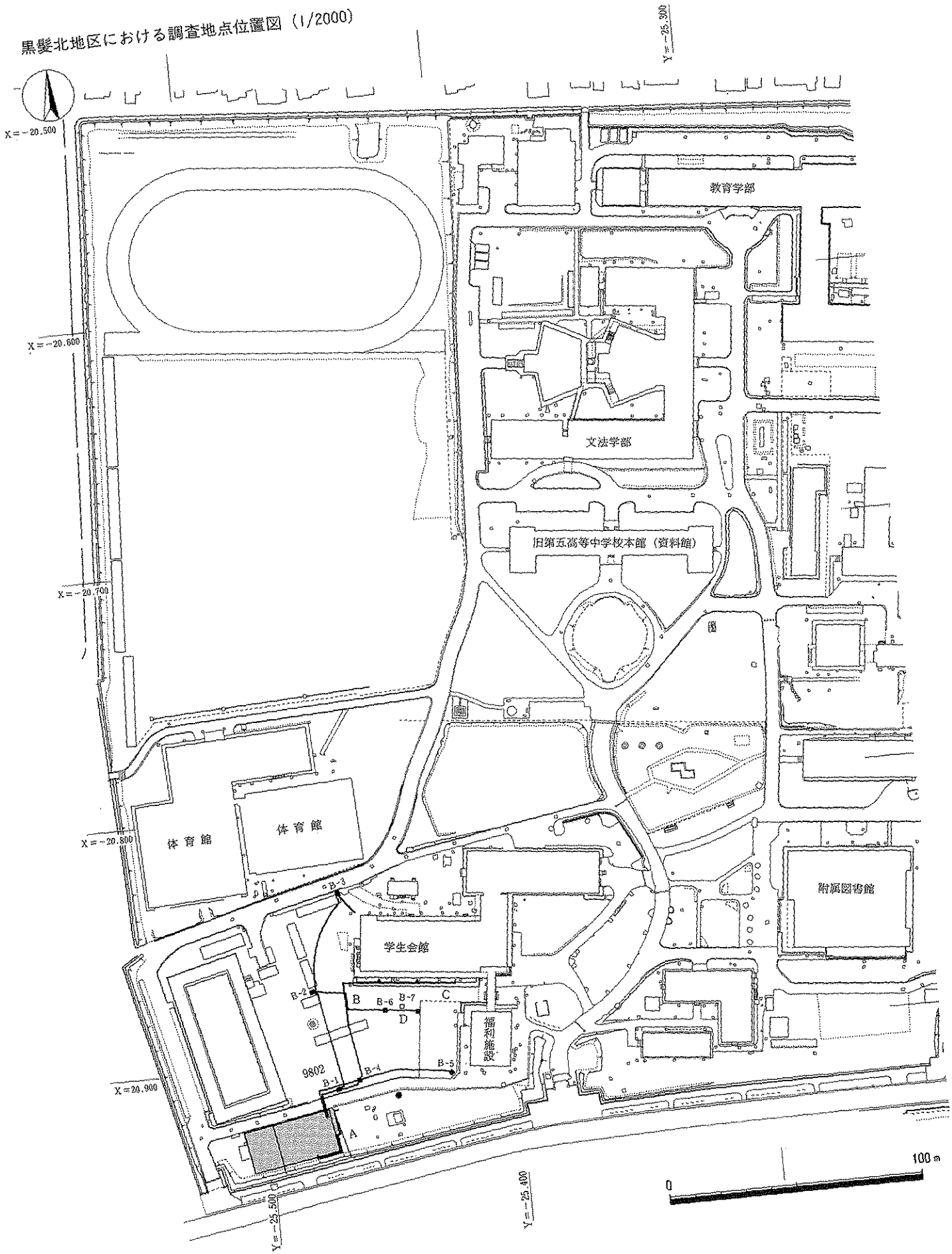


図９　黒髪北地区における調査地点位置図（1/2000）



II－２　９８０２調査地点

図10　9802調査地点遺構配置実測図（1/200）

調査は排土処理の都合上調査区を東西半分に分け，西側から開始した．検出された遺構は近世以降の溝が大小合わせて７条と集石のある土壙およびピット群である．溝は大きいもの３条が調査区を斜め（北東－南西）に横切るように走っており，最大の１号溝を境に調査区の北側と南側で包含層・基盤層の土質が異なり，遺構・遺物の分布状況にも偏りが見られた．１号溝以北は弥生・縄文時代の遺物包含層が良好な状態で遺存しており，土器や石器がある程度のまとまりをもって出土した．遺構は土壙のみである．南側は細く浅い溝が3条と無数のピットが検出された．南側の台地の方が若干高くなっており，弥生・縄文時代の包含層は残っておらず，埋土の直下が遺構検出面である．遺構検出面の土はにぶい黄褐色のシルト質土層である．一部で硬い基盤層が露出していたため，全ての遺構の調査が終了した時点でこのシルト質土層を除くことにした．このシルト質土層中より多くの押型文土器が出土したのは予想外であった．地形上，東側半分はこの押型文土器を含むシルト質土層が調査範囲の大方を占めることが予想されたが，果たして東側は近年までの建造物の影響も少なくこの押型文土器を含む層が広い範囲で確認された．遺構は少なかったものの，多くのピットの実測と予想外の包含層の判明で当初の予定より進行状況は遅れをとり，室長には祝日を返上して測量のご協力をいただいた．調査期間を延長し，11月６日に現地説明会を実施し，この日をもって調査を終了した．

〈調査面積〉

575m²

〈調査期間〉

1998年９月25日～1998年11月６日

〈調査者・参加者〉

大坪志子．

岡崎光子，岡田イツ代，押方富江，甲斐田末男，黒木タケ子，古賀敬子，小細工洋子，坂本礼子，白石美智子，新里亮人，橋口剛士，番山明子，藤原由博，堀川貞子，松井昭子，水上順子，森川征子，森川護，森田ミドリ．

またこの他に藤本圭司，江島賢一，河合章行，熊本茂仁，冨永明子，峯崎麻帆（熊本大学考古学研究室）氏らの協力を得た．

３．調査の結果

a　基本層序

今回の調査地点は，白川右岸の標高18mの地点にあたる．近年まであった黒髪３号宿舎の跡地である．宿舎建物の基礎や，それ以前のものと思われる建物基礎，井戸，排水用浄化桝などがあったが，それほど遺構面の破壊はなかった．

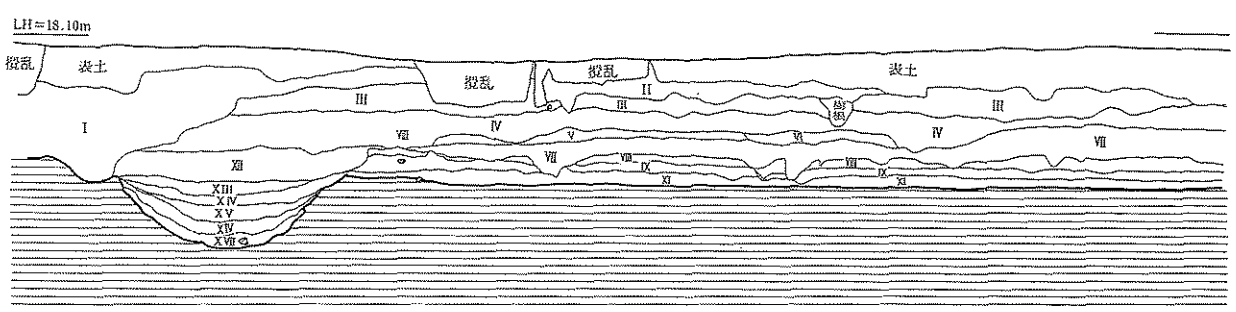
今回の調査では，黒髪の南地区とは異なり縄文時代・弥生時代の遺物包含層が古代の遺物包含層と分離して確認された．古代の遺物包含層（Ⅴ層，厚さ10cm）は地表下約１mで確認された．西壁及び北壁の観察から第Ⅴ・Ⅶ層上面のⅣ層までは造成による客土であろう．Ⅶ層（厚さ20cm）は混入物のないきれいな土であるが遺物は観察されなかった．Ⅸ層（厚さ10cm）及び第Ⅺ層（厚さ10cm）が弥生時代・縄文時代の遺物包含層である．いずれの層も非常に粘性の高い粘土質土層である．Ⅸ層上のⅧ層は色調の違いで分層したが粘性があり，Ⅶ層が下のⅨ層の影響を受けたものと思われる．

調査区は，北東－南西に走る大溝によって北側台地と南側台地に分けられ，南側台地が若干高くなっている．また，溝の方向にそって全体的に西側に傾斜しており，東西端での比高差は１mに達する．縄文時代・弥生時代の粘土質の包含層は北側台地でのみ観察された．南側台地で古代の遺物包含層はほとんど確認されなかったが調査区東側の北壁とその付近で観察でき，ここでは地山の直上であった．本遺跡ではにぶい黄褐色の

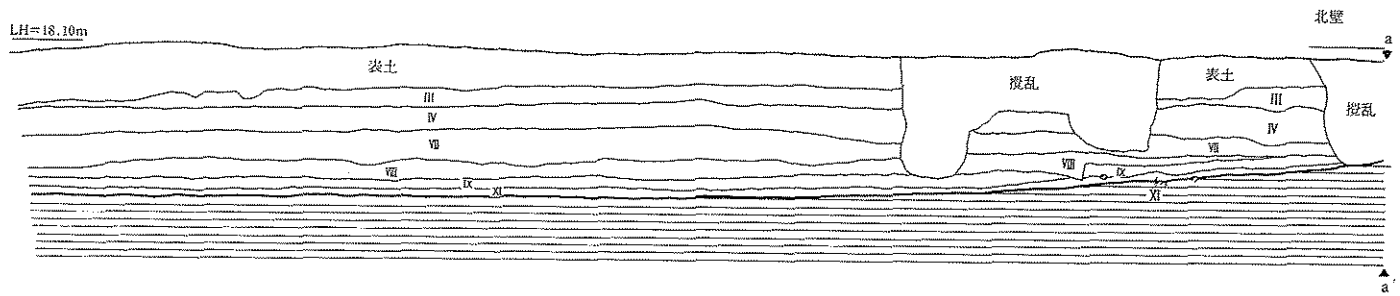
写真10　西区全景（東から）

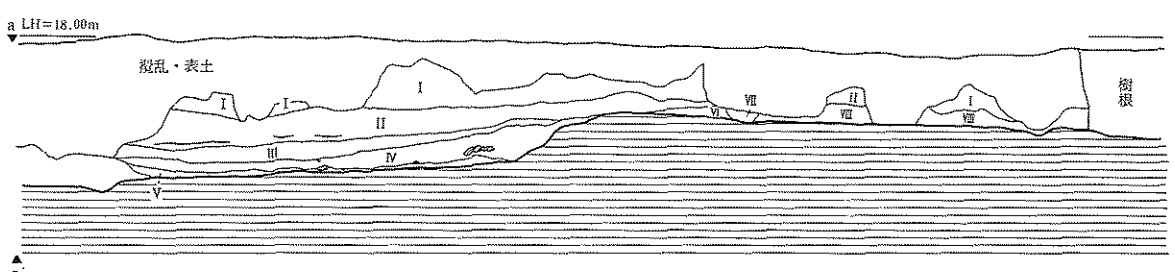
写真11　東区全景（西から）

図11　9802調査区壁土層断面実測図（1/100）



表土　黒褐色土層（10YR2/3）
I　黒褐色土層（10YR2/2）
II　黒褐色土層（10YR2/3）
III　黒褐色土層（10YR2/3）
IV　黒褐色土層（10YR2/3）
V　黒褐色土層（10YR2/2）
VI　黒褐色土層（10YR2/2）
VII　黒褐色土層（10YR2/2）
VIII　黒褐色土層（7.5YR2/2）
IX　黒色粘土質土層（7.5YR2/1）
X　黒褐色粘土質土層（7.5YR2/2）
XI　褐色粘土質土層（7.5YR4/4）
XII　黒褐色層（10YR2/2）
XIII　黒褐色層（10YR2/2）
XIV　黒褐色層（10YR2/2）
XV　黒褐色層（10YR2/2）
XVI　黒褐色層（10YR2/2）
XVII　黒褐色層（7.5YR2/2）
地山　明褐色土（7.5YR5/6）





表土　黒褐色土層（10YR2/2）
I　黒褐色土層（10YR2/3）
II　黒褐色土層（10YR2/3）
III　黒褐色土層（10YR2/3）
IV　黒褐色土層（10YR2/2）
V　黒褐色土層（10YR2/3）
VI　暗褐色土層（10YR3/4）
VII　黒褐色土層（10YR2/3・2/2）
VIII　黒褐色土層（10YR2/3）

0　5m

II－2　9802調査地点

シルト質層を地山層と認識している．今回この層が南側台地に広がっていたが，一部で硬い基盤が露出していたためシルト質層を掘り下げてみることにした．その結果押型文土器を含む良好な縄文時代早期の遺物包含層であることが判明した．

以上のことから南側台地では押型文土器を含むシルト質層上に黒褐色の縄文・弥生時代の遺物包含層を挟まずに古代の包含層があることがわかった．

大溝を境に北側台地の地山層・包含層は非常に粘性の高い粘土質土層であるのに対し，南側台地では地山層・包含層はともに粘性のない土である．遺構の分布状況からみても全く様相が異なっており，北側は縄文・弥生時代の頃から一段低い湿地のような場所ではなかったかと考えられる．

b　検出遺構

本調査区においては縄文時代および弥生時代の明確な遺構は検出されなかった．多くのピットは検出されたが，建物等の構造物を成す様子はない．近世以降のものと思われる溝が７条検出された以外に住居等の検出はなかった．

〈縄文時代の遺構〉

ピットのなかで，ある程度まとまった遺物が出土したのがM113である（図12）．M113は南側台地のシルト質層（押型文土器包含層）に掘りこまれている．上面が削られた影響もあり，土器片がかなり散乱した状態であったがそれぞれ浅鉢と鉢とみられる．ピット群が分布する南側台地は遺物の出土がほとんど無いことを考慮すると，状況からM113に伴うものと思われる．

〈土壙〉（図12）

北側台地で２基の土壙が検出された．4.7mほど離れて溝に沿うようになっていた．

181号土壙は長さ約1.2m，幅0.6mの楕円形である（図12）．検出面からの深さは20cmであるが，本来はかなり深かったものと思われる．土壙内には大小の丸い河原石や角礫がつまっていた．

182号土壙も楕円形で，長さ約1.75m，幅約0.8mである．182号土壙は土壙内に集石はなかった．

181号土壙のような土壙に石をつめる形態は近世墓に例があり，両者とも墓壙の可能性も考えられるが人骨等の出土はなった．出土遺物は182号土壙から後世の流れ込みによる弥生時代の甕の口縁と土師器の口縁の破片が1点ずつ出土したのみである．

〈溝〉

１号溝

検出された溝の中で最も大きく，幅約２m，深さは最も深い部分で１mである．調査区を北東－南西に貫く．溝の方向はE－50°－Nで西に向かって傾斜している．東半分は60～70cm程度の深さで断面は浅い逆台形を呈する．溝の中間あたりで急な勾配で深くなり，西半分の断面はU字形を呈する．遺物は近世・近代の土器片・石器の他，後世の流れ込みと思われる縄文土器・弥生土器が出土した．

２・３・６号溝（図12）

１号溝に付随するように並行に走る溝群である．２・３号溝は途中で境が消えてしまうが，切り合い関係は不明である．両者とも，ほぼ中央地点で集石が見られた．黒曜石の剥片と鉄製品，炭化物がわずかに出土した他には遺物はなかった．

４・５・７号溝

４・５・７号溝は調査区をほぼ南北に走っている．現状で幅は0.4～１m，深さは20cm～40cmである．

これら７条の溝の前後関係を確認できたものはほとんどないが，５号溝が第２・３号溝を切っていることが確認できた．南北に走る溝がほぼ同時期とすれば，北東－南西に走る溝より南北に軸をとるものが新しいであろう．

写真12　181号土壙（西から）

写真13　３号溝（西区）（西から）

図12　9802調査地点検出遺構および出土遺物実測図（1/20・1/40・1/3）

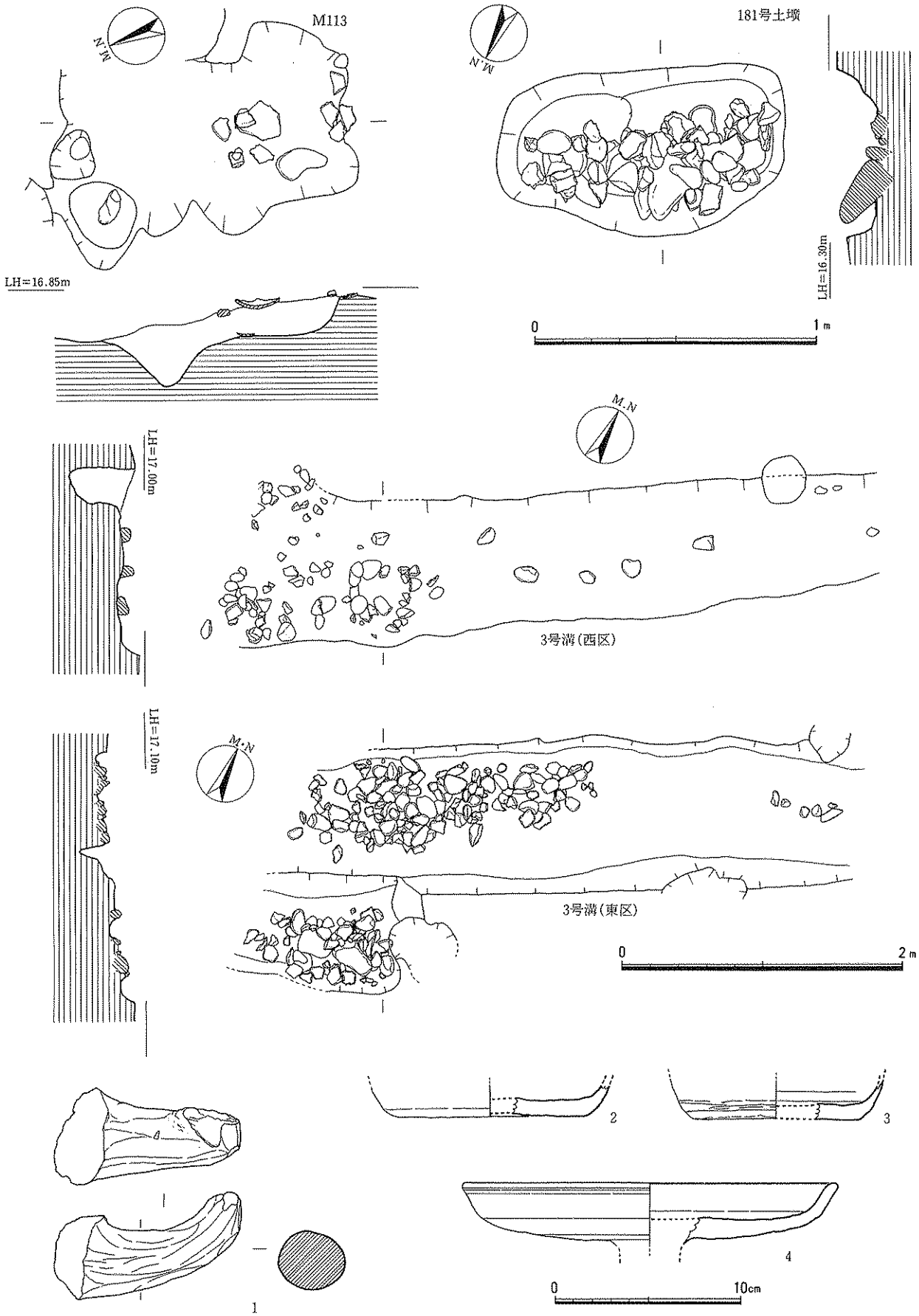
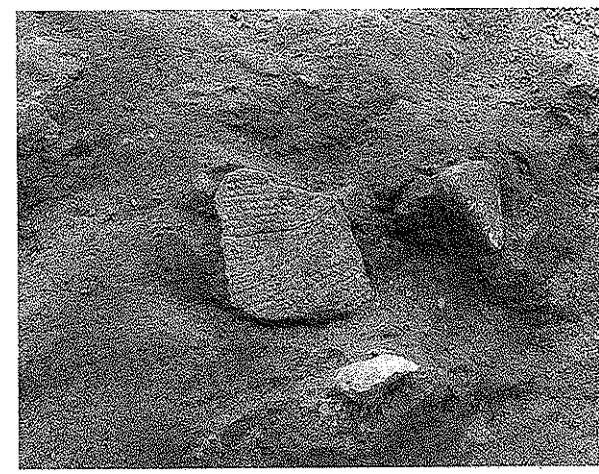


写真14　5号溝（南から）

写真16　押型文土器出土状況（北から）



c　出土遺物

〈縄文土器〉

出土遺物は約150点であるが，今回の調査で最も多かったのが縄文土器であり，押型文土器がその主体を占めた．おおよそのパターンを図13に示した．

1～8は口縁部である．外器面は山形文，楕円文があり，内器面は口縁部に原体条痕を施しその下に条痕文や山形文を施文している．9～25は胴部片で，楕円文，菱形文，山形文があり，それらはさらに細分される．25～27は鉢形土器の底部である．28・29および図14－1は条痕文を施している．

2は後期の市来式に似る．3は口縁部である．口縁形の類似例は四箇遺跡（福岡）にあり，文様のモチーフも若干似る．ただし胎土が他の縄文土器とは異なり，他地域からの搬入品の可能性もある．4は御領式浅鉢の口縁である．5～8は晩期前半（7は御領式，5・8は天城式か）の鉢の胴部，9～12は同じく晩期の底部と思われる．

写真15　縄文・弥生土器出土状況（北から）

〈弥生土器〉

今回の調査では甕の口縁部・底部及び壺底部が出土した．図14－17・図15－1～12は甕の口縁であるが，みな外への突出は小さい．6～10は若干口縁が広いものの，須玖式のような広さはない．11・12は立ち上がり気味で内湾し中九州後期の特徴を示している．壺の口縁はいずれも前期の範疇であろう（図14－13～15）．

図15－13～26は甕底部であるが，須玖式と黒髪式の特徴を備えたものが見られる．ただし，平底のものは厚みがあり早い段階の可能性もある．

〈石器〉

包含層及び1・3号溝から若干の石器が出土した．確実に遺構に伴うものはない．

黒曜石製の石鏃（図16－2～4）と石核（同6）および黒曜石と安山岩製の剝片の15点である．また，弥生時代の包含層からは磨製石斧の基部，刃部が出土した．

石斧は全部で3点分存在する．1は刃部を中心に打ち欠いたあと研磨した痕がある．また，タールと思われる黒い付着物があるが，出土状況からみで後世のマンガン等の付着は考えられず，柄の装着剤であろうと考えられる．

〈その他の時代・遺物〉

遺構に伴うものはなく，溝や包含層からの出土である．古代以降の遺物は非常に少なく，土師器片が数点である．土師皿，高坏，坏の脚部，甑の取っ手部分がある（8世紀中葉～後半）．また，南側台地に掘りこまれた2m弱四方の土壙には，磁器がかなり入っていた．廃棄したものとして取り扱ったが，破損状態はそれほど悪くなく，木箱等に収納していた可能性がある．その中の一つに「肥前官窯」の銘があった．これと共に形状不明の鉄製品と釘数本が出土した．

図13　9802調査地点出土遺物２（1/3）

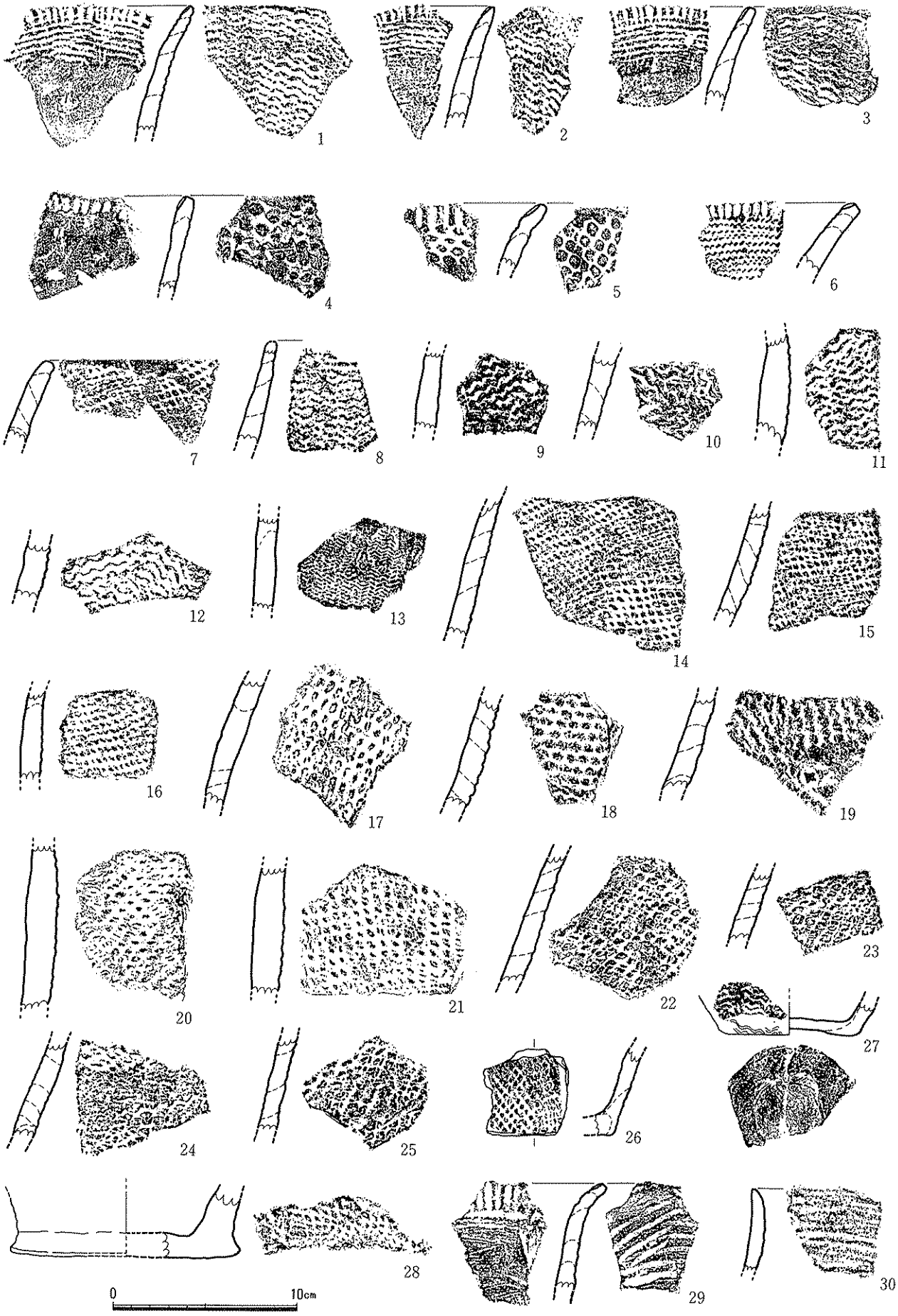


図14　9802調査地点出土遺物３（1/3）

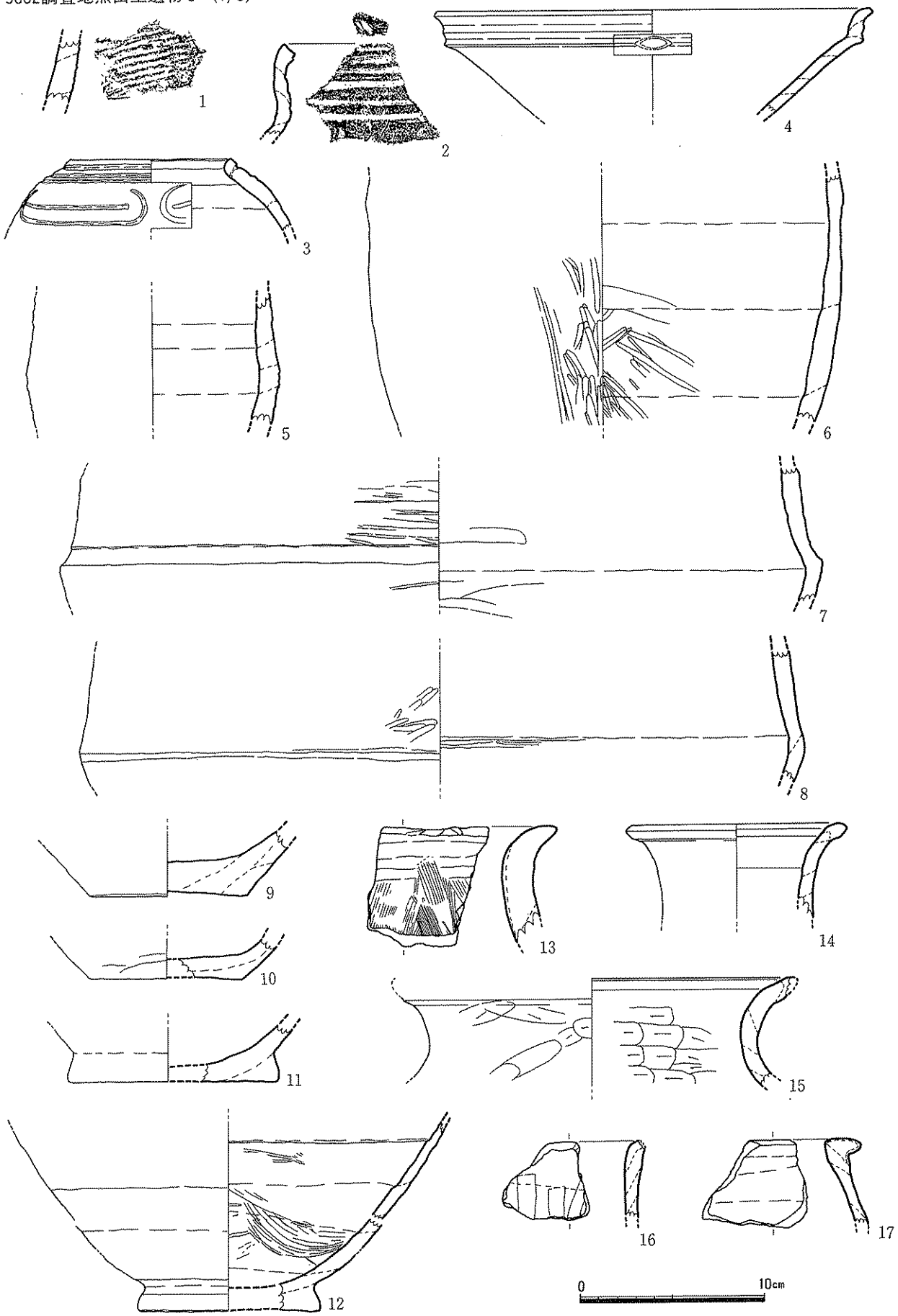


図15　9802調査地点出土遺物４（1/3）

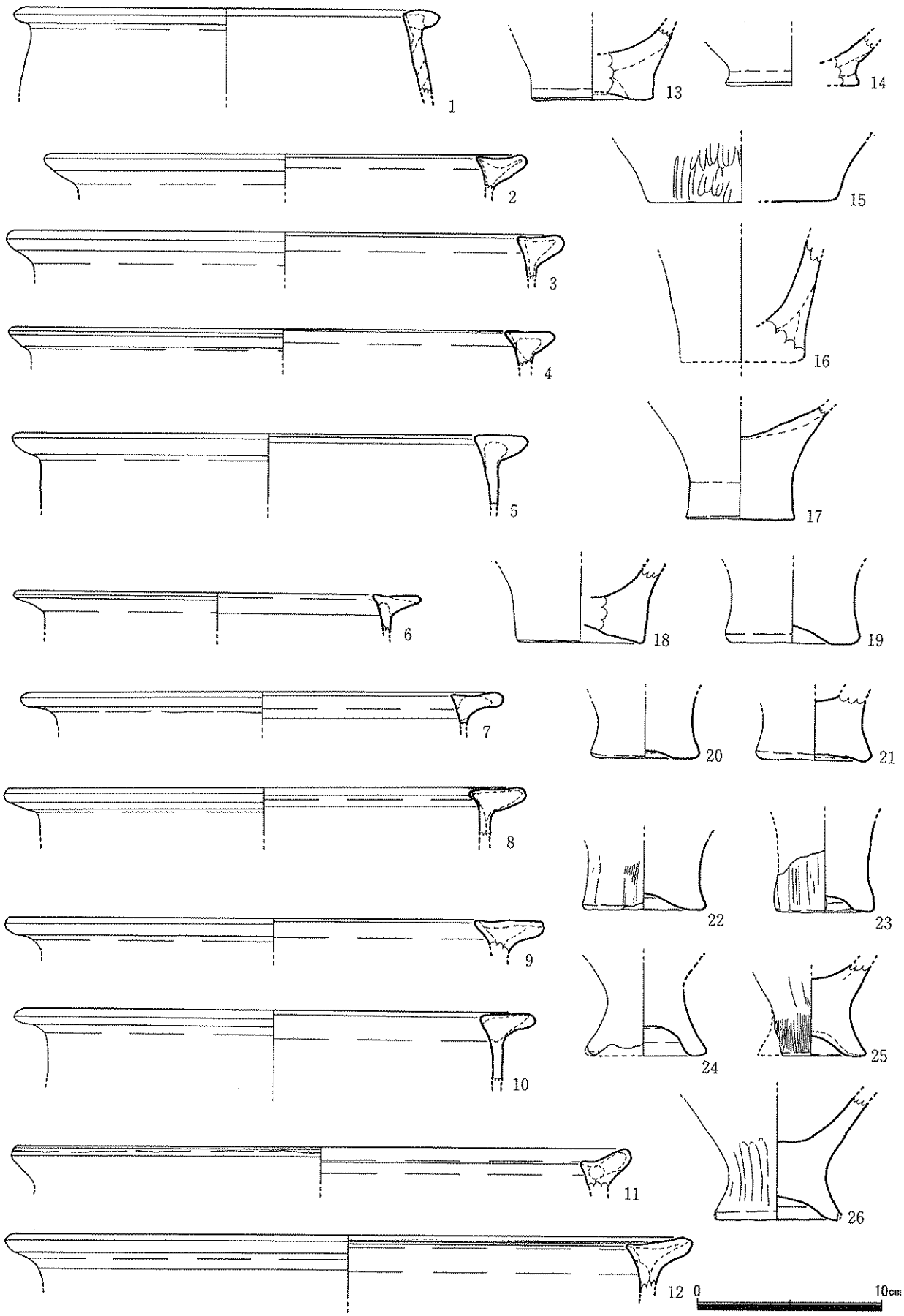
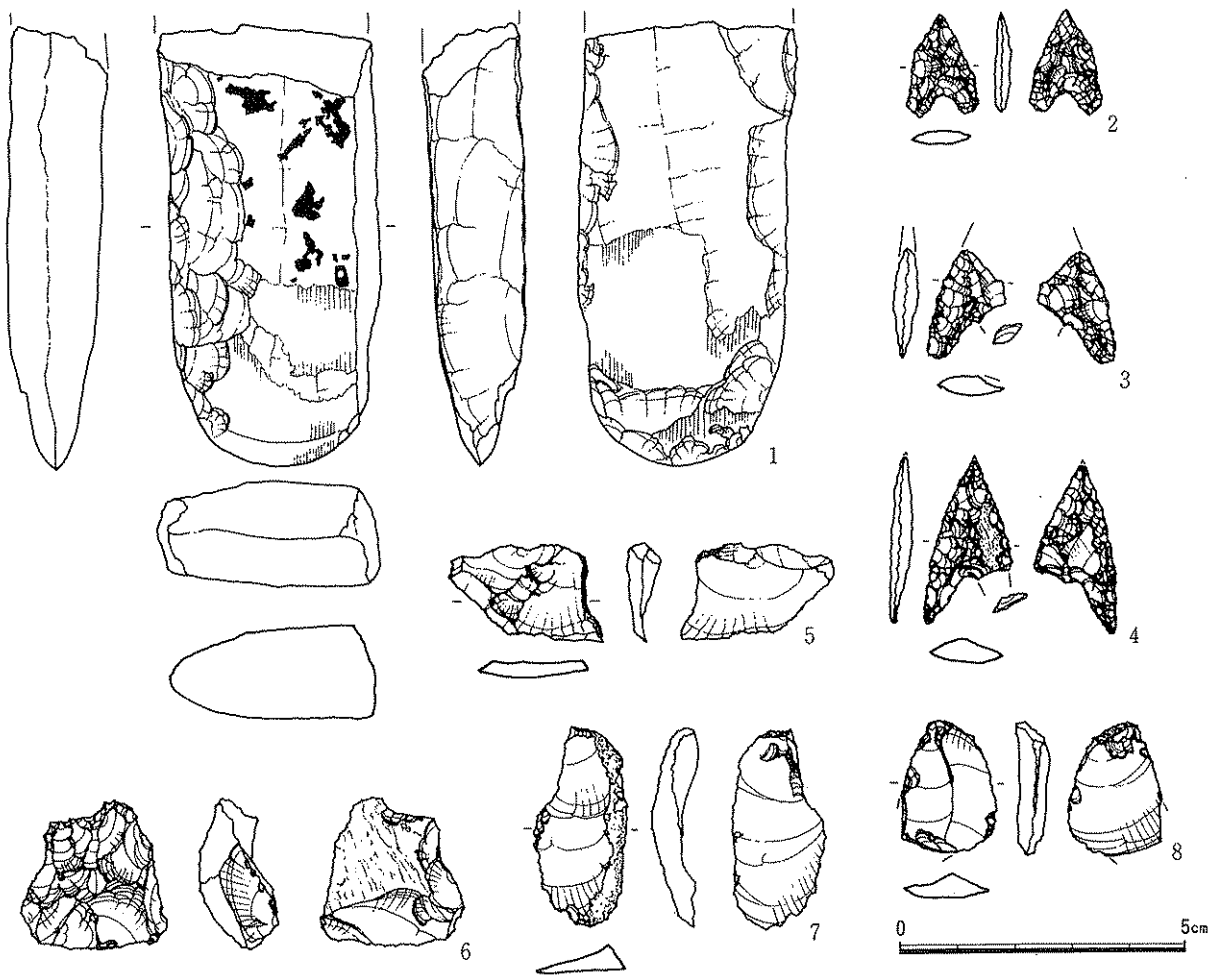


図16　9802調査地点出土遺物５（2/3）



４.成果と問題点

黒髪北地区においてある程度の面積をもって発掘調査が行われたのは，1994年度に実施された福利施設新営工事に伴う調査以来である．

今回，この黒髪北地区の調査において古代の遺物包含層と縄文・弥生の遺物包含層が分離して確認された．昨年度，南地区で行われた工学部校舎新営工事に伴う調査地点（9704）と旧国道57号線を挟んで対峙するが，南地区での調査ではシルト質層（基盤の沖積層）の上は古代の遺物包含層で，9802地点の東半分の層序と同様であった．これは福利施設地点でも同様である．9802地点西半分でも古代の遺物包含層は確認されたがレベルは他の地点とほぼ同じことから，一段と低くなった西側に縄文時代・弥生時代の包含層が良好な状態で遺存しているものと考えられる．後述する試掘調査の結果も加味して考えると，基盤の層が標高16.50m以下の地点では今回確認された縄文～弥生期の包含層が検出される可能性が高いと考えられよう．

今回の調査のもう一つの発見は，シルト質層中から押型文土器が多量に出土したことである．このことについて，福利施設の調査概報にこの層に押型文土器が含まれいる可能性についての示唆があるが，今回の調査結果はこれを裏付けることになった．黒髪北地区のこれまでの調査・試掘を合わせても，旧地形に関する情報は多くはないが，決して単純でないことが予想される．今回の調査はその意味では非常に重要な調査結果であったと思う．

写真17　調査委員会現地説明会の一コマ

II－3　９８０７調査地点

１．遺跡の立地と周辺遺跡

内容は9801調査地点と重複するので，第II章－１の同項を参照されたい．

２．調査の概要

今回の調査は年度当初平成10年度予定に組まれていなかった事業であったため，９月11日に施設部と協議を行った．協議の結果，９月末から10月初にかけて大学病院病棟および中央診療棟建築予定地と一緒に試掘調査を実施することとし，上記予定地の試掘を終了した９月28日に本地区の調査を行った．中庭という条件のため重機が使用できず，１×１ｍの試掘トレンチを２ヶ所設定し人力によって掘削したところ，地表下90cmで古代の遺物包含層を確認した．このため，施設部および大学病院と協議の上，10月末より全面発掘調査を実施することとした．

〈調査面積〉

175m²

〈調査期間〉

1998年10月28日～11月20日

〈調査員・参加者〉

小畑弘己．

伊賀上ユリ子，岡崎光子，岡田イツ代，押方富江，甲斐田末男，河合章行，河野兼勝，黒木タケ子，古賀敬子，小細工洋子，白石美智子，高松北子，溜渕俊子，番山明子，福田久美子，福田はつ子，堀川貞子，松井昭子，水上順子，森川征子，森川護，森田ミドリ．

３．調査の結果

ａ　基本層序

調査地の基本層序は，以下のとおりである．

Ⅰ層－表土（厚さ50cm），Ⅱ層－現代埋土（厚さ20cm），Ⅲ層－黒褐色土層（7.5YR3/2）（厚さ15cm），Ⅳａ層－黒褐色土層(7.5YR3/1)（厚さ20cm），Ⅳｂ層－黒褐色土層（5YR3/2）（厚さ15cm），Ⅴ層－黒褐色土層（厚さ25cm）（7.5YR2/1），Ⅵ層－暗褐色土層（10YR3/3）．

写真18　調査区全景（南西から）

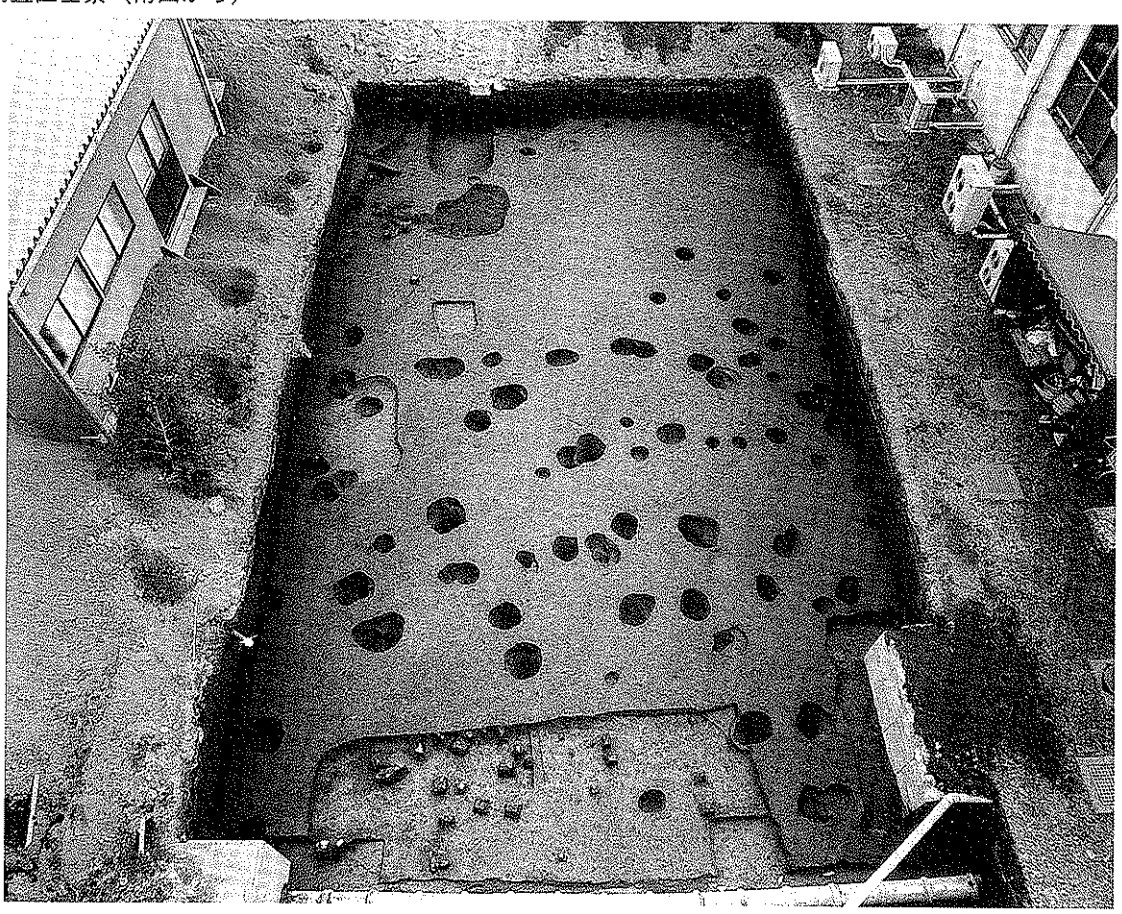
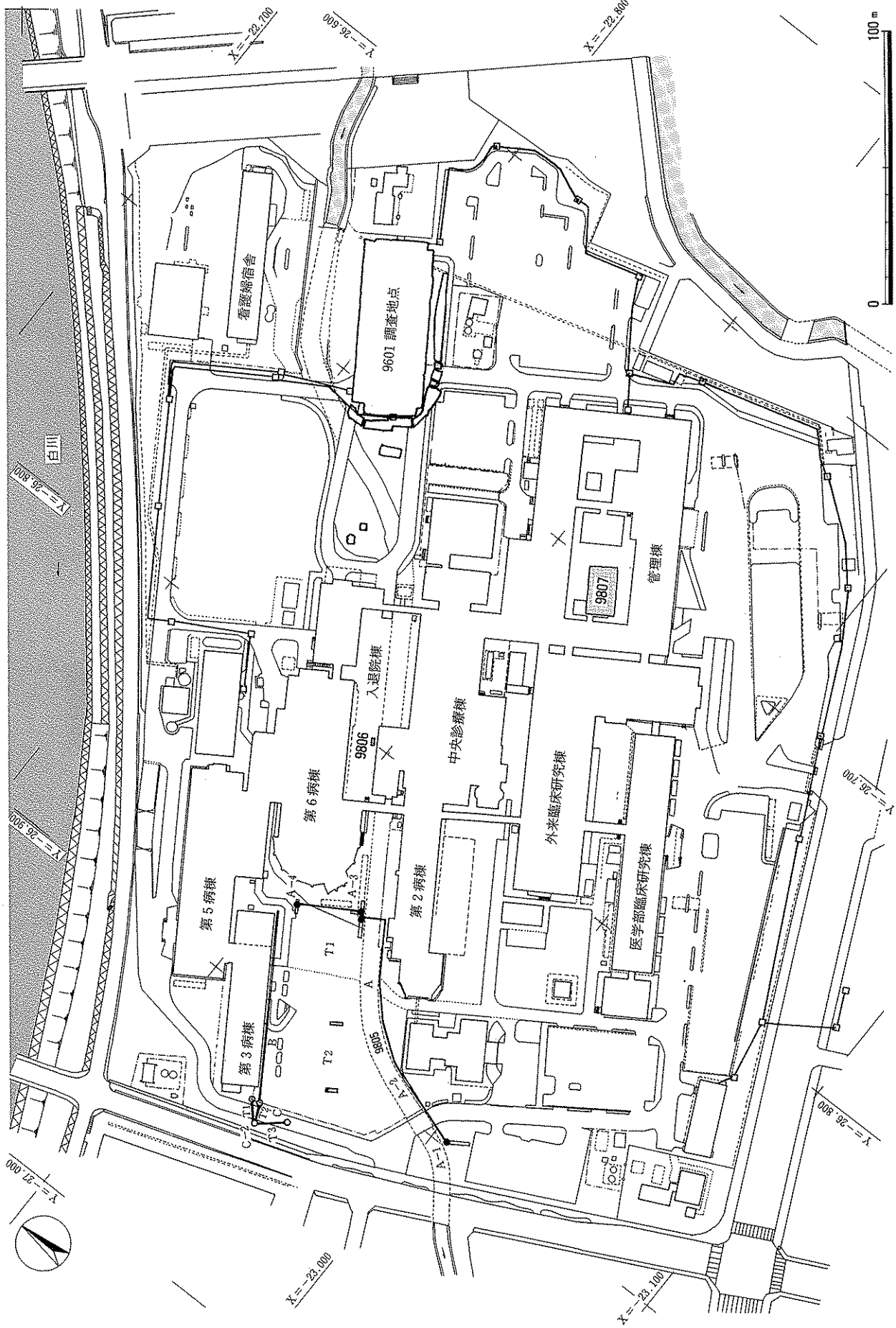
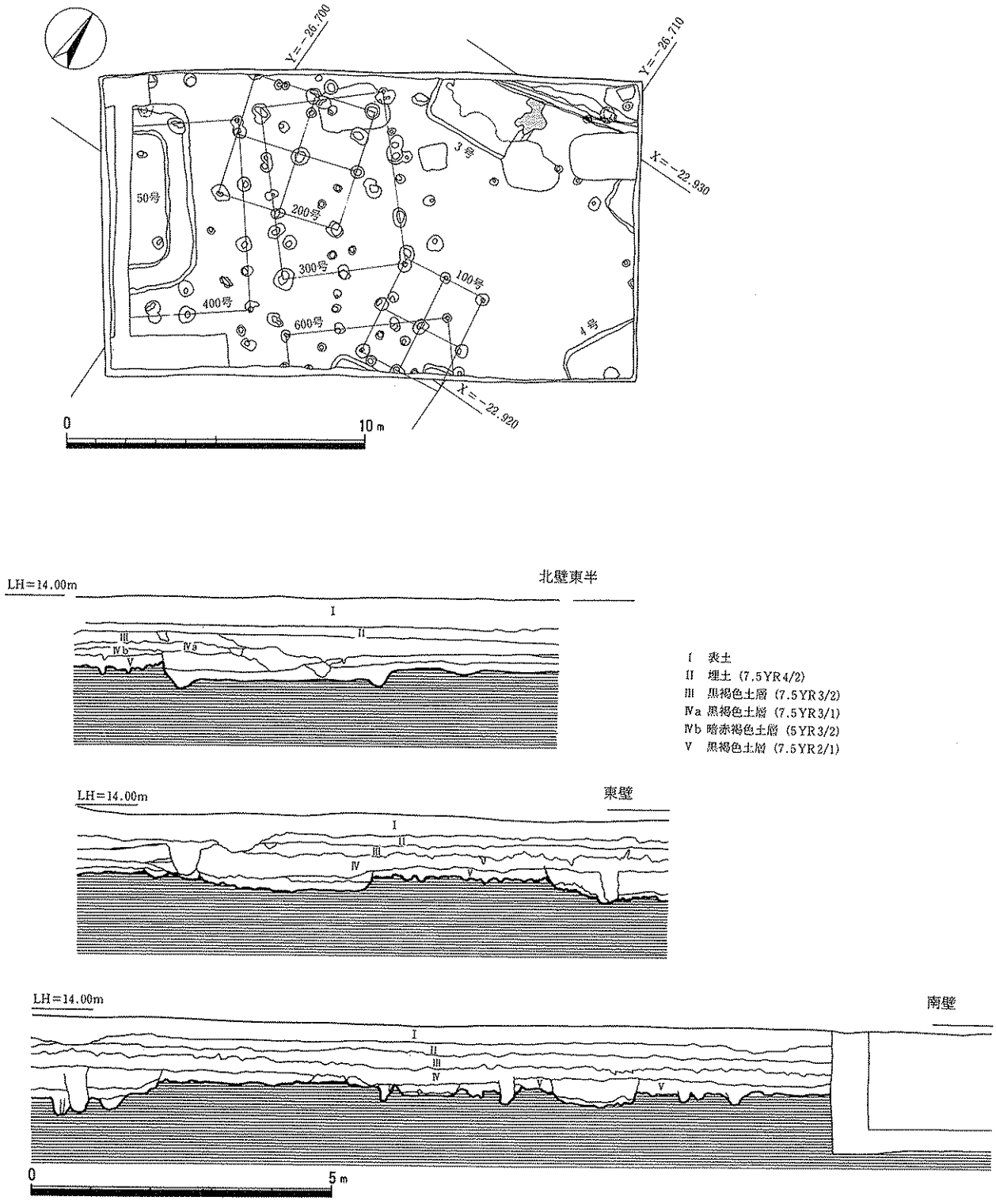


図17　本荘北地区における調査地点位置図（1/2000）



II－3　9807調査地点

図18　9807地点遺構配置・壁土層実測図（1/200・1/100）



III層が近代・近世の耕作土層で，IVa～V層が古代～縄文の遺物包含層，VI層が地山である．縄文時代の遺物はV層下面から出土する．通常，肉眼でみて呼称する土層の名前（立会調査時の記録に使用）と対比すると，III層が淡茶褐色土層，IV・V層が黒褐色土層，VI層が黄褐色土層に相当する．なお，IV層は南壁では分離できなかった．

b　検出遺構と遺物

今回の調査では，7世紀後半～8世紀初頭の竪穴住居址2基，掘立柱建物（2×3間）3基，8世紀後半～9世紀初の竪穴住居址4基，掘立柱建物（2×2間）2基，近世？道路1を検出した．

〈道路〉

調査区の北西隅で検出した道路遺構（道路面2）であ

る．調査区外へ延びるため規模は不明であるが，方向はほぼ東西であり，10°ほど南へ振れる．幅20～30cm，深さ20cmあまりの側溝をもつ．溝の覆土中には砂層が認められ，断続的に水が流れ込んでいたようである．溝は２本認められ，２時期の作り替えが認められる．古代の遺物包含層であるⅣ層を切っており，これ以降の時期のものと思われる．また，Ⅲ層上面とレベルが同じところにも硬化した道路と思われる面（道路面１）が認められ，近代まで継続して使用されたものと考えられる．

写真19　道路面２（東から）

写真20　道路面土層断面（東から）

<竪穴住居址>

３号竪穴住居址（図19）

約1/3ほどを道路遺構に切られる．方向はほぼ東西方向である．竈は東壁に取り付く．長軸の長さ3.5mで，深さは検出時点で25cmである．本来の掘り込み面はⅣｂ層上面であり，本来の深さは50cm以上あったものと思われる．竈を挟むように中央部に硬化した床面を確認した．柱穴は確認できなかった．竈周辺から細片化した土師器の甕形土器や甑（図20－10～15），坏（同５～８），丸瓦片（同９）が出土した．竈はすでに破壊されていたが，焚口の焼土と支柱そして両袖部の痕跡を確認できた．支石および右側袖の基礎石には一帯の基盤層中にある軟質の砂岩ブロックを加工して用いている（図22－７）．

遺物から８世紀後半の時期と思われる．

４号竪穴住居址（図19）

調査区東隅壁に接して検出したもので，大半は調査区外へ延びる．検出面から深さ30cmほど残っており，硬化した床面および柱穴は確認できなかった．出土遺物は須恵器高坏・蓋・壺（図20－16～20）と土師器の丹塗りの皿形土器，内面黒色の篦磨研土器の坏などが出土した．

遺物の特徴から７世紀後半～８世紀初頭の時期が考えられる．

写真21　３号竪穴住居址（南から）

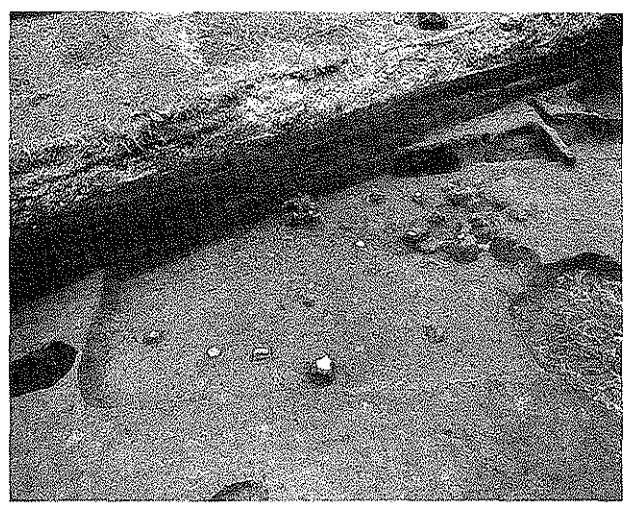


写真22　３号竪穴住居址竈（西から）

この他３基ほど竪穴住居址のコーナー部分と思われる遺構を３基ほど検出している．５号遺構，６号遺構，34号遺構がそれであるが，時期は明確でない．

図19　竪穴住居址実測図（1/50）

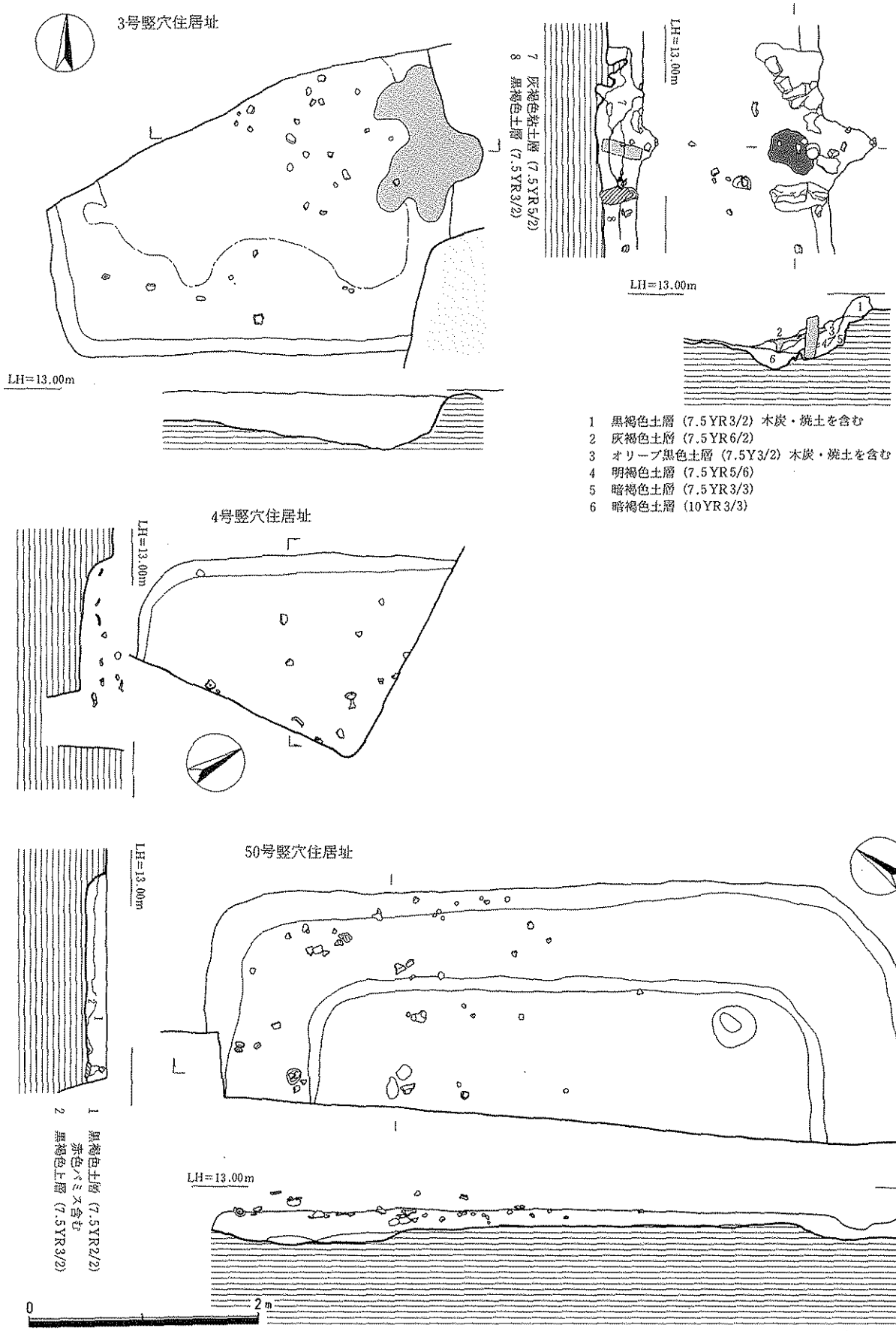


図20　9807調査地点出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

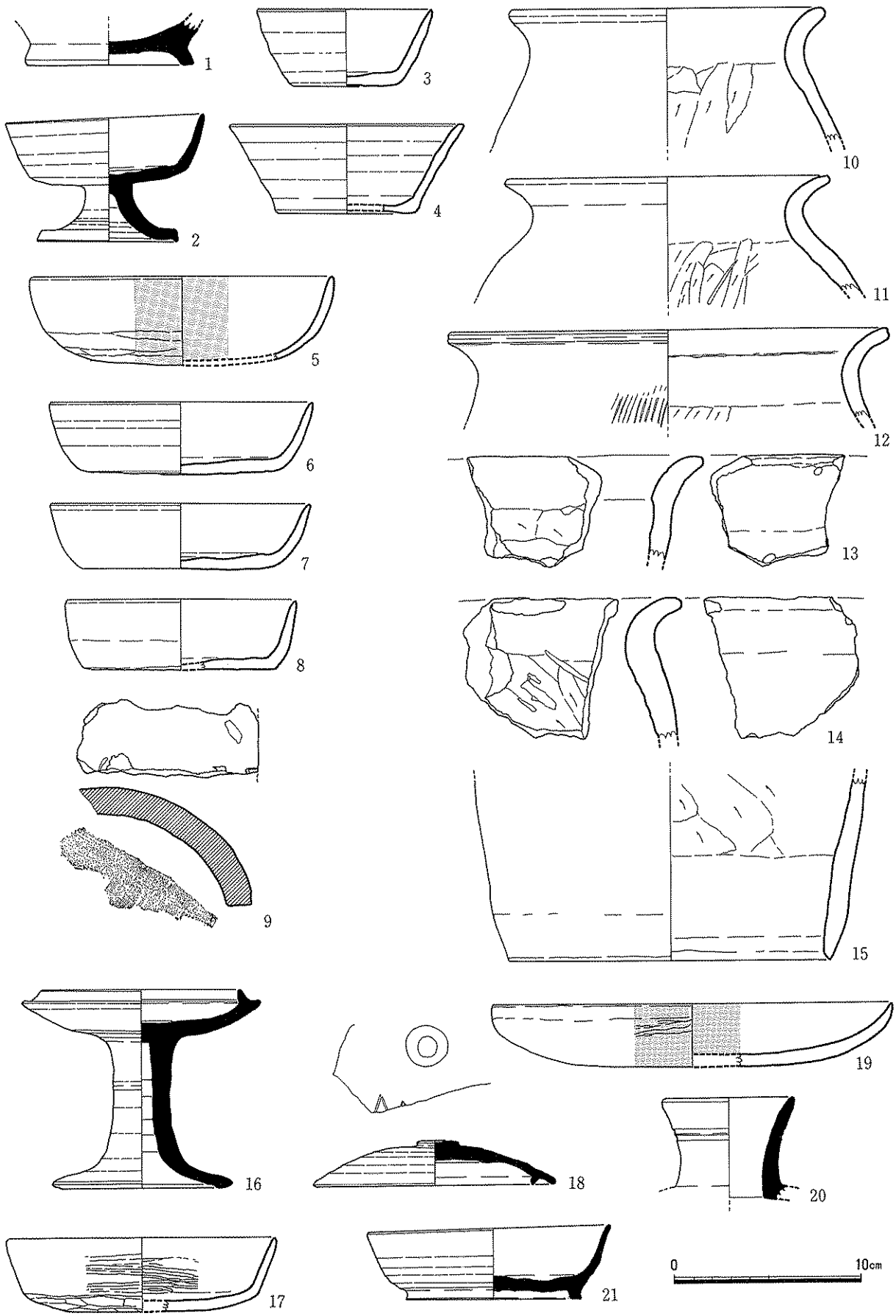


写真23　4号竪穴住居址（南西から）

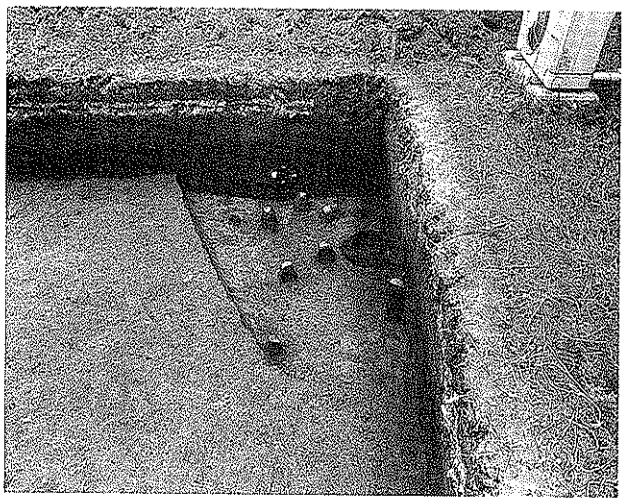


写真24　4号竪穴住居址遺物出土状況（南西から）

50号竪穴住居址（図19）

調査区西壁にかかって検出した長さ6mあまりの方形の浅い遺構である．形状から竪穴住居址としたが，その性格は明確でない．当初2つの住居の切り合いと思い，掘り下げたところ，共通する周溝状の浅い掘り込みが認められ，最終的に一つの遺構と判断した．出土遺物には須恵器高坏（図20－2）や土師器坏（同3・4）などがあるが，1や4は出土レベルが他より15～20cm上であり，後世の時期（9世紀中ごろ）のもので，遺構の設営時期を表すものではない．よって，7世紀後半～8世紀初頭がこの遺構の時期と考えられる．

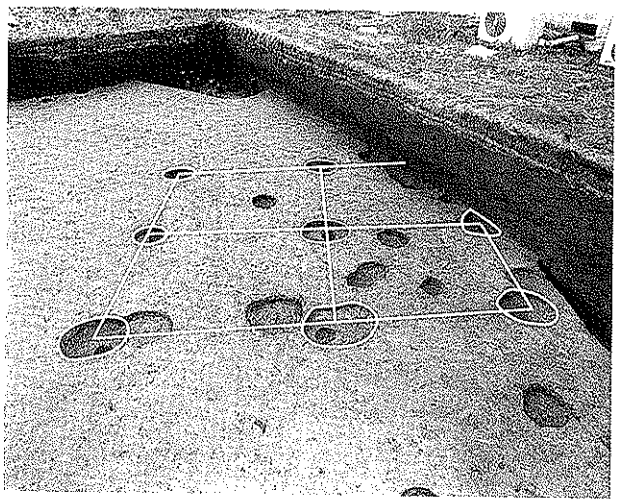
〈掘立柱建物址〉

100号掘立柱建物跡（図21）

調査区南側中央部で確認した桁行2間，梁行2間の掘立総柱建物である．柱間は南北方向が1.8m，東西方向が1.5mである．柱穴は直径40～50cm，検出面からの深さは60cmである．柱痕の直径は約15cmである．

出土遺物は103号と105号ピットから土師器の甕形土器片6点が出土したのみで，時期決定の決め手を欠く．

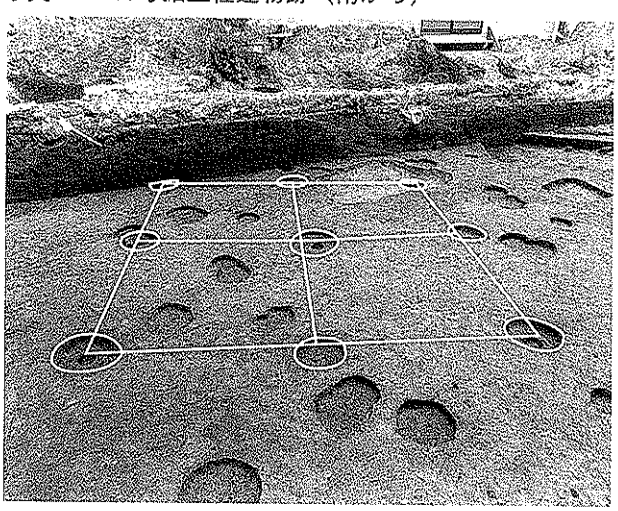
写真25　100号掘立柱建物跡（西から）



200号掘立柱建物跡（図21）

調査区北側西よりの地点で検出した桁行2間，梁行2間の掘立総柱建物である．100号掘立柱建物跡に比べ若干方位が西へ振れる．柱間は南北・東西方向ともに2mで正方形に近いプランをもつ．柱穴は直径40～60cm，検出面からの深さは80cm，柱痕の直径は約15cmである．出土遺物は土師器の甕形土器の細片が多く，遺物からは明確な時期を決め難い．

写真26　200号掘立柱建物跡（南から）



300号掘立柱建物跡（図21）

調査区西側の地点で検出した桁行4間，梁行2間の掘立柱建物である．ほぼ200号掘立柱建物と重なる．柱間は桁で1.8～2m，梁で2mであるが，桁の中央にやや小型の柱穴があり，これとその両側の柱間は1～1.2mと狭くなっている．柱穴は直径30～50cm，検出面からの深さが20～60cmほどである．柱痕の直径は約10cmほどと思われる．出土遺物には時期の決め手になるようなものはないが，先の200号掘立柱建物跡の202号ピットがある．本建物の308号ピットとの切り合いから，200号掘立柱建物

図21　掘立柱建物跡・道路跡実測図（1/100）

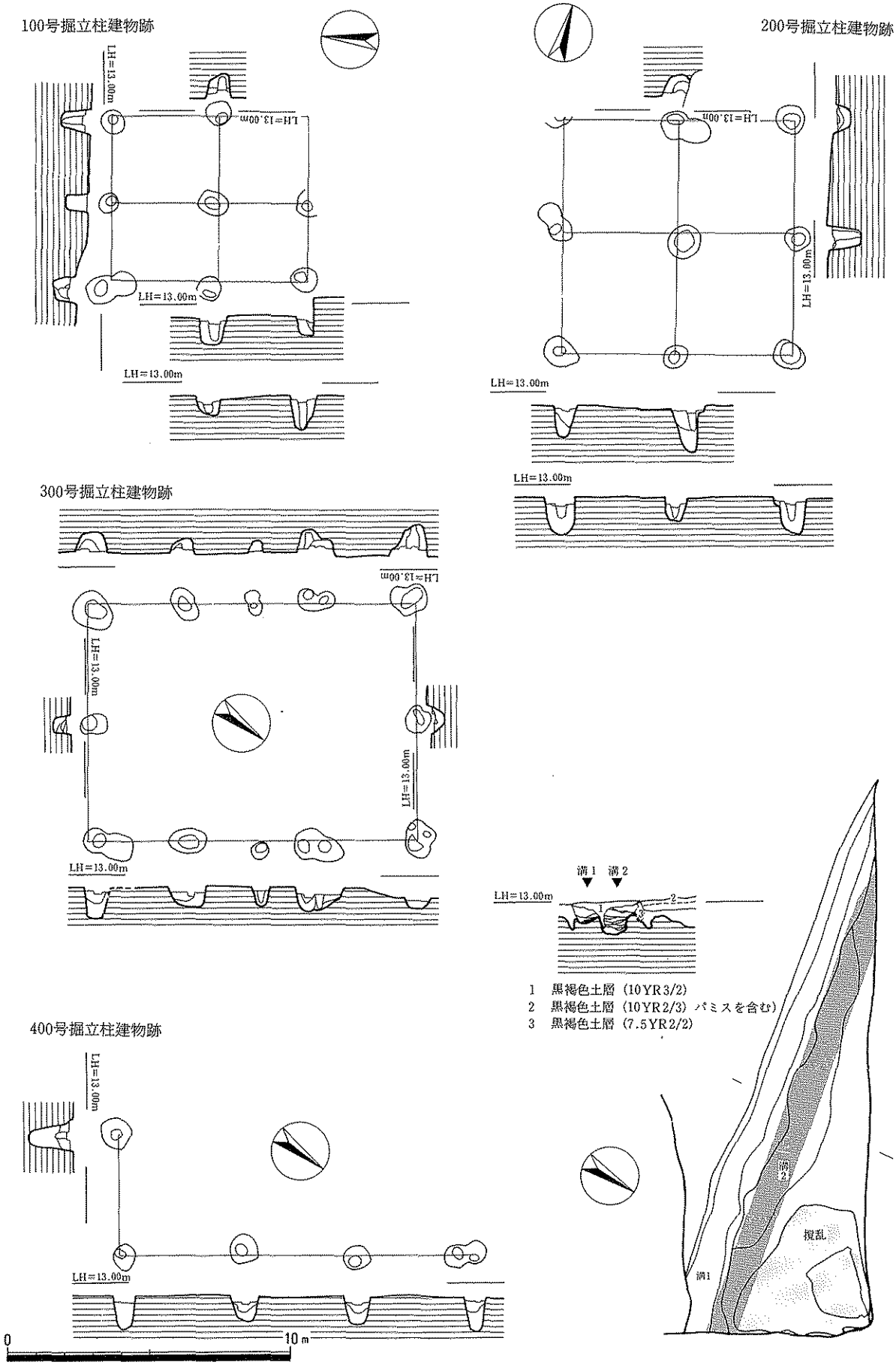


写真27　300号掘立柱建物跡（南東から）

より古い時期のものであることがわかる．柱穴はいずれも２個重なっており，建替えによる．

400号掘立柱建物跡（図21）

調査区西側の50号遺構と重なる部分で検出した桁行３間，梁行２（以上？）間の掘立柱建物である．ほぼ300号掘立柱建物と平行する．柱間は桁・梁ともに２ｍである．柱穴の直径は50cm，検出面からの深さが60～80cmほどである．柱痕の直径は約15cmである．

写真28　400号掘立柱建物跡（南東から）

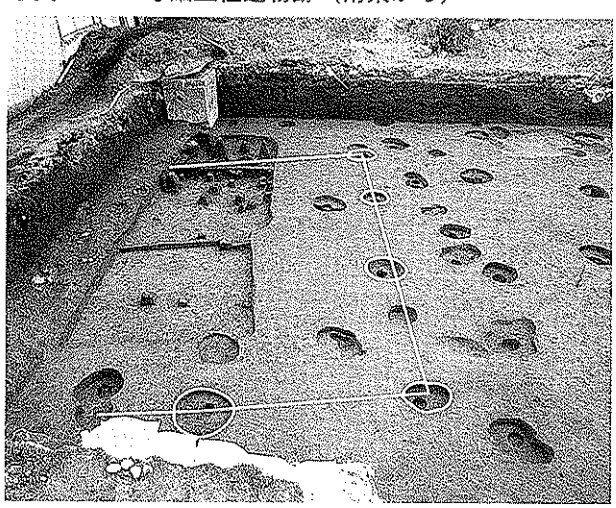
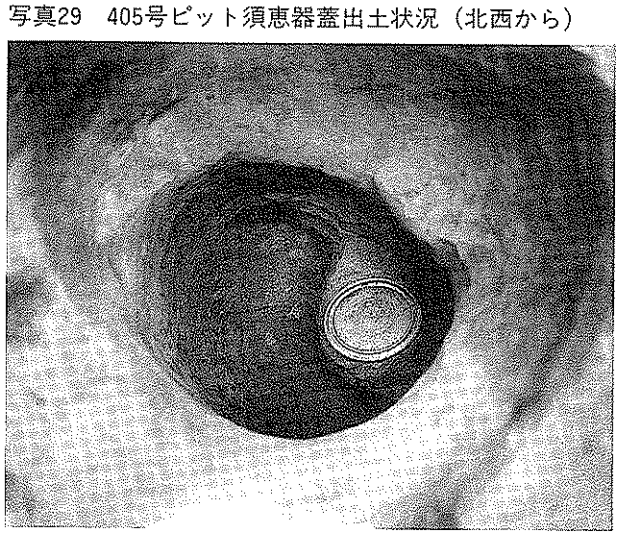


写真29　405号ピット須恵器蓋出土状況（北西から）



出土遺物は須恵器・土師器の細片が多いが，405号ピットの底から20cm上のところから完形の須恵器蓋が出土している．この蓋は裏面を上にして斜めの状態で出土しており（写真29），地鎮行為であろうと思われる．

よってこの遺構の時期は７世紀後半代と考えられる．

600号掘立柱建物跡

300号掘立柱建物跡の南側に平行する桁行３間，梁行１（以上？）間の掘立柱建物である．調査後に建物跡であると認定した．８号・９号・10号・502号・503号ピットで構成される．柱間は桁・梁ともに1.8ｍである．柱穴の直径は30cm，検出面からの深さは30cmである．出土遺物は細片が多く，時期は決め難い．

掘立柱建物跡のこの２つの方向性は時期差を表すものと考えられ，切り合い関係も勘案して，条里方向に沿わず東に振れる建物群（300・400・600号）が７世紀代～８世紀初のもので，南北方向の建物群（100・200号）が８世紀後半に属すると考えられる．

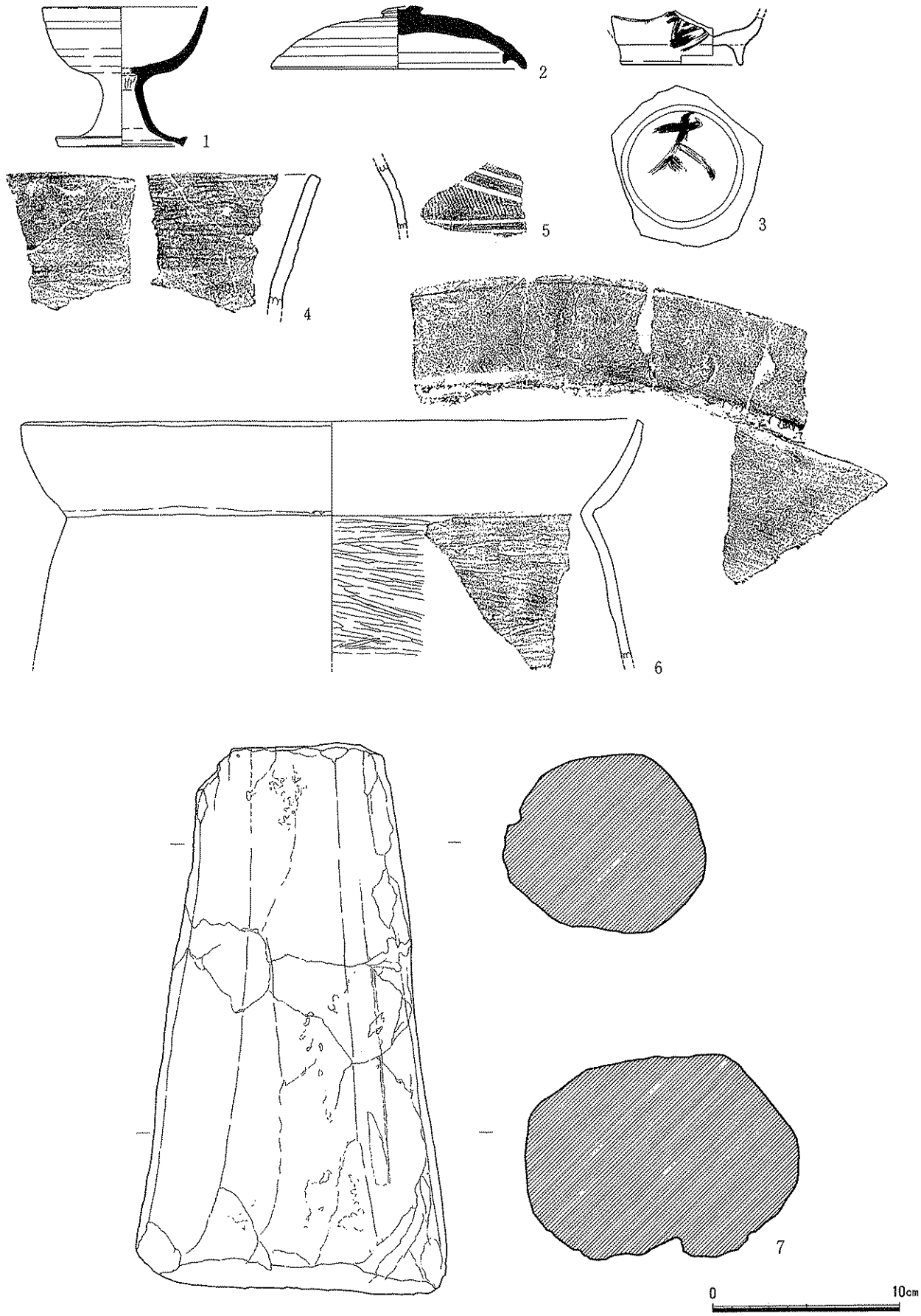
この他若干の縄文時代晩期の土器片（図22－４～６）と黒曜石製石鏃，石片などが出土している．

４．成果と問題点

本地点は予想に反して包含層および遺構の残り具合が良好で，しかも付近の古代集落に比べて時期的に遡る７世紀代から８世紀初頭の遺構群が発見されたことは新たな知見である．また，条里施行以前の遺構群の方向がほぼ特定できたことも成果として挙げられる．

建物の方向性からみたように２時期（以上）の遺構構成が認められる．８世紀後半の条里に沿った遺構群には先の掘立柱建物以外に３号竪穴住居址も含まれ，住居と倉庫というセット関係を成していたと考えられる．しかし，７世紀代の掘立柱建物群と竪穴住居址群は重なる部分もあり，かつ方位が若干異なるものもあり，この時期の細別とそれによる遺構群の構成は今後の課題である．このような問題は一帯の条里制施行時期の問題とも大きく係わるものである．医学部構内の9801調査地点では８世紀初頭には条里区画に沿った遺構が出現しており，この７世紀後半～８世紀初頭の遺構・遺物は時期的に細分できる余地を残している．調査区が狭いため，この限られた資料のみでの議論には限界があり，周辺資料との比較検討が必要であろう．

図22　9807調査地点出土遺物実測図２（1/3）



II-4　９８１０調査地点

１．遺跡の立地と周辺遺跡

遺跡の立地はII－２章において詳述しているので，ここでは割愛する．調査区は黒髪南地区の北東端にあたる．

２．調査の概要

今回の調査は平成８年度補正予算によって年末に急遽浮上した事業である．12月２日施設部建築課長より補正予算がついたとの連絡が入り，埋蔵文化財調査委員会委員長北野隆教授および調査室長甲元眞之教授を交え，施設課との協議を行った．３月末日工事着工のため，１月下旬より発掘調査をお願いしたいとの申し出であった．これに対し調査室では１・２月は年次報告書の作成期間であり，実務的に無理がある，また調査期間が短いため，調査が窮屈になるとの回答をしたが，建築工事は大学全体の問題であり，今回の予算を見送ることはできないとの施設部の返事であった．よって，年報作製業務の一部および現場測量を委託することで，調査を了承した．

調査は建築工事に先立ち，支障配管の切替に伴う立会調査を12月14日より４日間実施し，１月中旬より表土・撹乱層の１次掘削を開始した．

調査作業員は１月21日より現場へ入り，３月１日現在まで調査は順調に遂移している．ただし，年報作成に伴い遺物実測を委託した業者が要領を得ず，年報作成業務に支障を来している現状であり，今後はこのような事態は避けなければならないと痛感している．

〈調査期間〉

1998年12月14日～12月18日（支障配管切替部）

1999年１月21日～現在進行中（建物本体部）

〈調査面積〉

1,098m²（建物本体部）

〈調査員・参加者〉

小畑弘己，大坪志子．

江島賢一，岡崎光子，岡田イツ代，押方富江，甲斐田末男，河合章行，河野兼勝，熊本茂仁，黒木タケ子，古賀敬子，小細工洋子，白石美智子，新里亮人，鈴木笙子，高松北子，溜渕俊子，番山明子，福田久美子，福田はつ子，藤原由博，松井昭子，水上順子，宮村邦子，村上幸子，森川征子，森川護，森田ミドリ，吉田ひろこ．

写真30　調査区全景（南から）

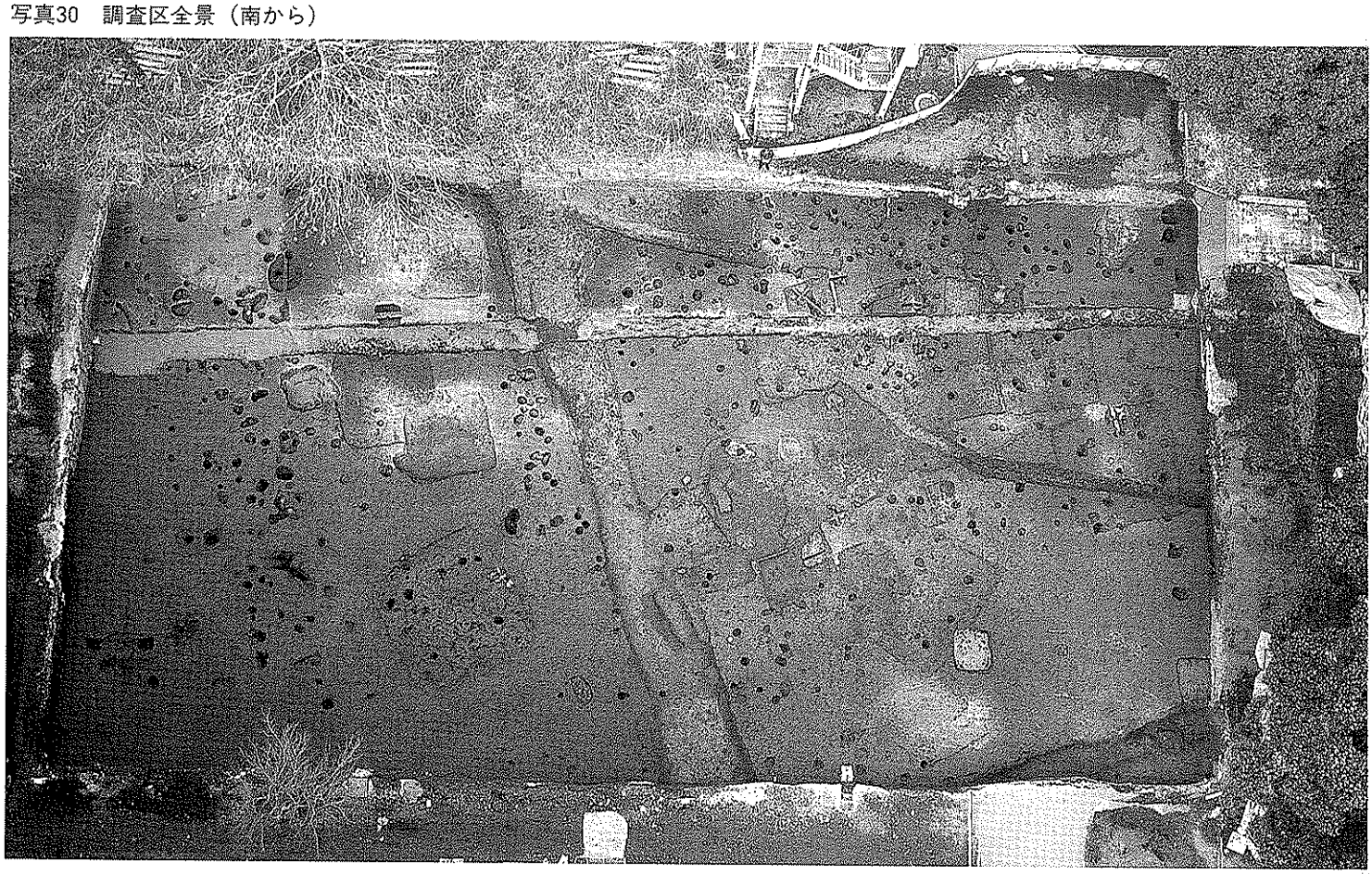
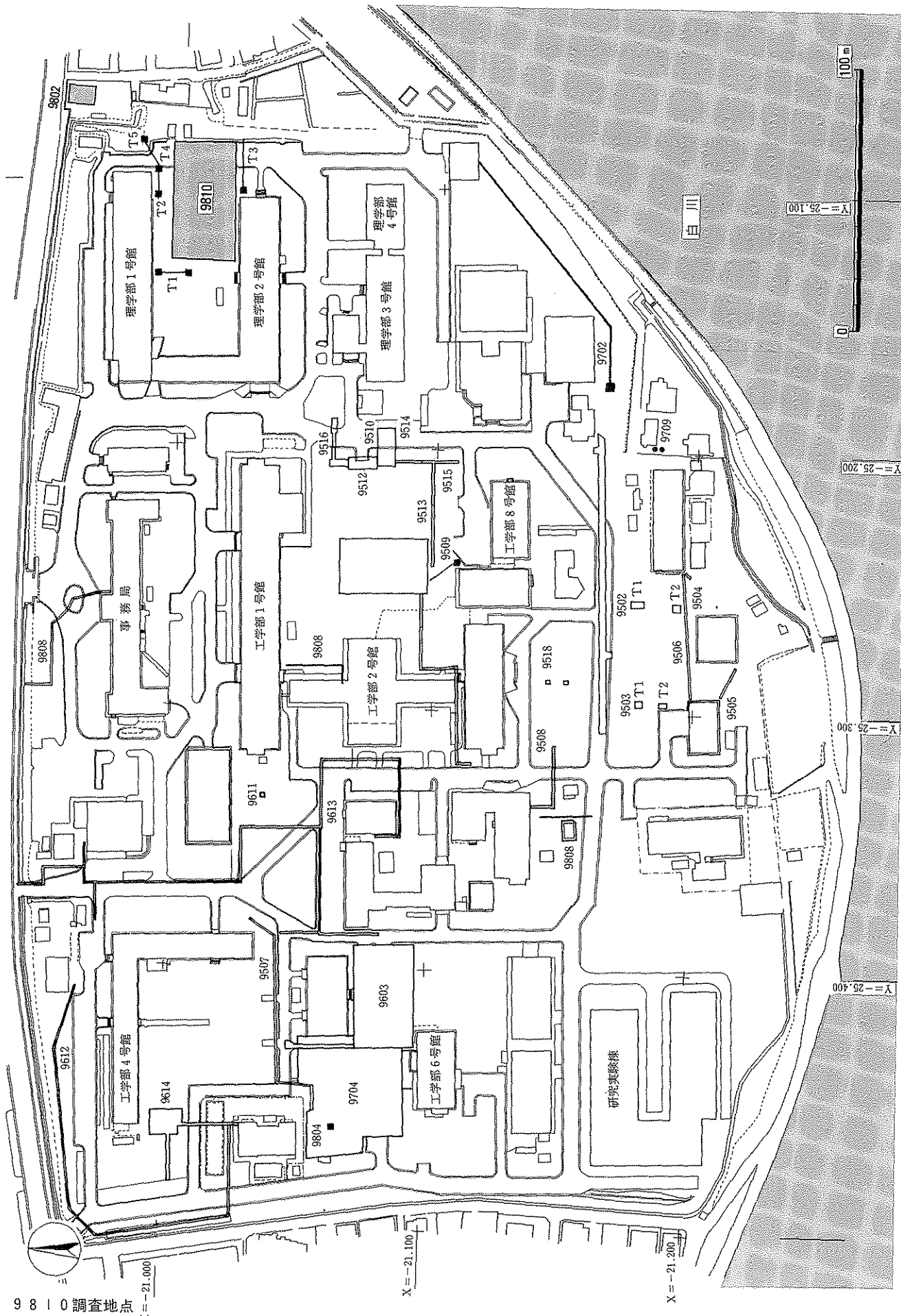
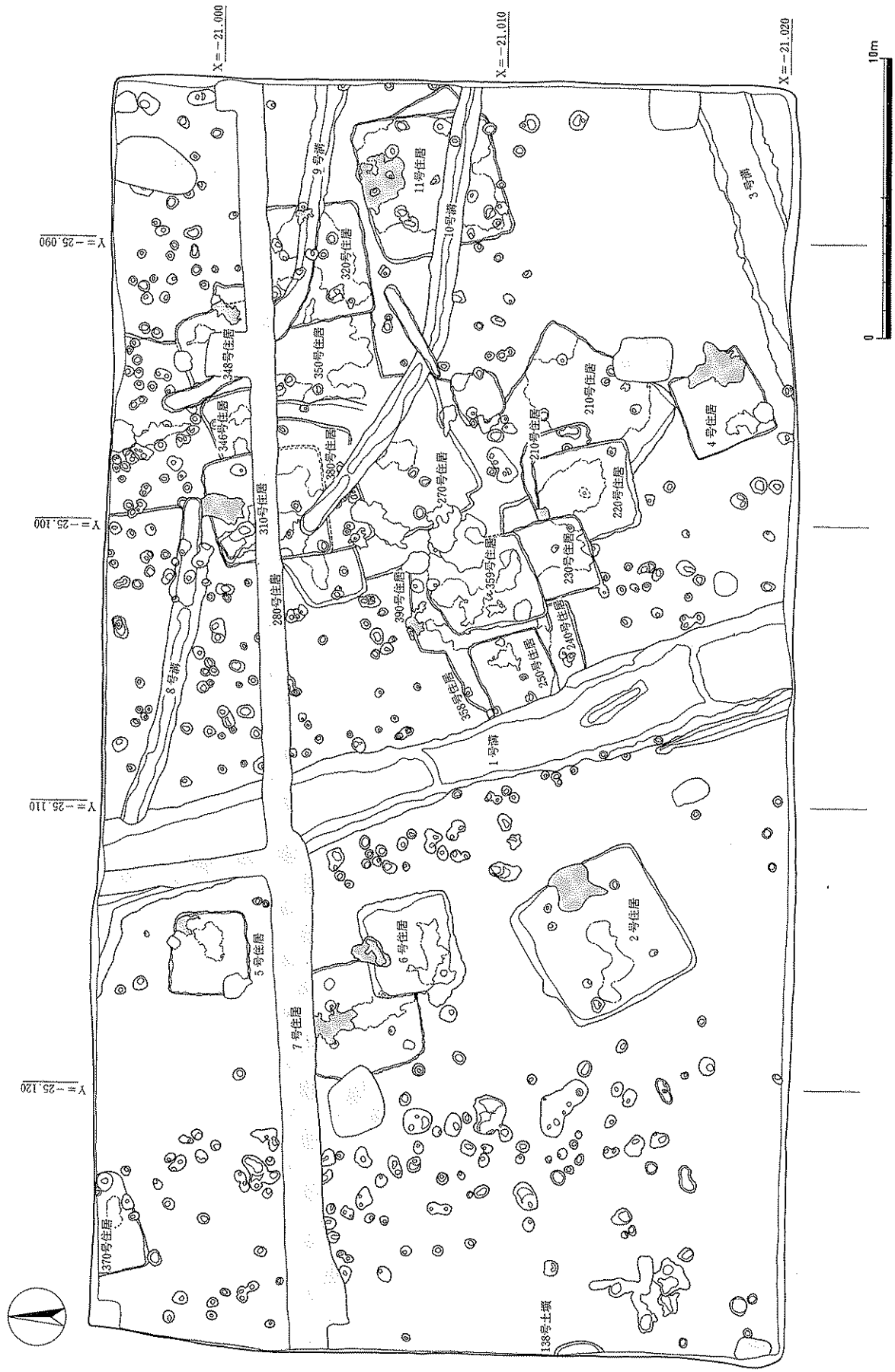


図23　黒髪南地区における調査地点位置図（1/2000）



II－4　9810調査地点

図24　9810地点遺構配置実測図（1/200）



3．調査の結果

a　基本層序

調査地は理学部校舎の中庭の駐車場として利用されていたため，砂利が撒かれていた（Ⅰ層）．その下部は現代の撹乱土（Ⅱ層）で厚さ20cmである．その下に淡茶褐色の堅く締まった近世以降の耕作土（Ⅲ層－黒褐色土10YR3/3）があり，その下部が黒褐色土の遺物包含層（Ⅳ・Ⅴ層）である．この層は色の濃淡によって，Ⅳ層－黒褐色土層（10YR2/2）（厚さ30cm）とⅤ層－黒褐色土層（10YR2/3）（厚さ20cm）の２層に区分される．古代遺構の掘り込み面はこのⅤ層の上位面である．厚さは40cmほどである．この下は黄褐色土（暗褐色土層）で，いわゆる地山土であるが，上の黒褐色土と本層の漸移部から縄文時代の遺物が出土する．

撹乱部分の断面を見ると，この地山土は厚さ20cmほどで，その下には火山ガラスを含む黒褐色の固い土層（厚さ20cmほど）が堆積しており，黒髪北地区の上位段丘上（五高記念館以北）で確認していたが，この南地区では初めての発見である．科学的分析は行っていないが，姶良丹沢火山灰のガラスではないかと思われる．この層の下は段丘基盤層である砂礫層へと続く．

また，今回の調査で気がついた点として，樹木並木のある北側半分は土の乾燥が著しく，色調や硬度がかなり異なるという点が上げられる．乾燥が激しいため遺構の検出が難しく，狭い面積の場合上位の耕作土と見間違う危険性もあり，とくに立会い調査などでは留意せねばならない事項であろう．

図25　調査区西壁土層断面実測図

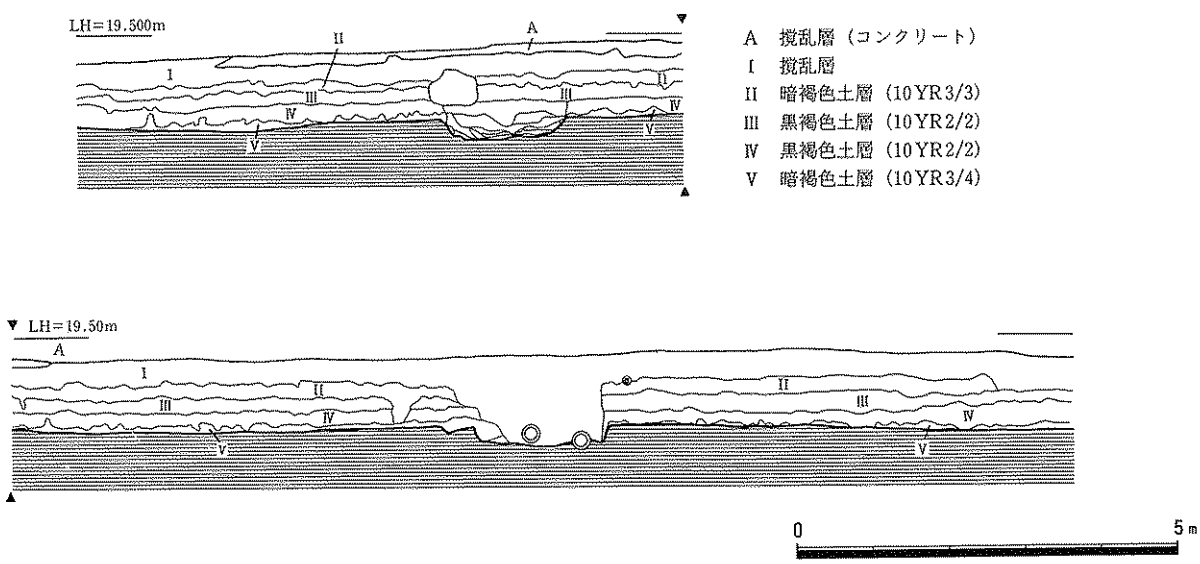


写真31　２号竪穴住居址（西から）

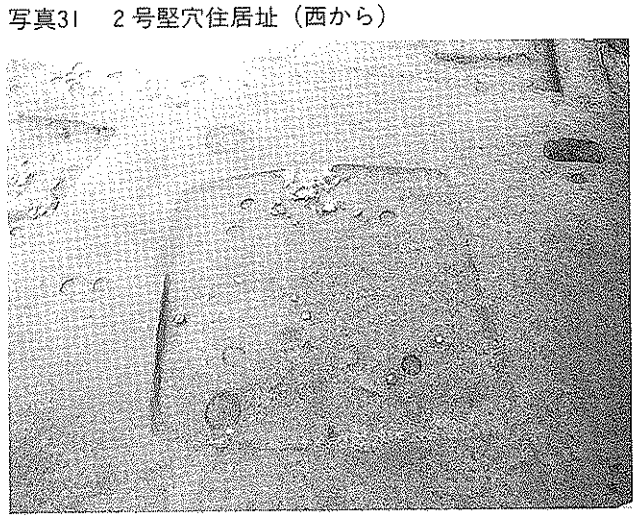


写真32　６・７号竪穴住居址（南から）

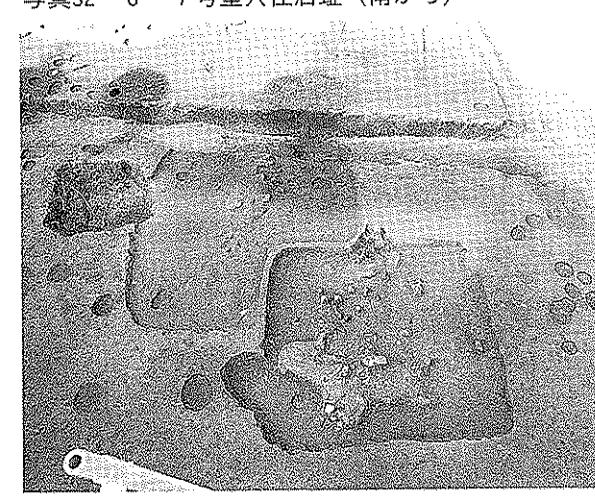
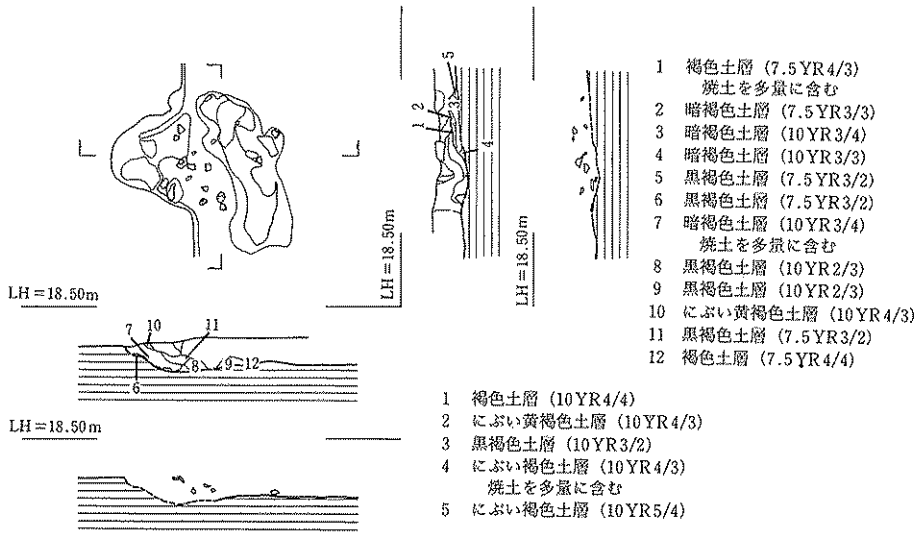
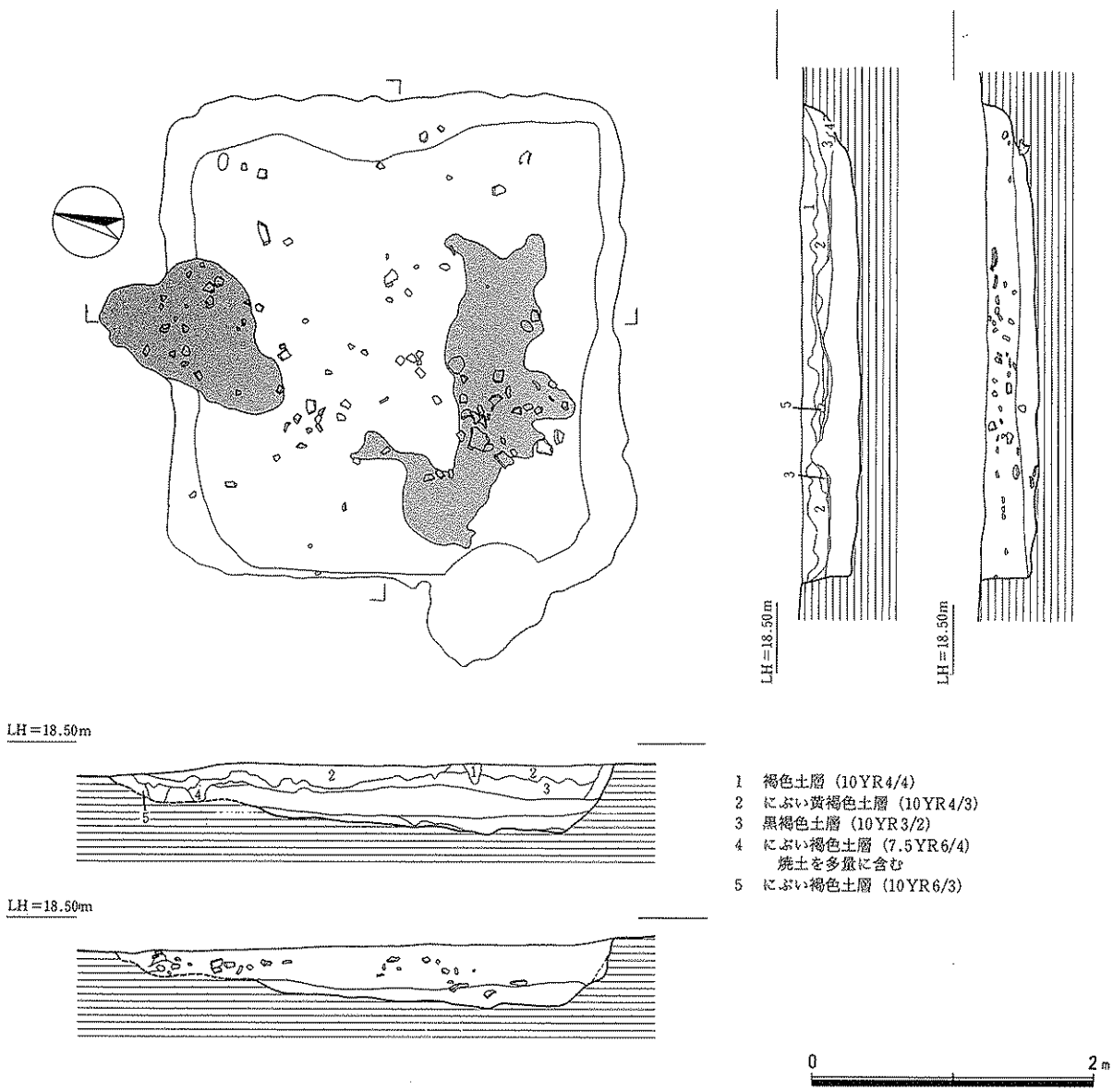


図26　6号竪穴住居址実測図（1/50）





b　検出遺構と遺物

現在調査中であり，最終的な数は確定できないが，検出した遺構の種類と数は以下のとおりである．

近世　溝１条

中世末？　溝１条

古代（７世紀末～９世紀前半）　竪穴住居址24基，土壙２基，溝３条，柱穴500以上である．

竪穴住居址はその規模と構造から大きく２種類に分かれる．１辺が５ｍほどで四隅に柱穴をもつタイプ(図27)と１辺が３ｍほどの小形の住居で竪穴内に柱穴のないタイプ（図26）である．前者が時期的に先行し，７世紀末から８世紀前半ごろのもの，後者が８世紀後半を中心とした時期のものと考えられる．また柱穴は竪穴住居址と一部重なる部分もあるが，それ以外のところに集中してみられる箇所もある．残念ながら建物として把握することはできていないが，方向がほぼ竪穴住居址と同じであり，ほぼ該期の掘立柱建物と考えられる．

溝としては，調査区を横断するように幅３～４ｍほどの濠（１号溝）があり，古代の土器片ばかりが出土するが，わずかに明染付片が出土しており，中世末期のものと考えている．また，調査区の南東隅をかすめるように東西方向に走る溝があるが，これは近世以降のもので，段丘崖に沿って掘られたものであろう．9412や9501，9704調査地点などの溝と連なる可能性もある．

また，９号溝と10号溝は調査区の北東部を並行してカーヴしながら北へ走るが，途中で切れている．覆土中から越州窯青磁の蓋が発見されており，また，壁清掃中に鉄斧が１点出土している．９世紀後半代のものと考えられる．

８号溝はほぼ東西に向かう断面形逆台形の幅１ｍ弱の溝である．時期的には詳細な検討を経ていないが，８世紀後半代のものか，１号溝と同じ時期の可能性もある．

出土遺物には多量の土師器・須恵器のほかに，住居址から鉄製紡錘車（図28－１）や鉄鏃（同３・４）などの鉄器が現在のところ６点ほど出土している．土師器の皿に解読不明であるが，細い刻線によって文字を書いたものがある（図28－５）．220号竪穴住居址から出土した．図28－６は320号竪穴住居址の床に掘り込んだピットに埋納された土師器の小壺である．胴部に外側から径５mmほどの孔を開けており，なんらかの祭祀行為によるものと考えられる．時期的に遡る資料と考えられる．

また，住居址覆土や包含層から縄文時代後期を中心とした土器片や石鏃，黒曜石片，石斧片などが少量出土している（同７～10）．

４．成果と問題点

今回は調査途中であり，調査遺跡の性格もはっきりしないが，20基以上の竪穴住居址が検出され，とくに東側

写真33　10号溝（西から）

写真34　138号遺構（東から）

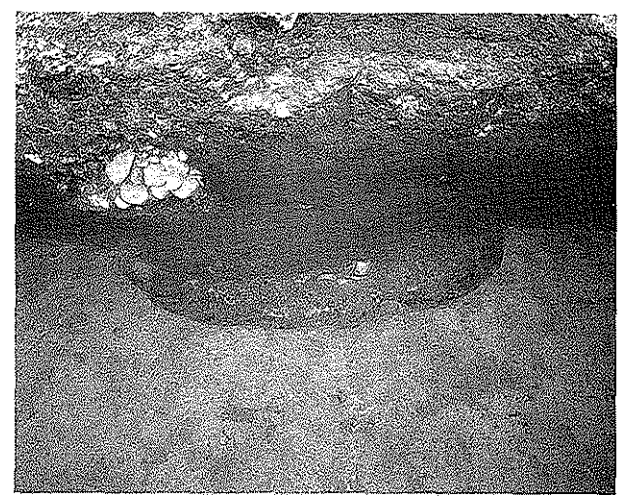


写真35　紡錘車出土状況（南から）

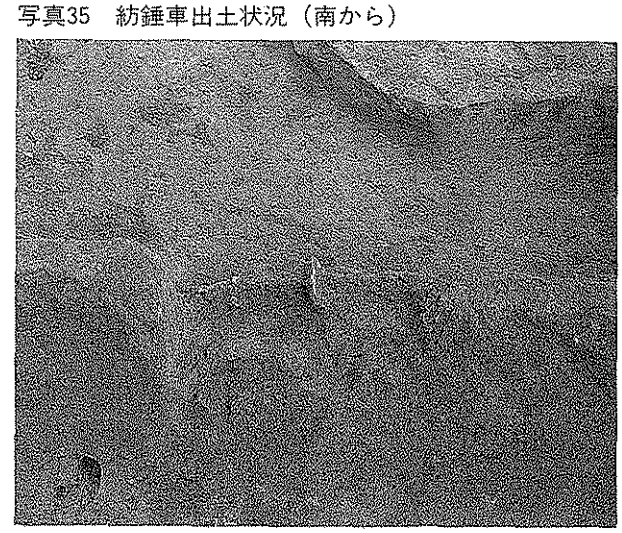


図27　2号竪穴住居址実測図（1/50）

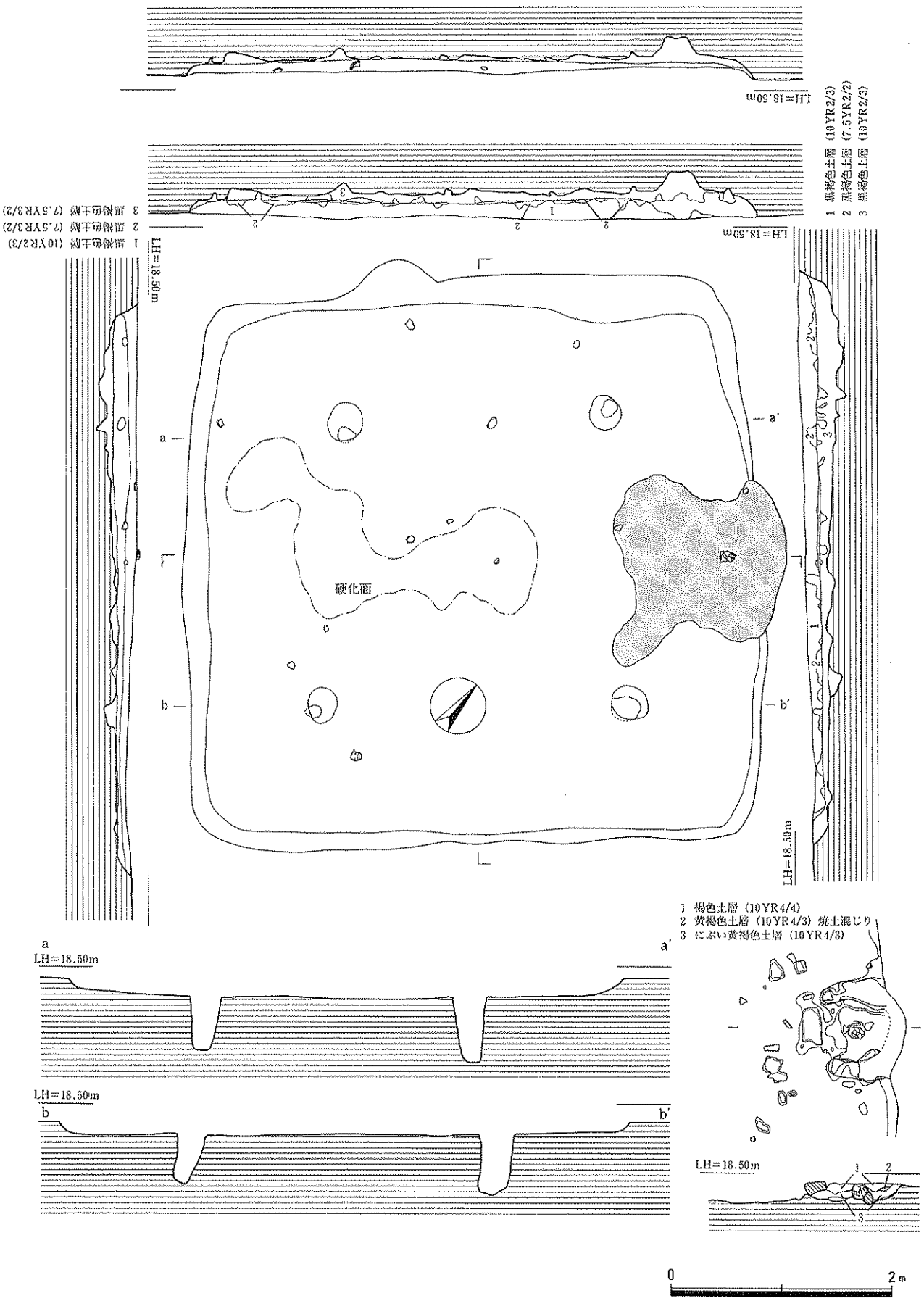
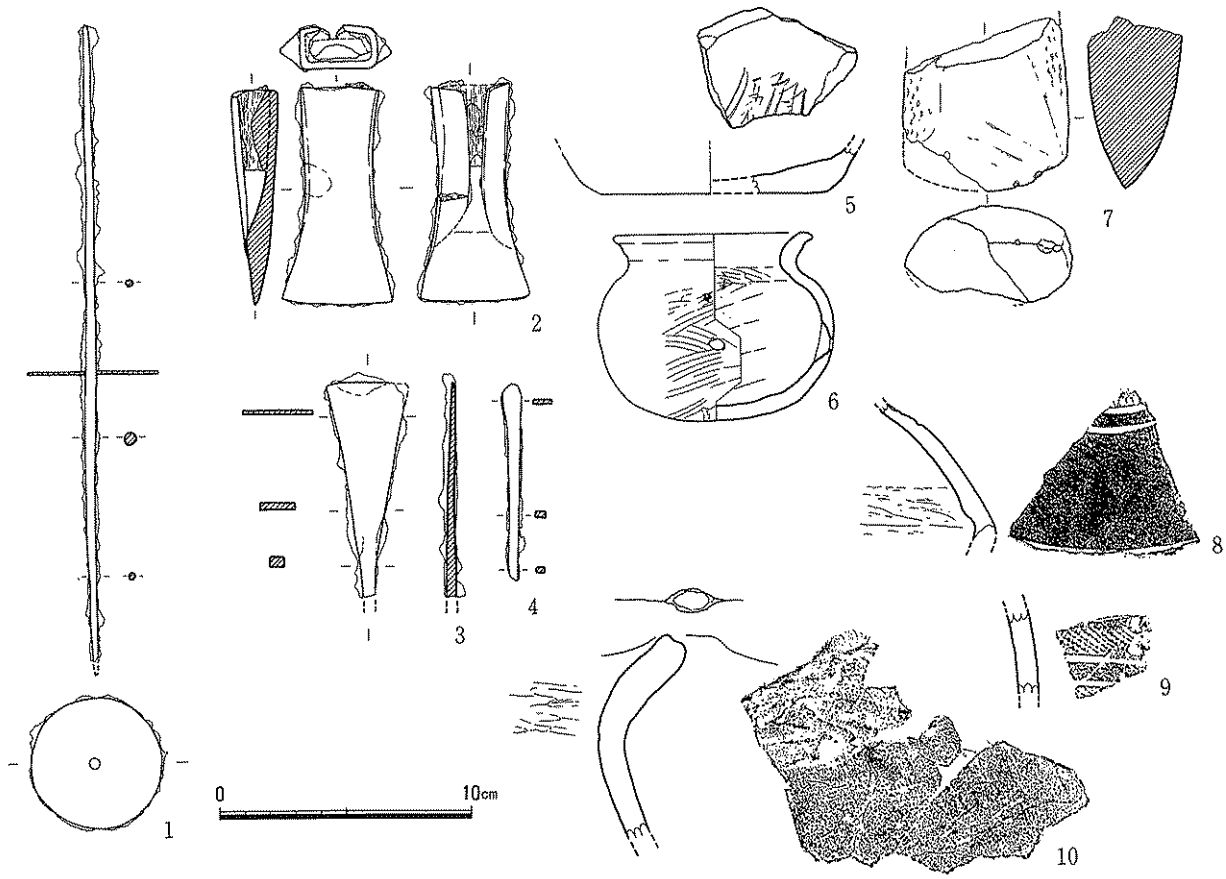


図28　9810調査区出土遺物実測図（1/3）



中央部から北側にかけて3時期以上の切り合いが認められることは，本地区周辺が古代の集落址の中心地域であり，周辺にはより多数の竪穴住居址を始めとする遺構が残存している可能性が予想され，改めて本遺跡の重要性が認識されたものと考える．

住居を始めとする遺構の覆土には焼土と炭化物がかなり多量に含まれている．西側壁中央にかかって検出された138号遺構は厚さ2cmあまりの材を残すなど，焼失住居の可能性もある．

また，今回の調査では炭化物の中に植物の種子（未同定）を発見し，簡便な道具によってウォーターセパレーション（土壌洗別）作業の試みを行った．分析を経ていないので正確ではないが，炭化した米およびその他の種子が発見されつつある．このような微細遺物（とくに穀物類）の検出は当時の食生活および生活環境を知る上で有効な作業であるが，今のところこの一帯ではあまり試みられたことがなく，今後の調査でも実施していきたい．

第III章　立会・試掘調査

III－1　黒髪北地区　(図9参照)

1．黒髪北地区環境整備事業に伴う立会調査(9802)

〈調査日〉

1998年12月16日～1999年3月9日

〈調査面積〉

150.66m²

〈調査員〉

大坪志子，小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

文化部室に伴う排水管（A地点）は，建物に沿って深さ60～90cmの掘削を行った．一部で遺構面に達したが遺構は確認されなかった．遺物も出土しなかった．

旧文化部室の上屋解体は基本的に掘削はなく遺構・遺物の発見はなかった．電気配線は幅40cm，深さ40～50cmの掘削を行った．この深さまでは現代の攪乱土であり遺構面・遺物ともに発見されなかった．

学生会館に付随する花壇（C地点）は，幅1.1m深さ65cmのトレンチを会館に沿って掘削した．この深さでは遺構・遺物の発見はなかった．

植樹は最も大きいケヤキの立会いを行った（D地点）．予定地点の地表下1.3で用水路を直した土管が出たため，急遽南側に1.5m程度拡張した．深さ2mで9802本調査において確認された弥生・縄文時代の包含層が発見された．これ以上は掘削せず，慎重に工事をするよう指示して終了した．

ハンドホールは，B－4地点で2×2mの竪穴を深さ90cmまで掘削するものであった．その結果，地表下70cmまで現代の攪乱土で，その下に茶褐色土が厚さ20cmほど堆積していた．その下は暗青灰色の水田土となり，掘削レベルでは遺構・遺物ともに発見できなかった．

水銀灯基礎は，1.5×1.5mの竪穴を深さ1.65mまで6箇所掘削した．B－1地点では，昔の建物の基礎等が入り掘削深度まで攪乱であった(図29－[1]－1)．新設の道路下に続く基礎があったため，北側・西側にそれぞれ20cm・40cm程度拡張した．壁で確認すると地表下1.25mで赤い鉱物のようなものを含む粘性の高い黒褐色が堆積していた．B－2地点では深さ約1.2mでシルト質層に達した．南北の西よりの壁近くで，25×20～23cm程度の楕円のピットが二つ発見された．B－3地点では，深さ90cmでにぶい黄褐色のシルト質層に達した．このシルト質層は厚さが40cmあり，この下に硬い地山があった．シルト質層上面での遺構は検出されなかったが，地山直上には60cmを測るような大きな石と円礫が確認された．遺物の出土はない．B－5地点では1.3mで遺構面に達したが，上部は削平を受けていた（図29－[1]－2）．遺構・遺物の発見はない．本来は1.1mの深さで遺構面に達することが確認できた．B－6・7両地点は遺構面には達しなかった．遺物の出土もない．

III－2　黒髪南地区　(図23参照)

1．工学部校舎新営排水管撤去工事に伴う立会調査（9804）

〈実施日〉

1998年4月14日

〈調査面積〉

10m²

〈調査員〉

小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

昨年度発掘調査を実施した調査区(9704)内において，既設排水管が残存しており，未調査のままであった．この排水管周辺では弥生時代中期後半の甕棺墓群が検出され，段丘崖の一段低くなった部分で，排水管設置のための掘削の影響が及んでいない可能性もあった．結果的に排水管の下は若干削片され，遺構も存在していなかった．

2．工学部3号館電設工事に伴う立会調査(9809)

〈調査日〉

1998年7月13日

〈調査面積〉

3m²

〈調査員〉

小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

掘削レベルが遺物包含層に達する可能性のあるマンホール部分の立会いを行った．1.5×1.5mの竪穴を深さ1.3mまで掘削した．その結果，北側の1/2が攪乱によって

破壊されていた．攪乱に切られるように方形遺構のコーナー部分がわずかに残っていたが，遺物等は含まれていなかった．性格は不明．土層の堆積状況は，地表下60cmまで埋土，90cmまで淡茶褐色の近世・近代耕作土，その下部が1.1mまで黒褐色の遺物包含層（Ⅳ層）である（図29－2－1）．遺物は出土しなかった．

写真36　9809調査地点立会調査風景（南西から）

写真37　同掘削状況（西から）

3．工学部9・1号館屋外埋設管工事に伴う立会調査（9808）

〈調査日〉

1998年10月6日

〈調査面積〉

30m²

〈調査員〉

小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

電線の屋外埋設に伴う立会いであるが，9号館（a地点）・1号館（b地点）ともに，掘削の深さが地表下60cmで，遺物包含層に達せず，遺物・遺構は発見されなかった．b地点では，渡り廊下を回避するため，深さ1.5mまで掘削せねばならなかったが，この範囲でも遺構・遺物ともに確認していない．

写真38　9808－a地点立会調査風景（南東から）

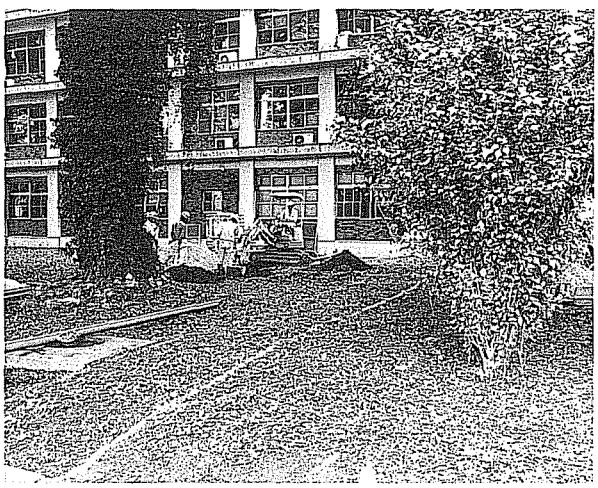


写真39　同掘削状況（南西から）

4．文化部室取設工事に伴う樹木移植立会調査（9802）

〈調査日〉

1999年9月21日～9月22日

〈調査面積〉

9m²

〈調査員〉

大坪志子，小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

a地点では1m×1mの竪穴を深さ60cmまで掘削すものであった．8箇所掘削を行ったがいずれも遺構・遺物は発見されなかった．

b地点（黒髪北地区）は直径1mほどの竪穴を深さ1mまで掘削するものであったが，掘削レベルでは遺構・遺物ともに発見できなかった．

5．理学部自然科学等総合実験棟新営支障配管替工事に伴う立会調査（9810）

〈調査日〉

1998年12月14日～12月18日

〈調査面積〉

35m²

〈調査員・参加者〉

小畑弘己．

岡田イツ代，黒木タケ子，古賀敬子，小細工洋子，番山明子，松井昭子．

〈調査概要・結果〉

排水管切り替えに伴い立会い調査を実施した．工事の進捗に応じてＴ１地点～Ｔ５地点と称して調査を実施した．Ｔ１地点（0.8×９ｍ）では地表下70cmで遺物包含層を確認，地表下90cmで地山面の黄褐色層を確認したが，攪乱が著しく，遺構は確認できなかった．Ｔ２～Ｔ３地点では攪乱がひどく，遺物・遺構ともに確認できなかった．Ｔ４では地表下90cmで地山面を確認したが，遺構は認められなかった．Ｔ５は3.5×４ｍの方形の調査区であるが，ほぼ西半分が攪乱され，東側半分に地山の黄褐色土層が残っていた．その面で直径40cmあまりの柱穴１個を確認した．遺物は須恵器の蓋の破片があり，８世紀初頭のものと考えられる．この地点は道路面より60cmほど高く，遺物包含層や地山も同じく一段高いようである．

6．工学部実験室新営工事に伴う試掘調査（9811）

〈実施日〉

1999年１月12日

〈調査面積〉

14m²

〈調査員〉

小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

敷地内に地形に平行して南北方向の２本のトレンチを設定した．東側の第１トレンチ（0.9×4.5m）では厚さ20cmの表土の下は黄白色の粘土層となり，それを切り込むように直径10cm大の河原石と灰色砂からなる建物（昭和・大正期）の基礎と思われる遺構が認められた．黄白色層の下は青灰色のシルト質砂層が80cmの厚さで堆積し，その間に厚さ10～15cmの黄色粘土層が南（白川）側にわずかに傾斜しながら挟まれていた．その下は固く締まった暗褐色の砂層となり，深さ1.8mまで確認した（図29－2－２）．

以上の状況から遺構や遺物は存在しないと思われたが，８ｍあまり西に設定した第２トレンチ（0.9×12m）では，地表下50cmで本遺跡の地山層である黄褐色土層が現れ，この上面から縄文後期と思われる土器片数点が出土した（図29－2－３）．この土層の残り具合から判断して，東側が若干削平されてはいるものの，西側を中心に遺物包含層が残存している可能性がある．よって発掘調査が必要であると判断した．調査日程は今のところ未定である．

写真40　9811調査地点試掘トレンチ土層堆積（西から）

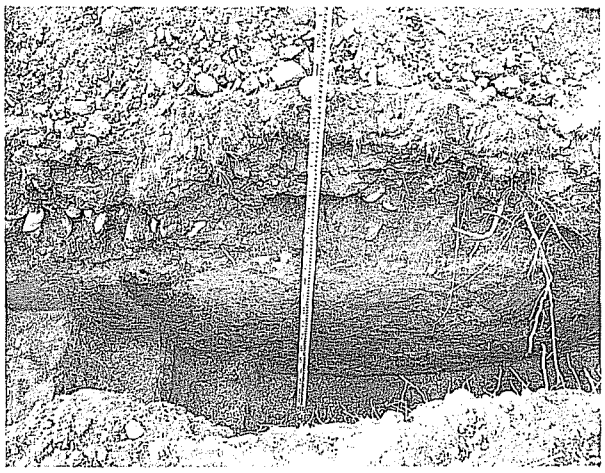
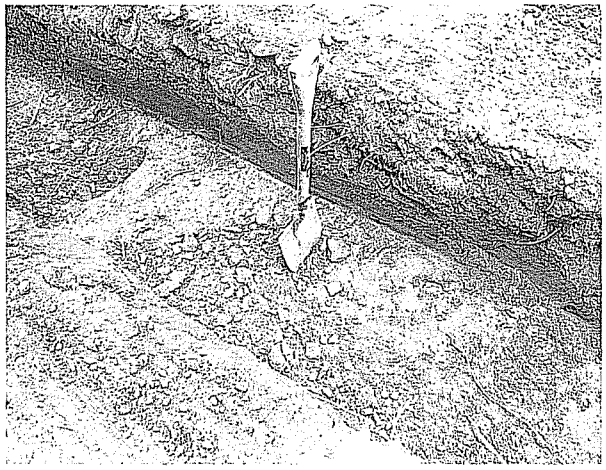


写真41　同トレンチ２遺物出土状況（南西から）



Ⅲ－3　本荘北地区　（図17参照）

1．大学病院病棟新営工事試掘調査（9805）

〈実施日〉

1998年９月28日

〈調査面積〉

10m²

〈調査員・参加者〉

小畑弘己．

新里亮人，藤原由博.

〈調査概要・結果〉

調査区に並行にトレンチ（1×5m）を2つ設定し，重機による掘削を行った．第1トレンチは地表下1mまで淡茶褐色の近世以降の耕作土（III層）があり，その下35〜50cmほどが暗褐色の古代遺物包含層（IV層）となる．その下部は厚さ15cmほどの黄褐色土層（V層）となり，地山と思われたが，その下部から厚さ20〜30cmほどの遺物を含む暗褐色土層（6層）が検出され，文化層が2枚存在する可能性が確認された(図29−3−1)．土器は古墳時代中期から古代にかけてのもので，おそらく黄褐色土層を挟む上下2枚の文化層はこの2時期の遺物包含層であろうと思われる．最下面のVII層上面で柱穴らしき遺構を数個確認した．

第2トレンチは第1トレンチより14mほど西側に設定したものである．土層の堆積状況は第1トレンチとほぼ同じであるが，V層面までしか確認していない．V層上面において東西方向の溝状の遺構が検出された．深さは60cmほどまでしか確認できなかった．古代遺物包含層であるIV層の上面の深さは1.3mであり，西側へ地形が傾斜している（図29−3−2)．

いずれのトレンチからも多量の土器片が出土した．

調査の結果，発掘調査が必要であると判断した．なお，この地点の本調査は1999月4月より開始される予定である．その支障配管移設工事に伴う調査は12月中旬からすでに実施している（4項参照)．

2．中央診療棟新営工事に伴う試掘調査（9806）

〈実施日〉

1998年9月29日

〈調査面積〉

5m²

〈調査員・参加者〉

小畑弘己.

新里亮人，富永明子.

〈調査概要・結果〉

重機による掘削を行った．既設配管等が多く，トレンチの範囲が限定されたため，建物本体建築予定地に幅1m，長さ3mのトレンチを1つ設定した．

その結果，表土下70cmまで現代撹乱土層(II層)，その下部1.1mの深さまで近世以降の耕作土層（III層）であり，ここまではほぼ本地区の土層堆積状況と同じであった．しかし，その下は暗茶褐色砂質土層が20cmほど堆積し，その下部は直径10cmほどの礫が混じる青灰色砂層となる（図29−3−3)．地表下210cmまで掘削したが，状況は変わらず砂礫層が続き，遺物の出土もないため，遺構は存在しないものと判断した．おそらく，地形的には谷部に相当するものと考えられる．

写真42　9806調査地点試掘調査風景（西から）

写真43　同試掘トレンチ土層堆積（南から）

3．薬剤部注射患者毎セット支給室取設工事に係る試掘調査（9807）

〈実施日〉

1998年9月30日

〈調査面積〉

2m²

〈調査員・参加者〉

小畑弘己.

江島賢一，熊本茂仁，新里亮人，藤本圭司，藤原由博.

〈調査概要・結果〉

調査対象地は大学病院建物の中庭にあたるため，重機が入れられず，人力による掘削を行った．建物建設予定範囲に1m×1mのトレンチを2個設定した．掘削の結果，いずれのトレンチにおいても地表下80cm下において

厚さ40cmあまりの古代遺物包含層を検出し，１トレンチでは地山の黄褐色土上面で柱穴１個を確認した．

土層堆積状況は第１トレンチを代表させて以下のとおりである．Ⅰ層(厚さ10cm)－芝土層，Ⅱ層(厚さ20cm)－現代埋土層，Ⅲ層（厚さ50cm)－淡茶褐色土層，近世･近代耕作土，Ⅳ層(厚さ40cm)－暗褐色土層，古代遺物包含層．

遺物はⅣ層を中心に土師器片が出土した．

調査の結果，発掘調査が必要であると判断した．なお，この本調査は1998年10月28日～11月20日に実施した（第Ⅱ章－２参照)．

４．大学病院病棟新営工事支障配管替工事に伴う立会調査（9805）

〈実施日〉

1998年12月17日～1999年1月10日

〈調査面積〉

205m²

〈調査員・参加者〉

大坪志子．

押方冨江，甲斐田末男，白石美智子，高松北子，堀川貞子，水上順子．

〈調査概要・結果〉

病棟新営工事に先立ち，本調査区内にある支障配管替の工事に伴う立会調査を行った．

ガス管については，先ず第３病棟南側の既設管の掘削を行った(Ａ－１～４)．配布された既設管の配置図とは実際の配管が合わず，一部拡張して掘削せざるをえなかった．いずれも遺構・遺物は発見されなかった．新設管の掘削（Ａ３－Ａ４）については掘削後に連絡が入り現状保存を要請したが，現場に到着したときは既に埋め戻されており，接続のため残された管の端部付近を確認したのみである．この部分での遺構・遺物は発見されなかったが，深さ的には遺構面に達する可能性が高い地点であり，非常に残念な思いの残る結果となった．

排水管工事は３本のトレンチと２箇所の桝設置の掘削を行った．Ｃ－１地点では２ｍ×２ｍの竪穴を掘削し，深さ1.75mで遺構面に達したが，遺構は発見されなった．遺物は土師器片が攪乱層から数点出土した．Ｃ－２地点では深さ2.4m×2.4mの竪穴を掘削し1.45mで遺構面に達した(図29－3－４)．土壙とピットが一つずつ検出された．遺物も土師器片が数点出土した．

トレンチ３本の層序はおおよそⅠ層（厚さ45cm）バラス，Ⅱ層（厚さ30～40cm）暗褐色土，Ⅲ層（40～80cm）黒褐色土で，その下が遺構面になる．Ｔ１・Ｔ２ではそれぞれ西半分で遺構面に達した．東半分は深さ1.8mほどまでは攪乱を受けていた．Ｔ２地点でピットが一つ検出された他は，遺構に伴うような遺物も出土しなかった．Ｔ３地点ではⅢ層下方で遺物が含まれることから，重機から人力による作業に替え，竪穴住居址を検出した．２基の住居が切りあった状況で竈もわずかに遺存していた．遺物は床面上に数点出土した．工事は一時中断とし，調査・記録を行った．

Ⅲ－４　本荘南地区　（図２参照）

１．医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営に係る支障配管替工事立会調査（9801）

〈調査期間〉

1998年６月26日～７月２日

〈調査面積〉

2.4m²

〈調査員〉

小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

配水管切り替えに伴う掘削に際し，３ヶ所の立会調査を実施した．場所は建設予定地の東側道路部分（図２－Ａ・Ｃ）と図書館東側（Ｂ）である．

基本層序はＡ地点の観察によると地表下54cmまで埋土（Ⅰ・Ⅱ層）で，その下が近世･近代の耕作土（Ⅲ層）となる．この耕作土は色調から２層に分離できる．地表下1.1～1.4mが本遺跡の遺物包含層である褐色土層（Ⅳ層）であるが，遺物は確認できなかった．その下部が地山の黄褐色土となる．この面においても遺構は確認できなかった．Ｃ地点においても同様の状況で，古代土器片が数片出土したのみで，遺構は確認していない．Ｂ地点は建物の基礎などにより，地表下1.3mまで攪乱層であり，遺物も検出していない．

２．医学部エイズ学研究センター･動物資源開発研究センター新営に係る樹木伐採工事立会調査(9801)

〈調査期間〉

1998年７月６日

〈調査面積〉

約20m²

〈調査員〉

小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

建物建設予定地の北側の樹木７本を伐採し，根切りするため，樹根の掘削に際し立会調査を実施した．３本分の根切りの深さ１ｍまでの掘削に立会いしたが，遺構面に支障はないと判断し，残り部分に関しては慎重に工事を進めるよう指示した．

３．医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営に係る配管切替工事立会調査（9801）

〈調査期間〉

1999年３月10日～３月31日

〈調査対象面積〉

57.5m²

〈調査員・参加者〉

大坪志子．

土田ちえみ，林田恵子．

〈調査概要・結果〉

現存の動物実験棟関連の電気・ガス・給水・排水関係の切り替えを行うもの（Ｄ地点）で，年度当初は予定されていなかった事業であり，年度末のあわただしい中で申し渡されたものである．施設部との協議の結果，排水管と電気関連マンホール部分が遺物包含層に達する深さまで掘削されるため，この部分について立会調査を実施することとした．小畑が理学部自然科学実験棟の発掘調査に係っているため，大坪が黒髪地区文化部室関連の立会いおよび大学病院病棟の１次掘削の合間を縫って事に対処することとした．現在この調査は継続中であり，調査の結果は次年度の年次報告に掲載することとしたい．

Ⅲ－５　大江地区

１．渡鹿団地東側ブロック塀改修工事に係る立会調査（9812）

〈調査期間〉

1999年３月11日～３月12日

〈調査対象面積〉

70m²

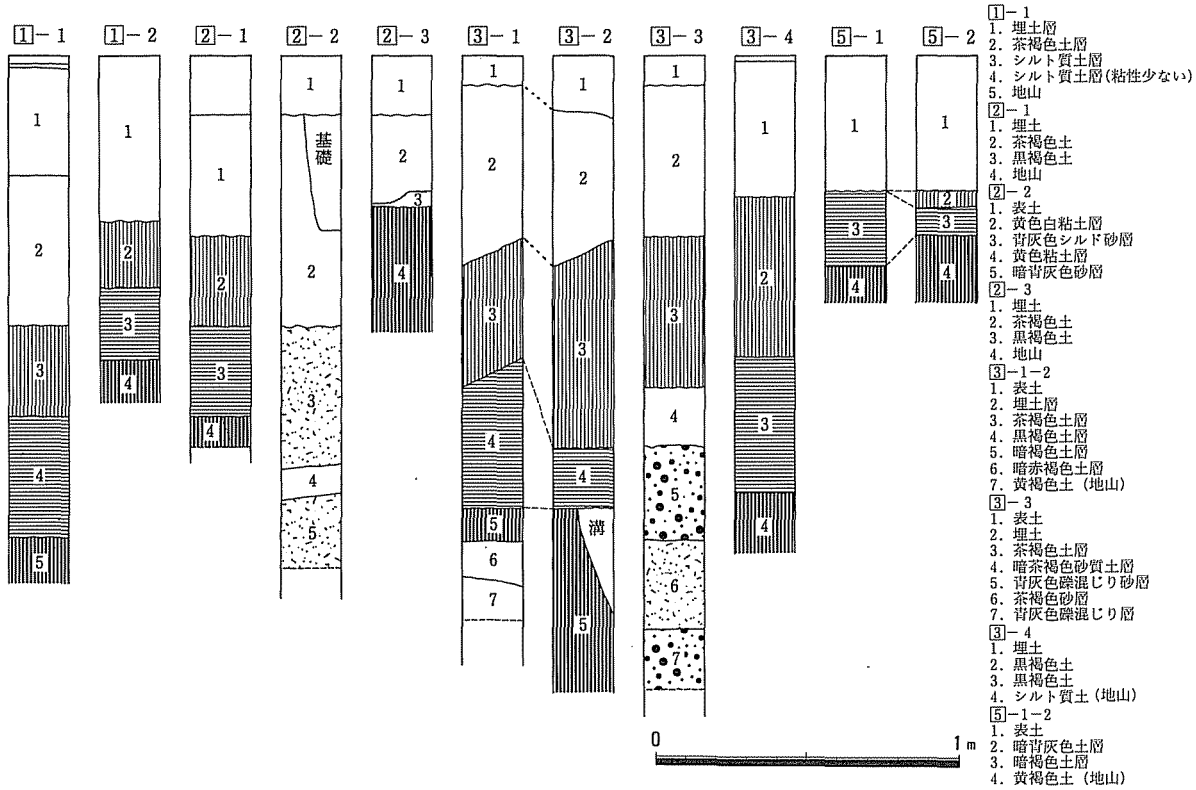
〈調査員〉

小畑弘己．

〈調査概要・結果〉

警察学校敷地との境界のブロック塀北半分の改修に伴う工事である．既存ブロック撤去後，根切りの際に立会調査を実施した．掘削レベルは地表下70cmであるが，50cmほどで黒褐色土層が現れ，60～70cmで地山の暗褐色土層となる（図29－5－１・２）．掘削時点では遺物・遺構とも確認できなかった．また，北端部では掘削レベル下においてもまだ埋土（客土）であり，遺構・遺物ともに確認していない．

図29　各地区の土層断面柱状図（1/20）



跋　文

本年度も学内に於いて新築工事に伴う事前調査が数多く企画されたが，とりわけ７月以降大規模営繕事業が同時並行で予定されたために，埋蔵文化財調査室の増員問題が年度当初に浮上した．実はこの問題は昨年12月段階で予想されていたことであり，早めの対応を御願いしていたが，学内での調整がうまく運ばず，実行段階になり急遽，学内の定員流用による助手ポストの割り当てが評議会により承認され，北野委員長より文学部教授会に対して人選の依頼があった．そこで埋蔵文化財調査委員会の文学部委員である木下尚子教授と相談して，熊本大学埋蔵文化財調査室の事務補佐員である大坪志子氏を推薦し，８月１日付で文学部助手として任用されることになった．大坪氏の後任の事務補佐員には文学部考古学コースの研究生である松嶋木綿子氏を充て，これでやっと二人調査体制を組めるようになったのである．

今年度の大規模調査だけでも工学部３号館，文科系サークル部室，大学病院，理学部・自然科学系大学院実験棟などがあり，その他小規模の調査を含めると２月末段階で調査面積の総計は3,763.7㎡にも及び，さらに４月からは大学病院の大規模な発掘調査が控えている状態で，調査室年報の作成が困難になったために，出土遺物の実測と図面の製図の一部は学外への委託に拠らざるを得なかった．それにも拘わらず整理作業は膨大であったために，小畑・大坪両氏は平日の調査終了後夜遅くまでこれに当たるだけでなく，２月以降は休日返上で年報の作成に当たらなければならない状況に追いこまれている．

工学部３号館の新築工事に伴う調査では，条理の区画線と一致する地割に沿って，溝で区画された大型建物群が検出され，黒髪地区は古代官衙を含む重要な地域であることが徐々に解明されてきている．学内の埋蔵文化財調査室を設置している九州大学，鹿児島大学，愛媛大学，岡山大学などでは概略報告である年報の他に，各遺跡ごとの緻密な報告書を作成し，貴重な学術資料として学界や市民に一般公開している．熊本大学埋蔵文化財調査室の重要資料はこのままでは，いわば眠った状態であり，「公開」に向けての１日も早い体制の整備が望まれるのである．

1999年３月10日

熊本大学埋蔵文化財調査室室長

文学部教授　甲元眞之

Summary

In 1985, Kumamoto University planed reconstruction of campus. But it was known that some of campuses are designated as buried cultural assets zone. Therefore, In the fiscal year 1994, Kumamoto University formed The Archaeological investigation committee and The Archaeological Operation Center in haste, and since then has been enforcing the excavations of the campus sites when the superannuated school buildings were rebuilt. The number of investigations in the current year is the following; trial digging investigations are 4, presence investigations are 16, excavations are 4.

We have two main campus sites in separate areas. The Kurokami area where the department of literature, the department of education, the law department, the faculty of science and the department of technology are located is included in Kurokamimachi site. The site is located at the foot of Mt.Tatuta (above 151.6m) on a low terrace (above sea level 18～25m) formed by the Shirakawa River. The site are regarded as the ancient station "Kokai" .The Honjo area where the medical science department, the medical treatment junior college and the attached hospital are located belong to Honjo site. The site located on a low terrace (above sea level 12～13m) formed by Shirakawa River, similar to Kurokamimachi site. It is 2 km from Kurokamimachi Ruins to Honjo in a straight line. In the circumstance of Honjo site, there are large ancient village sites like Oe site and Shinyasiki site.

Four large-scale excavations were performed in this year. The results are the following.

At 9801 excavation spot in the premises of the medical science department, we discovered 2 ditches of early modern times and 5 ancient dwellings and 6 ditches. As remains, including ancient earthenware sort, iron sickle, bronze belt ornament were discovered. At 9802 excavation spot in Kurokami north area, we discovered stratums containing remains of early stage of the Jomon Age and from the previous term to the middle of the Yayoi Age. The remains consist of earthenwares and stone tools like arrowhead and ax. It is the first time to us that the stratum of early Jomon Age are discovered in campus site since beginning of our investigations. At 9807 excavation spot in the premises of the attached hospital, we discovered a road mark of the early modern times and ancient 10 dwellings. We found that the direction of ancient constructions is different from former them. At 9810 excavation spot in Kurokaimi southern area, we discovered more than 20 ancient dwellings. As remains, in addition to ancient earthenwares, we discovered various iron tools like ax, spindle, arrowhead and so on. And at this investigation spot we tried to collect the minute remains by water separation of burned soil, and could obtain carbonized grains of rice and seeds.

As obtaining the valuable results in every area by these investigations, we have a new understanding of importance of buried cultural assets in the premises. From now on, we consider these results with a remains investigation and would like to make a report and public the data.

구마모토 대학교는 건물이 낡아서 1985 년 부터 새로 지을 계획을 세우고 있었는데, 대학교가 있는 구내지역이 유적포함지로 지정되어 있다는 사실을 알게 되었다. 그 때문에 재건설을 하기 전에 매장문화재의 발굴조사를 위해 급거 조사위원회와 조사실을 편성해, 1994 년 부터 조사를 해 왔다.

구내지역의 유적은 크게 두 지구로 나누어진다. 하나는 공학부, 이학부(남지구), 교육학부, 법학부, 문학부(북지구)가 자리한 黑髮(구로카미)캠퍼스로,黑髮町육적의 일부이다. 이 유적은 龍田山(다쓰타산)(표고151.6m)기슭의 저위하안단구(표고18～25m)상에 위치하며, 고대 "蚕養(코카이)" 의 역전으로 추정되고 있다. 또 하나는 의학부, 의료단기대학(남지구), 대학부속병원(북지구)이 자리한 本荘(혼조)캠퍼스다. 이 지구는 本庄유적의 일부이며, 黑髮유적과 마찬가지로 白川(시라카와)강의 저위하안단구(표고12～13m)상에 위치한다. 本庄유적은 黑髮유적으로부터 직선거리로 2km 쯤 떨어져 있다.이 유적과 근접한 곳에 大江(오오에)유적과 新屋敷(신야시키)유적등의 큰 고대 취락 유적이 있다.

1998 년도에 실시한 조사를 살펴보면, 발굴이 4건, 입회가 17건, 그리고 시굴조사가 4건이나 된다. 주요한 발굴조사 결과는 다음과 같다.

9801 지점(本荘남지구)에서는 근대 도랑2점, 고대 움집터1채, 도랑8점,굴립주건물(掘立柱建物) 1채, 고분시대말기의 도랑1점, 움집터3채가 발견되었다. 유물로는 각종 토기 외에, 청동제 띠끝꾸미깨, 철낫·토제 벼루, 기와등이 출토되었다. 9802지점(黑髮북지구)에서는 근세 도랑7점, 繩文시대 만기의 구덩이등이 발견되었으며, 이 유구 외에도 彌生시대 중기와 繩文시대후·만기의 유물을 포함한 층들이 발견되었다. 이 층들에서는 토기와 도끼·화살촉등의 석기가 출토되었다. 더우기 주목되는 것은 최하층의 황갈색시루토(silt)층 안에서 繩文시대조기의 압형문(押型文)토기가 대량 출토된 점이다. 이 점은 학내 발굴조사에서는 처음있는 일이다. 9807 지점(本荘북지구)에서는 근세 도로1점, 고대 움집터1채, 굴립주건물2채, 고분시대말기의 움집터 2채, 굴립주건물3채등이 발견되었다. 그결과, 시기에 따라서 건물의 방향이 판이하게 다른 사실을 알아냈다. 9810 지점(黑髮남지구)은 이학부연구동 건설에 앞서 현재 발굴조사중이다. 그러나 지금 까지 이 지점에서 20 채이상의 고대 움집터와 500 개이상의 기둥구멍이 발견된 점으로 보아 이 곳은 취락의 중심지로 추정되어진다. 유물로는 도끼·화살촉·가락바퀴등 각종 철기가10점 정도 출토되었다. 그 외에도 수세선별법(water separation)을 통해, 집자리에 남은 흙석에서 불에 탄쌀을 비롯하여, 여러 가지 종류의 씨를 검출할 수 있었다.

이상에서와 같이, 금년도의 조사는 큰 성과를 거둘 수 있었다. 아울러, 이들 유적의 중요성이 새로 인식되어져야 할 것이다만 본격적인 유물 정리와 유적의 분석이 아직 미흡하므로, 이후 이들의 실시와 이에 근거한 성과를 공개·활용할 필요가 있다.

付篇　1998年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1．熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則

（設　置）

第１条　熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）に、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任　務）

第２条　委員会は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

（組　織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　各学部、医学部附属病院及び医療技術短期大学部から選出された教授又は助教授各１人

(2)　大学院自然科学研究科長

(3)　附属図書館長

(4)　学生部長

(5)　事務局長

(6)　埋蔵文化財調査室長

(7)　その他委員会が必要と認めた者　若干人

２　前項第１号及び第７号の委員は、学長が委嘱する。

（任　期）

第４条　前条第１項第１号及び第７号の委員の任期は２年とし、再任は妨げない。

２　前項の規定にかかわらず、前条第１項第１号及び第７号の委員に欠損を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

２　委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

３　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（議　事）

第６条　委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決をすることができない。

２　委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（意見の聴取）

第７条　委員長は、必要があるときは、委員以外の者を出席させ意見を聴くことができる。

（調査室）

第８条　委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

２　調査室の業務、組織その他必要な事項については、別に定める。

（事　務）

第９条　委員会の事務は、経理部主計課において処理する。

（雑　則）

第10条　この規定が定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附　則

１　この規則は、平成６年４月７日から施行する。

2　この規則施行後、最初に委嘱される第3条第1項第1号及び第7号の委員の任期は、第4条第1項の規定にかかわらず、平成8年3月31日までとする。

2．熊本大学埋蔵文化財調査室要項

(趣　旨)

第1条　この要項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則第8条第2項の規定に基づき、熊本大学埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)の業務、組織その他必要な事項について定める。

(業　務)

第2条　調査室は、熊本大学(熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。)の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

(1)　実施計画の立案及び実施に関すること。

(2)　出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。

(3)　文化庁等に提出する報告書の作成に関すること。

(4)　その他必要な事項

(組　織)

第3条　調査室に室長を置く。

2　室長は、調査室に関する業務を掌理する。

3　調査室に調査員その他必要な職員を置くことができる。

4　調査員は発掘調査に関する業務を行う。

(室長等の任命)

第4条　室長及び調査員は、本学の教官のうちから学長が任命する。

2　学長は、必要がある場合は、学外の者を調査員に委嘱することができる。

(事　務)

第5条　調査室の事務は、関係学部等の協力を得て、経理部主計課において処理する。

(雑　則)

第6条　この要項に定めるもののほか、調査室の運営に必要な事項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会が定める。

附　則

この要項は、平成6年4月7日から実施する。

3．1998年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1　**埋蔵文化財調査室組織**(1998年3月1日現在)

〈室　長〉	(併・文学部教授)	甲元　眞之
〈調査員〉	(併・文学部助教授)	小畑　弘己
	(併・文学部助手)	大坪　志子
〈事務補佐員〉		大坪　志子(7月31日まで)
		松嶋木綿子
〈室内作業員〉(1998年10月～1999年2月)		土田ちえみ
		林田　恵子

2　埋蔵文化財調査委員会

委員長	北野　隆	(熊本大学工学部教授)	任期 (1996.4.1～1998.3.31)
委　員	木下　尚子	(文学部教授)	(1998.4.1～2000.3.31)
	鶴島　博和	(教育学部助教授)	(1998.4.1～2000.3.31)
	大久保憲章	(法学部助教授)	(1998.4.1～2000.3.31)
	石田　昭子	(理学部教授)	(1998.4.1～2000.3.31)
	小川　尚	(医学部教授)	(1998.4.1～2000.3.31)
	今村　順茂	(薬学部教授)	(1998.4.1～2000.3.31)
	土亀　直俊	(附属病院助教授)	(1998.4.1～2000.3.31)
	蔦川　忠	(医技短大部教授)	(1998.4.1～2000.3.31)
	秋吉　卓	(大学院自然科学研究科長)	(1998.4.1～2000.3.31)
	金原　理	(附属図書館長)	(1997.5.16～1999.5.15)
	江端　正直	(学生部長)	(1996.10.1～1998.9.30)
	森　光昭	(学生部長)	(1998.10.1～2000.9.30)
	岩崎　司	(事務局長)	(1994.10.1～)
	甲元　眞之	(埋蔵文化財調査室長)	(1994.5.16～)

審議事項

1998年4月10日　1998年度の埋蔵文化財発掘調査について
埋蔵文化財調査室経費の要求について

報告書抄録

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぽう　5
書名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報　5
副書名	
巻次	
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報
シリーズ号	5
編著者名	甲元眞之・小畑弘己・大坪志子・松嶋木綿子
編集機関	熊本大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2-39-1　TEL. 096-344-2111(代)　FAX. 096-342-3150
発行年月日	1999年3月31日

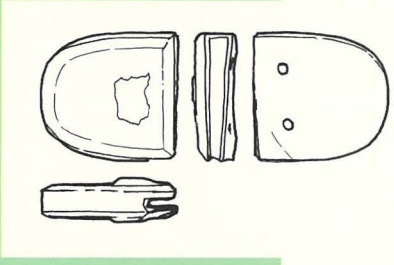
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろかみまち 黒髪町遺跡 (９８０２地点)	くまもと 熊本県 熊本市 黒髪	43 201		32° 48′ 40″	130° 43′ 40″	19980925 ～ 19981106	578m²	学校敷地内の開発事業に伴う
くろかみまち 黒髪町遺跡 (９８１０地点)	熊本県 熊本市 黒髪	43 201		32° 48′ 35″	130° 43′ 50″	19990121 ～ 19990325	1,098m²	学校敷地内の開発事業に伴う
ほんじょう 本庄遺跡 (９８０１地点)	熊本県 熊本市 ほんじょう 本荘	43 201		32° 47′ 25″	130° 42′ 55″	19980728 ～ 19980910	972m²	学校敷地内の開発事業に伴う
ほんじょう 本庄遺跡 (９８０７地点)	熊本県 熊本市 本荘	43 201		32° 47′ 35″	130° 42′ 50″	19981028 ～ 19981120	175m²	学校敷地内の開発事業に伴う

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒髪町遺跡 (９８０２地点)	集落址	縄文・弥生 奈良・平安	土壙　3 溝状遺構　7	縄文早・後・晩期土器・弥生土器 古代土師器・古代須恵器 石鏃・石斧	
黒髪町遺跡 (９８１０地点)	集落址	奈良・平安 中世・近世	竪穴住居址　24 溝状遺構　5 土壙　2 柱穴　500	縄文後期土器 石鏃・黒曜石・石斧 古代土師器・古代須恵器・鉄製紡錘車・鉄鏃	
本庄遺跡 (９８０１地点)	集落址	奈良・平安 近世	竪穴住居址　3 溝状遺構　8 掘立柱建物　1 土壙　1	古代土師器・古代須恵器・古代瓦・同鉄器 古代鍔帯・土錘・古代鞴羽口 縄文後期土器・黒曜石片	
本荘遺跡 (９８０７地点)	集落址	奈良・平安	竪穴住居址　6 掘立柱建物　6 道路　1	縄文土器 古代土師器 古代須恵器	

熊本大学埋蔵文化財調査室年報 5
— 1998年度 —

平成11年 3 月25日　印刷
平成11年 3 月31日　発行

編集兼発行者　熊本大学埋蔵文化財調査室
熊本市黒髪 2 －39－ 1
電話 (096)344－2111
(内線3832)
印刷所　シモダ印刷合資会社



Published by
Archaeological Operation Center
The Kumamoto University
Kumamoto, 1999